

道頓堀



藤月

夏三画



小波

甲子年
六月二十日

パームオイル 松竹石鹼

日本に初めて

完成せる石鹼

「パームオイル」は純粹の植物性油で絶対に酸性なく、石鹼原料として最も優秀なものであります。

歐米には既に之を主原料とした高級石鹼がありますが、日本では此度發賣された松竹石鹼が全く唯一最初のものであります。

而も松竹石鹼は野村南洋事業部特産の最良「パームオイル」を主原料として居ますから決して目にしみず、肌を荒さず、完全に皮膚を清潔に滑かにします。従て洗粉、クリーム等を使ふ必要は全くありません皮膚の保護上最も有効な石鹼として推奨する事が出来ます

有名化粧品店・小間物店・薬店にあり

製造元

松竹石鹼工場

發賣元

大阪朝日

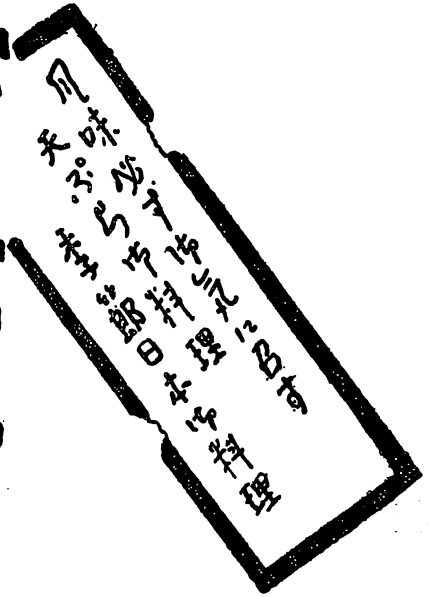
朝日堂株式会社

御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では是非御會食を



吉屋食堂



道頓堀戎ばし北詰

支店

大阪支店 北新地裏町
京都支店 木屋町ドングリ橋



中村 傳八



深井 半郎



尾上 菊三郎

道頓堀 (長月號) 第三年 第二十四輯

表紙……………(其小唄夢廊)……………大塚 克三 畫

口繪
◆屏
◆中座「極彩色娘扇」延若の盲兵助◇嘉門と七郎右衛門舞臺面◇「出世の船唄」舞臺面
◇「極彩色娘扇」秀調の兵助女房お牧、小鷹の控筆松◇「出世の船唄」龜藏の九郎藏の妹
お糸◇「極彩色娘扇」壽美藏の藤兵衛、延若の兵助◇其小唄夢廊「秀調小紫、壽美藏の妹
權八◇松竹座「後面秋玉川」長三郎主演舞踊舞臺面◇角座「猫の目」舞臺面◇浪花座「心
の繞り」淡海の正木賢二、十太郎の敬助◇辨天座「返討崇禎寺馬場」波多の遠城治左衛
門、山口の生田傳八郎、野澤の安藤喜八郎

論說
◇現代歌舞伎青年俳優に與ふ……………高安吸 江(二)
◇「膝栗毛」提唱……………高原慶 三(四)

中
◇極彩色娘扇(芝居物がたり)……………松鼻莊主人(六)
◇嘉門と七郎右衛門(芝居ばなし)……………津守凡太郎(一〇)
◇其小唄夢廊(芝居見たま)……………泉良太郎(四)

○出世の船唄「雜考、所感」……………行友李風(一八)
○「極彩色娘扇」管見……………伊原青々園(二〇)
○上狂言の「盲兵助」……………石割松太郎(二二)

○盲兵助覺え書……………高谷伸(二四)
○盲兵助に就て……………川尻清潭(二六)
○小紫と權八(芝居短歌)……………木村富子(二九)

座
○其小唄夢廊……………中内蝶子(三〇)
○「權八」問答……………高原慶三(三二)
○秀調、壽美藏、龜藏三君へ……………京極利行(三四)



道頓堀各座

『盲兵助』のこころも……………實川延若(三六)
 子をつれて……………坂東秀調(三七)
 躍るころろ……………市川壽美藏(三九)
 浪花戀しく……………市村龜藏(四〇)
 初舞臺の坂東又太郎……………(三八)

松竹座

後面萩玉川(歌詞)……………林長三郎(四二)
 『後面萩玉川』へ出演について……………食満南(四五)

浪花座(淡海一派)

昔のナンセンス……………楠本木念仁(四四)
 浪花座狂言案内(解説、配役)……………(四四)

角座(松竹家庭劇)

只今工事中……………澁谷一雄(四七)
 御挨拶に代へて……………曾我廼家十五(四九)
 角座狂言案内(解説、配役)……………(四六)

辨天座(新潮座一派)

辨天座狂言案内(解説と配役)……………(四八)

第三回 技藝座合評會

俳句……………(株義選)……………(五五)
 紀文三代はなし……………(一九)
 『盲兵助』の型……………(二一)
 年極讀者懸賞發表……………あふむ石……………(二三)
 其小唄夢廊の書卸と由来……………(二五)
 ………………(四一)

出世の船唄(中座上演戯曲)

行友 李風 (五六)

編輯後記……………石原泉……………(二九〇)
 挿畫・カワト……………大塚克三……………(三)



お芝居の幕間と

お歸りにはお揃で

食慾をそゝる初秋のお献立が

お待ち申してゐます

圓
梅
圓

お芝居でのお食事は食堂にて……………

お歸りには白鷹にて一寸一ぷく江戸すしを……………

中座食堂

本店 大左衛門橋北一丁
電話 南六二二七番

スキナ 脂取紙

あぶら

品質……の……優良……は

既に定評ある!!

スキナ あぶら取紙

◆……………御愛用を……………

道頓堀の各座、及び各地化粧品店に販賣せり
お買求めの節は「スキナ」と御指定を乞ふ



現品縮圖
スキナのぶら取紙

“GREASY SWEAT ABSORBER”

Take off a leaf of Greasy Sweat Absorber and pass over the face. The effect is that all greasy sweat will be soon absorbed and extremely light broom will be left.

本 舖
ス キ ナ 屋 號
中 田 商 店
大 阪

留板價券旗

製印真幟

綴帳
フニ

梅原商店

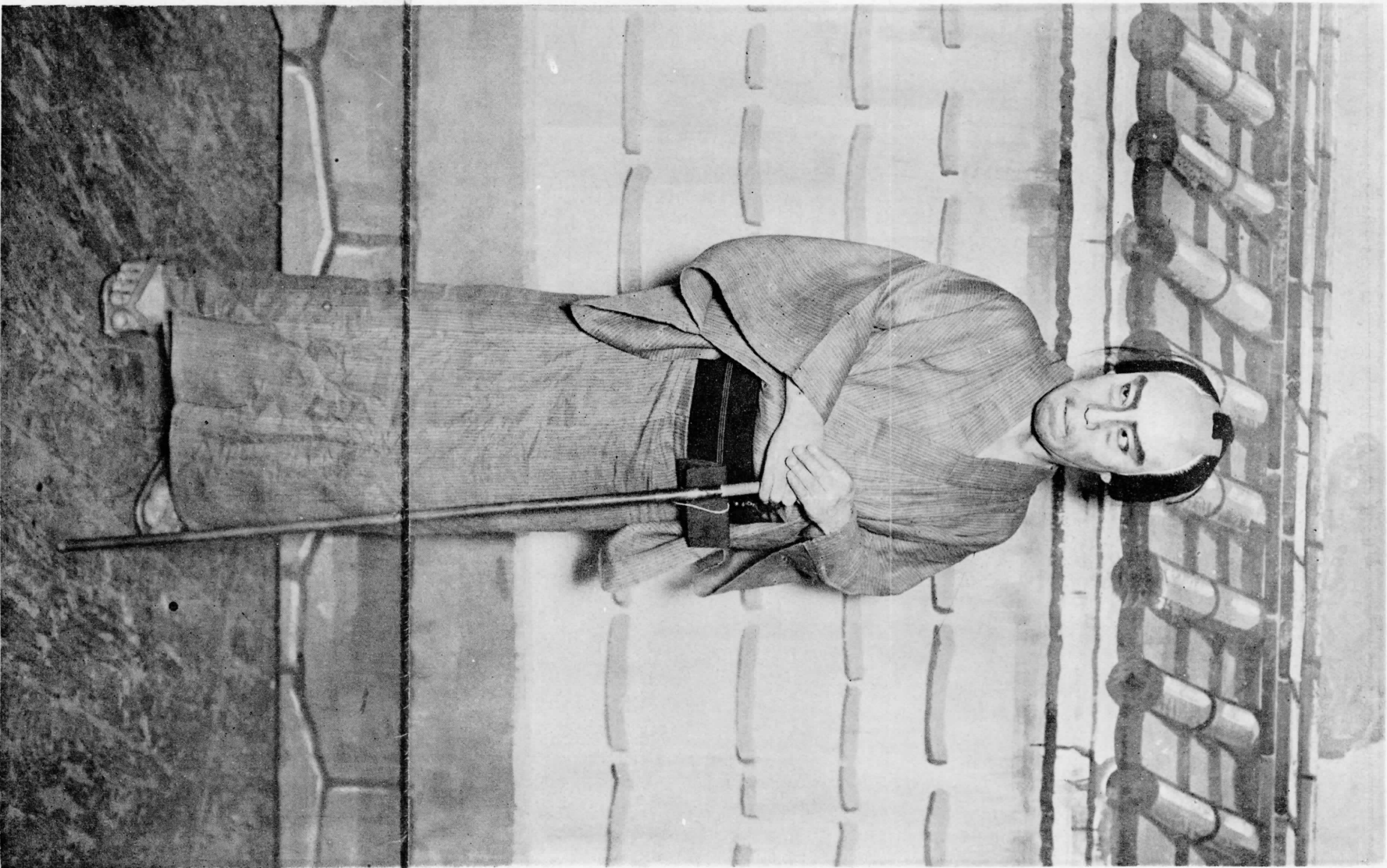
神戸市

楠社西門

番五一六一町元

電話

中 座 九 月 興 行 上 演



中 幕 下 極 彩 色 娘 扇 延 著 の 盲 兵 助

中 座 九 月 興 行



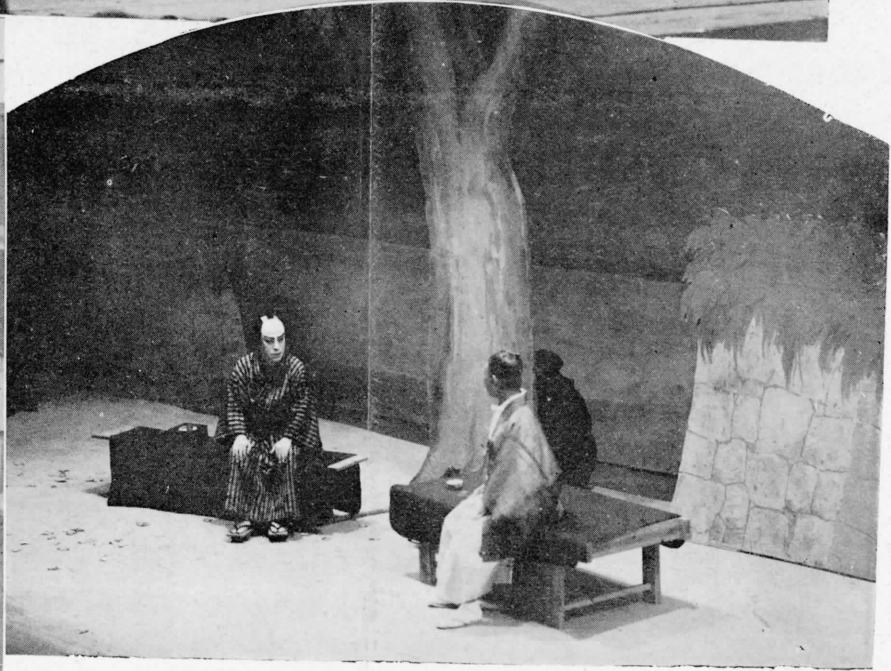
一 番 目 出 世 船 唄
龜藏の九郎藏お糸



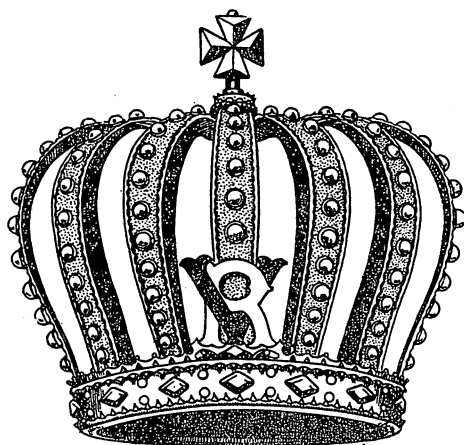
中 幕 下 極 彩 娘 扇
小 鷹 的 筆 松 秀 調 的 女 房 お 牧



面 臺 舞 「 門 衛 右 七 郎 和 嘉 門 」 上 幕 中



番 目 出 世 船 唄 犬 吉 的 內 宮 延 若 的 五 十 嵐 左 衛 門



Restaurant Vitamin

橋 齋 心

曲 進 行 ン ミ タ イ ヴ

いさ下投惠御を譜名すまし致集募を曲作

ウイタミンの名こそ美はし
あまかける天使の御名か
地に咲ける花のたよりか
ものさしてうたはざるなし

人通り——あゝ心齋橋の
こゝ過ぎて身はすこやかに
いのち長し、不壞の殿堂
ゆきずりにたゞへざるなし

美はしの侍べる人も
河づらをなで行く舟も
禮讚す電車、自動車
路ゆかば、忘るゝものなし

ウイタミンは生命の泉
よろこびミタのしみのかて
學問ミ藝術のマナ
全世界好まざるなし

番三三五南電

堂 食 ン ミ タ イ ヴ

詰南橋齋心

名大
物阪

舟

川

魚

う

な

ぎ

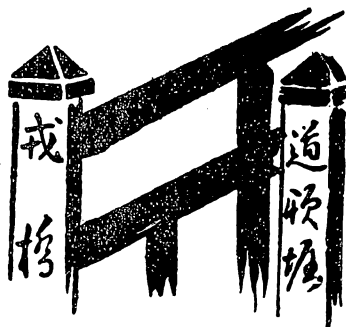
御

生

料

州

理



道頓堀各劇場へは……

鰻まひし並に調理品一切
迅速丁寧に仕出しいたし
ます

御観劇の砌りは何卒御電
話下さいませ

電話南

(シバト) 四八二〇番
(クイニ) 九五二番



中座九日月興行上演



中幕下極彩色娘扇

壽美藏の朝日奈藤兵衛 延若の兵助

中座九日月興行上演



二番目 [其小唄夢廓]

壽美藏の白井權八 秀調の小紫



香氣復郁・品質優良
價格低廉ナルハ其ノ名ニ背カ
ザル「レコード石鹼」ノ價值



大阪市北區金屋町一丁目二五

株式會社

大阪レコード商店

電話北五七二四番

氣の利いた新人の贈りもの

一圓・二圓・三圓・五圓の八種
十圓・十五圓・廿圓・五十圓

御鞆劇代のほかに御召上り物、各賣店の御買上品本家舎屋直
營の案内所等一切の御支拂に通用致します
様式は十圓券は一圓券十枚、一圓券は二十錢券五枚にて離れ
るやうになつてゐますから至極御便利です

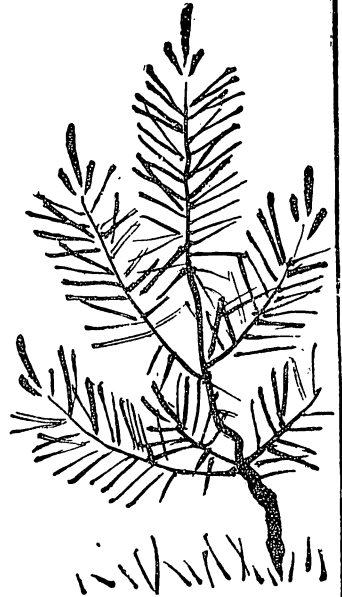
類種の頃手お

松竹共通観覧券切手

所賣發の近手お

大阪南區久左衛門町八
松竹合名社
（電南二四〇・六六八五）
大阪道頓堀
角
（電南六九五）
大阪東區高麗橋心齋橋筋
プレイガイド
（電全三〇九・三九九五）
京都市河原町蛸薬師上丸
松竹合名社
（電本局②二三五二）

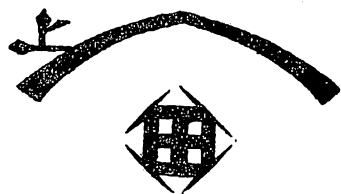
其他各座にては三日前より場席の取れる
指定番號入前賣切符も發賣してゐます





達用御省内宮

社會式株油醬子銚

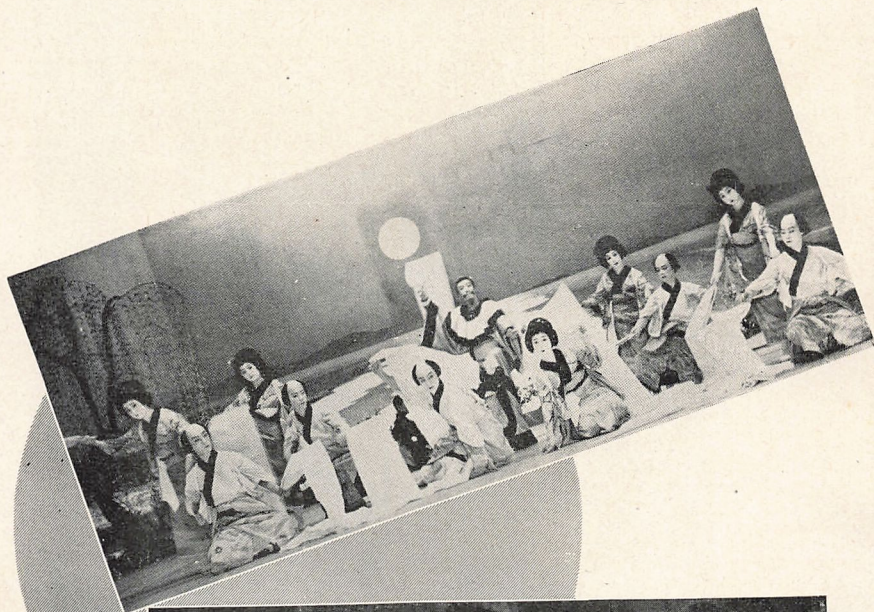


油醬夕ゲヒ

松竹座九月公演

舞踊「後面萩玉川」の舞台面

林長三郎主演



辨天座九月興行 [實說返討崇禪寺馬場]

波多横の遠城治左衛門 山口俊雄の生田傳八郎 野澤英一の一安藤喜八郎

浪花座九月興行

「心の縦び」

正木賢治 淡海
伊能敬助 十太郎



「眼の猫」 行興月九座角

衛兵徳上野の五十 郎一源の織小 枝政妻の津米

壹
番

大 陸 設 備 と 高 級 家 族 室 ・ 道 頓 堀 本 日 橋 東 へ 壹 丁



裂 小・具道小

貸 衣 裳

素人演藝會

宴會の催物

春秋温習會

婚禮の衣裳

松 竹 衣 裳 部

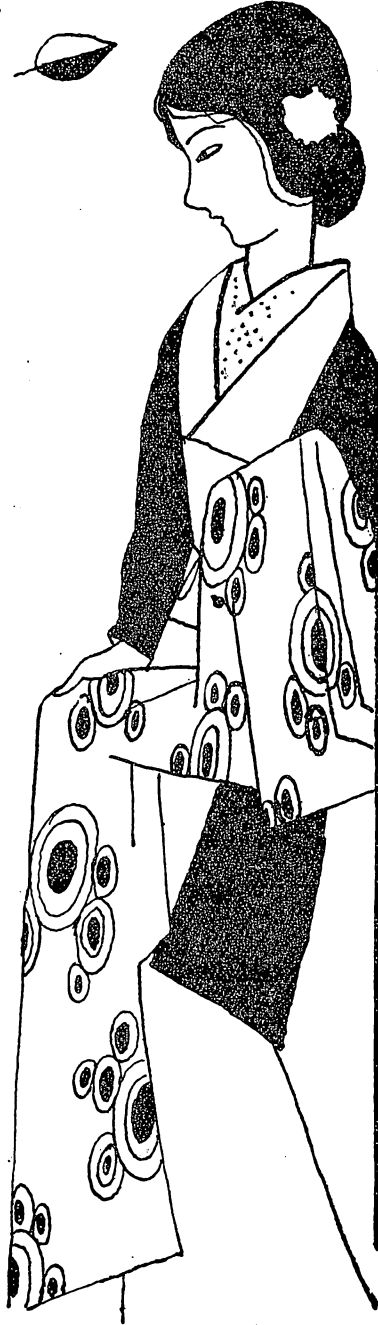
本店

大阪市南區久左衛門町八

電話 南一四一七八番

東京支店

東京市淺草區並木町十五
電話 淺草五五九九番



(其他一般の衣裳多少に不拘御利用下さい)
御來客の御相談に應じ便利よく取計ます

日本映畫は……道頓堀朝日座へ……

松竹キネマ株式會社

監督 村野芳亭・作原 雄正米久

戀の日の夏

演 共子美惠雲八七嘉田島 養眞良奈 吉祐田岩

監督 小石榮一・作原 三泰島冬

笠雨時

演 助子絹水若・演主 郎二長林

監督 池田信義・色脚 作原 梧高田野

末くゆの愛

演 主 子 み ず 島 栗

監督 星 哲 六

者 藉 狼

演 主 子 晶 早 千・助 之 壽 東 阪

監督 島 津 保 二 郎

くらひ春

演 主 枝 靜 田 龍

映 無
畫 字
幕

いづれも九月中に封切られる我が社の優秀映畫でございませう

大阪で初めての試み

果然！大人気……

赤玉の廓町

座敷は早い者勝ち！今すぐ

(電話で申込んで下さい)

赤玉の

宗右衛門町氣分

肉と料理

赤玉日本料理部

座敷名

- 新富田屋
- 新大西屋
- 新伊丹幸
- 新河合
- 新大和屋
- 新富里
- 新喜代梅
- 新加賀屋
- 新桂家

天神橋筋五丁目市電停留場前
電話堀川三一九番

第廿四輯

雜誌 · 新劇 · 月刊

第三年

通類編





ばんろ

現代歌舞伎青年俳優に與ふ

高 安 吸 江

こんな題で何か書けよのどであつたが、第一私は今の處議論めいたものをかくべき氣分がでない。それに又私が多少も知つて居る青年歌舞伎俳優といふのは、唯次の時代の會で時々顔を合はせる諸子だけである。それでとにかく何か書かうとすれば自然それ等の人々が目標とせられ、從て最近第三回の公演をやつた伎藝座が主題となるのは已むを得ない事であるのを前以て斷つておく。そこで諸君、君達が自身で自身の時代を造るべく、強い信念と熱い希望をもつて奮ひ立つた一昨年と、熱心な古老先輩の指導に服して至難な型物なきを忠實に演りこなすべく努力した昨年に次いで、今回は大時代の小栗に近松物の萬年草等でまた異つた方面の體驗を経、豫期以上の効果をあげ得たのを私は心から慶んで居る。

しかしその中で推奨に値するものは何と云ても萬年草である。それは近松の特色ある作品である事と、演出者その宜しきを得、且又諸子の年輩それ自身が強味であつた事の外に、諸君一同が此作柄を理解し、それに興味をもち得た結果に外ならなかつたであらう。

小栗の成績が此れに比べて大分遜色を呈したのは、一つは諸君がもうこんな古臭い狂言に共鳴し得ないで、萬年草同様の熱を缺いた爲かも知れない。此間の合評會でもかなり議論があつたが、此狂言の愚作である點について誰しも異論はあるまいけれど、併し是を今度の伎藝座で出したのは決して無駄でなかつた。私は思ふ。

何でもかでも理詰でなくば納り兼ねる、セ、コマしい窮屈な現代に、其荒唐無稽な點に於て暫や助六等に（敢て同等と云はぬが）近い、古風で大甘な味をもつ小栗の様な狂言は少く共一種の緩和劑で、或意味に於ける慰安になり得るものである。諸君は今日の芝居國に猶存在して居た、こんなノンビリした理屈スキの別世界を諷解し、其氣分に同感し得る事により、諸君自身の藝を小利巧な、氣がきゝ過ぎて薄ッペラで、底力に乏しいものに墮してしまふのから救ひ出さねばなるまい。

次に又平常殆ど下積みにはかりなつて居る諸君が、いつかはミ腕をさすつて隠忍し渴望して居た年に一度の此好機會であるからその上演慾を満足せしめ得る程の役を勤めて、日頃の溜飲を下けても見たからふ、それには小栗の如く、時代物に出て来る各種の役を盡く網羅して居る狂言で、諸君のすべてが皆相當な配役を得、しかもそれ等が性格上たいした難役でないだけに、技巧上の練習を思ひ存分やつて見られるのは誠に結構な事ではないか。

しかし諸君の小栗が大成功でなかつた他の原因として、斯く古典的技巧を習得すべき絶好の機會に遭遇しながら、不幸にして諸君は之を捉ふべく未だ充分な準備をもたなかつた事、其外また私が昨年既に指摘しておいた發聲上の工夫不足や、姿態動作のそれに似た缺點なきを數へねばならぬのは私の尤も遺憾とする處で、諸君の中には所謂呂が開けず、聲が腹から出ないと同様に、形の上でも臍下丹田に力が入らぬため腰がきまらず、頭ばかり大きくて下半身がみすほらしかつたのが随分見受けられたのである。是等に對しては聲樂の外に、踊よりは舞、それよりは仕舞に常に腹力増進の工夫を怠らず、猶他山の石として人形や能を研究的に参観し、且又故名優（例へば故園菊）の寫眞を自個のものに比較して我短所の發見に努める等、諸君が此後注意すべき點は大分ある。花實相伴ふ傑作の歌舞伎劇試演はもこより歡迎する處であるが、それと共に私は時たまこんな時代離れのしたもの、上演を勧めるのは上述の理由によるからである。但今回の如く散漫で時間を浪費する事を改め、猶ヨタに陥らぬやうそれ／＼先輩の嚴重な監督を要するのは勿論である。私の見た小栗の出演者で今日残て居る人は鴈治郎（小栗にヒツヤミ）巖笑（お駒）箱登羅（照日の前）齋五郎（お言葉の中）位である點から見ても、何に限らず古い狂言は今の中によく／＼先輩に問ひたゞし其の教を乞ふておかねばならぬのを痛切に感ずる。それで感受性に富む諸君は是等を皆自家藥籠中のものにし、やがて百尺竿頭一步を進むべき、大抱負をもつて次の時代に活躍せられん事こそ望ましい次第である。



熊首目
セハ

大阪人を描いた

「膝栗毛」提唱

高 原 生

十返舎一九の「膝栗毛」の舞臺化は私の年來の持論である。この春「舞臺評論」誌上で魁車君に「膝栗毛」中の河内屋太郎兵衛俗に河太郎の舞臺化をすゝめたこゝがある。

こゝろで八月の歌舞伎座で木村錦花君が脚色して猿之助三友右衛門で「膝栗毛」の彌次喜多を演じたこゝろ歌舞伎座として前古未曾有の大當りをこつたこゝろである。私は會心の笑をもらさずにはゐられなかつた。私の考えが的中したからだ。

木村錦花君の話では今年の四月頃から大谷社長にこの腹案があつたそうである。さすがに大谷社長は目が高い。

山上貞一君がこの間話したこゝがある。「猿之助三友の彌次喜多を一つ大阪へ持て来たらさうだらう」ミ、山上君はいふ。

私はハッキリした返事をしなかつた。理由は第一に彌次喜多の江戸子の洒落が大阪人にうけるかさうかを考へた。第二の理由は私の年來の持論であるこゝろの「膝栗毛」の舞臺化を大阪の舞臺で東京の役者に先を越されるこゝろが、郷土的遍愛心から一寸口惜しかつた。第三の理由は十返舎一九が、江戸子の彌次喜多を書いてる他に、上方者の河太郎や、三十石の塲の隠居のやうな典型的な大阪人を書いてるんだから、大阪の役者に是非河太郎を演らせて後、猿之助三友の彌次喜多と交換したい……こゝろが私の理想であつたからだ。

三十石の塲の面白さ、それはシユビンミ土瓶をまらがへて、酒を尿さまらがつて呑む可笑味が一寸會我廻家式だが、本文を讀んでゐても吹き出すにゐられぬ趣向だからこれを舞臺にかけたらさんなに笑殺されるだらうと思つた。

この塲に活躍する大阪の、えい衆の御隠居はんが實にうまく書けてゐる、鷹揚で屈托ないところ、甚だ失禮だが、我等が畏敬する高安吸江先生にお年を加へたらあゝした御隠居が出来やしないかと思ふのである。あくさる、ねばり氣のある大阪人のほびこる現代に、我等の祖先にあゝした洒落者がゐたこゝを追想するだけでも愉快なこゝだ。

河内屋太郎兵衛の河太郎、これは餘りに有名過ぎる、三田村鳶魚氏の雜誌「歌舞伎」八月號に所載の文を掲載しやう

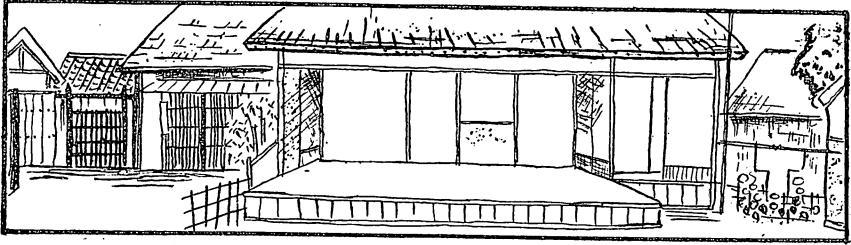
この河太郎は明和安永度の人物で土地の資産家なのだ、河太郎は素養のある識見のある彌次さんであつて、ペランメイ型でなく旦那はん型の「ざまア見ろ」を往く人だ。好んで「ざまア見やがれ」を瀕發した、河太郎一代噺や通者茶話太郎や鳩觀雜話がその様子を傳へてゐる。

上方の彌次さんで、えい衆で識見がある。こんな典型的な我等の祖先をさうして大阪の役者衆が舞臺にかけやうとしないのだ。柄ゆきからいつて茶氣のある點からいつて魁車君に切に望む次第だ。

先輩南木芳太郎君はサンデー毎日會我廻家合評會席上、やはり河太郎の取材をほのめかしたが、私はひそかに反對した、河太郎の味ひ或は氣品はトテも會我廻家式でないこゝ、堺人である五郎君の強氣或は霸氣一方なのは河太郎には絶對に不向なるが故に：

猿之助 大友が彌次喜多で先鞭をつけた以上、大阪でも敗けてゐられない、河太郎は是非大阪側で先鞭をつけて貰はねばならぬ
敢て魁車君一人ミ指名はしない、我童君、延若君、福助君、壽三郎君多士濟々だ。

脚色者、これも脚色のやうな低級な仕事はいたさぬなんていふやうなこゝをいはずに純粹の大阪人の大西利夫君あれば、新進の鳥江鏡也君もゐるこゝだ。更に望むべくくんば圓熟の大森痴雪、老巧の食滿南北翁さいふやうな巨星に御苦勞が願へれば天に昇つた喜びだ。相談相手には純粹の大阪人にして、博覽、南木芳太郎君あり、況や生き手本ミして高安吸江先生あるに於ておや。



芝居物がたり (中座九月狂言)

極彩色娘扇

松鼻莊主人

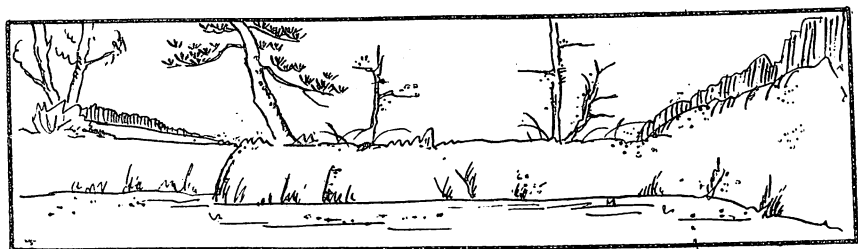
(上巻) 寺子屋兵助の内の場

仁義禮智信を書いた額が貧しい此の家に唯一つ光つてゐる。寺子達は百人一首の手習に餘念がない。兵助の妻のお牧は釜戸をくべつ、寺子の差圖、それに頼まれもの、縫物の催促の断りをしなげればならない身だ眼かいの見えぬ兵助に不自由をさせまいと働き續けても女の手一つでは仕方がない。お牧の兄の眼兵衛が丁こ掛けりや半こ出る間の悪さに吐鳴り込んで来た。お牧が盲目の兵助を

夫婦になつてゐるので米代薬代に兄に無心を言ふのだから一層寺屋よりばくちの寺屋をするか、ばくちのかたに連れ出さうか迫つた。そして昨夜出逢つた大松屋の手代段八は親方の金を大分したためて暇を取つた。そこへお牧を嫁入させやうと言ふ。それが嫌なら金を返せとの難題だ。寺子達はその様子を驚いて逃げて歸つた。兵助は聞かせつなさに思ひ付いて碁盤の碁石を財布に入れて金を見せ二人の中へミさぐり出た。兵助はつこりミ長年かけた頼母子が落ちて一貫目程金が入つた。それを元手に進じやうミ財布を差出した。眼兵衛は大機嫌だ。お長者様、結構な御殿さとは子供筆松にまで愛嬌をまいて歸つて行つた。お牧は今更に兵助にすまないミ詫びた。兵助は大分に快くなつたから醫者も薬も止めるミいふ。お牧はその顔色の悪さ、それに毎朝痰に血が交つてゐる

役配

盲兵助	朝日奈藤兵衛
延壽美藏	橋三郎
若	小大
八百藏	八吉
秀調	手代喜藏
兵助女房お牧	松八



るのを知つてゐるからほんの心安め
だまは直ぐに解つた。お牧は此間母
さんに用があると言ひ今朝手紙が來
たのは何事か尋ねた。兵助は胸を
打たれながら、母よりの用は腹がわ
りの兄が相場で金儲け母は御隠居、
兵助も眼が見えねば女夫も引取つ
て養つてやらうとの手紙だミ口から
出まかせを言つた。お牧は嘘だミ知
りつゝも喜んで見せた。兵助は今
間に母のミへ出かけやうといふ。
お牧は慌て、頼まれもの、仕立着を
着せてやる。兵助は久振りで旦那氣
取りに喜んだ。今日は夫婦で道行せ
うミ勇んだもの、お牧には着る物が
ない。この春からの薬代に髪飾り衣
裳まで質屋で金にかはつてゐるこ
は盲目の兵助にもよく解つてゐた。
こんな貞女が腑甲斐ない男を持つ
のが可愛想だミ兵助は泣いた。貧苦し
ても親子三人一緒に居ればこんな目

出度こはしないミお牧は涙の中に笑つた。筆松に杖をこらせ
て兵助はミほミほミ母のミへミ急ぐ。お牧は今朝の母から
の手紙に五十兩といふ大金入用を知つてゐた。一層眼兵衛の
言葉通り身を捨て、夫へ金をみつがうか考へてもみた。そ
こへ大松屋の手代段八がやつて來た。段八はお牧の兄眼兵衛
ミは懇ろな仲で、今度町へ屋敷を借つたについてよい女をミ
思案してゐた。そしてお牧の事を思つて目くらに添はせてお
くのは惜しいミ、眼兵衛まで申込んである返事が聞きたいミ
言ふ。お牧はいくら夫が盲目なればミミ突放した。段八は
兵助が大事なら年が年中薬三味の夫を本復さそうには黄金湯
しかないのだから、退き代をやつて薬の手當をさすのが上分
別ミ言ふ。その金は段八がお牧の心次第で直ぐに出してやる
ミ財布から金をぢやらつかせて見せた。お牧は其金を掴みか
らうミさへした。お牧は思案を決めて金さへくれるなら段
八の女房にならうミ言ふ。段八はその證據に兵助から退き狀
を取つて見せてくれミ迫つた。お牧は今更に驚いたがのつぴ
きならぬ手話ではあり、良人の難儀も知らぬのでないのだか
ら、退り狀を書かしますミ答えた。段八は大喜びだ。そうこ
うする處へ兵助がしほくミ歸つて來た。母の頼みで今日に
つゝまる五十兩の金が整はないので、金が無ければ義理ある
兄の命にかゝはるこミ、思案にあまつてお牧に相談しやうミ

家へ這入る。そしてお牧に相談を持掛ける。案に相違の返答だ。

『兵助殿、暇下さんせ、去狀書いて下さんせなあ』

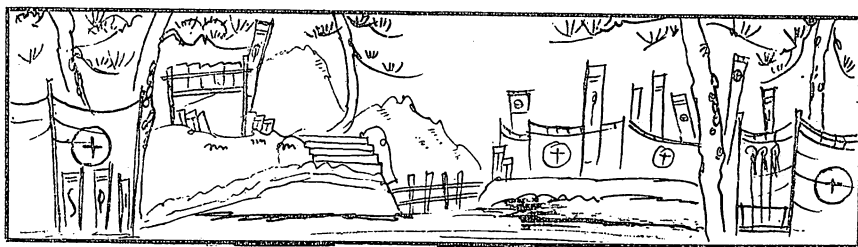
「女房に言はれて驚いた。女は男に愛想がつきた縁を切つて外の男に今から樂に暮すから去狀書けいふのだ。兵助は今更に女房の心を淺間しく思つた。筆松いふ子まである仲をさくさいが證ない。七人の子をなすも女に肌を許すなさはこ、か出て行き居らうと立腹した。傍では段八がしたり顔で早く去り狀を書けいふ。兵助は段八の聲を聞いてすべてが解つた。性根の腐つた女房、去狀書いてやる筆松に筆を持たせた。父と母との離別狀を書かそうとて手習はさした。ここはない、その子が三下り半をさらく、書いた。お牧は今更に我子の能筆を恨んだ。……夫婦の縁や薄墨のこれやこの世の暇の状……兵助はこんな子まで捨てる女房を罵つた。もう母ぢやない犬畜生ぢやと泣いて教へたが筆松は父をかばひ母を慕つた。段八が筆松を突のけてお牧を連れて戸口を出た。お牧はうしろ髪を引かれる思ひをして劍箱にある薬のこまで心配しつ、段八に引立てられて行つた。あこで兵助は筆松をたよりに女房のこを憤つてる耳に聞えるのは七つの鐘である。今日中に五十兩の金が出來ずば義兄の生命にかはるゝ嘆き、お牧への面あてもあつて一層に脇差を抜き

かけた。筆松は慌てゝ止めた。眼兵衛が汗たらゝに駈け込んで来た。入るなり兵助の胸倉をこつ掴へた。碁石を金と思つて出したばかりにばくち場の付合をはねられた。妹をつれて行けば今から親子で乞食させ、刀をもぎ取りこれを賣つて腹いせにしゃうと先刻の財布を投げつけて出て行く。あこで兵助は無情な兄妹を恨んで財布を引破つた。するゝ驚くべし中から本小判の金びかくが出た。筆松は金が出た眼をみはる。兵助も撫て見て怖りした。筆松に門口をしめさせて小判をひらひ集めた。二十兩、三十兩、五十兩、夢ではないかとおし頂いて一時も早う筆松來やと轉けまろびつ走つて行つた。するゝ納戸からお牧と眼兵衛が現れた。お牧は兵助の後を伏拜んで兄によく金を夫に渡してくれたと禮を言つた。眼兵衛は妹の真心に感心して眞人間になつたのだ。お牧はその兄に兵助と筆松の事を頼んで死のうと脇差に手をかけた。假にも段八の女房にならうと金までこつた今身を穢さうより死ぬことは始めよりのお牧の覺悟であつた。眼兵衛も泣いたあきもあかれもせぬ仲を……と察してゐるゝ納戸から段八が出て来た。兄妹してよくもおれを一杯くはせせたな、是から兵助の追かけて叩き殺して金を取り戻すゝ飛んで行く。眼兵衛はあいつをやつてはこその後を追つた。お牧は兄さん頼んだぞへと心配けに走る二人を見送つた。夕立がはけしい。

(下巻) 安井天神坂

安井天神の坂の登り口だ。増井の井戸が高燈籠でそれを見る。雨は正に吹き降りである。その中を兵助が筆松に手を取られて走つて来る。そして石にけつまづいてころけた。筆松は驚いて父をかばつた。兵助は癩さへ差込んで来た。天王寺から夢中に駆けて来たのだ。清水の増井から鞍の母の家まではまだ二十丁もある。兵助は立とうとして気がついた。ひさい癩だ。筆松は合薬が針箱にあると言つた母の言葉を思ひ出して取つてくる。駈けて歸つた。兵助は筆よく、吾兒の上を案じた。だが癩はますますひさい。兵助は大地にまろび伏した。そこへ通り掛つたのが朝日奈藤兵衛である。今日一日に切迫つまつた金の才覚願詣でで安井の天神へみやつて来た。雨は漸く上つて月の影さへ見える。藤兵衛は今日永代濱で受合ふた清十郎様へのみつぎの金、こよいの時刻に出来ない時は面がすたる。そのみか清十郎様の身の上にもしたの事があつては、胸を痛めてゐた。その足もみにつまづいたのは兵助の身體である。傍の杖を見て盲人を察し、呻に詫びた。兵助は依然として苦しむ續けてゐた。藤兵衛はそれと合點して持合せの薬を吞ませ、増井の水をふくませた。兵助は心づいて禮をのべた。藤兵衛は尙も胸を擦らうと懷中に手を入

れて金の入つた財布に觸つた。兵助は悔りして急いで去らうとするのを藤兵衛が呼び止めた。男を見かけて頼むからその金を貸してくれ、頼んだ。今宵中に金かなければ腹切つて死なねばならぬ譯がある貸してくれ、手を合せた。兵助はこつちにも譯がある。義理の兄朝日奈藤兵衛の命を助ける爲身を粉にして調へた金だから了簡してくれ、此方も手を合せた。兵助は盲目藤兵衛はつんぼである。我が名を言はれてゐることは解らない。不承知なら脇差を抜いておきした。財布の中にはけしこうばひあつた。その争ひの中に兵助は肩先を切られた。金をさられたその上に殺すは兵助は恨んだ。藤兵衛はそれを知つて仰天した。お主の爲だ、兵助を殺した。南無阿彌陀佛、高燈籠の灯で小判を集めてゐる血汐に染つた手紙を拾つた。兵助殿まるる妙林より、それは母の手跡で始めて殺したのは腹がはりの弟だ、知つた。驚いたがもう遅い涙を流して詫び入つた。そこへ段八喜藏が追つて来た。二人は藤兵衛と出入があつた。覺悟させ、争ふ處へ大雷だ、松の太木がさける騒ぎ、やがて段八喜藏は氣がついて今の中に藤兵衛に打つてかつた。不思議や藤兵衛の耳はしかと聞えた。雷の響に年來の病根を打破つたのだ。藤兵衛はこれぞ天満宮の御利生と勢込んで二人に打つて掛つた。いつの間にか喧嘩屋五郎兵衛がこの立廻りの中へもつれこんでゐた



山本有三作（中座九月上演）

芝居 嘉門と七郎右衛門

津守凡太郎

戦國時代（天文七年十二月）

薩摩國川邊郡加世田城

辻 嘉門

尾辻七郎右衛門

深見左京

一

加世田城は周圍十八町、高さ十五尋の小城ではあれ、稀代の堅城として有名である。遠巻きの對陣に倦意した島津勢の軍兵共は、此方に一群彼方に一團、遊戯に餘念なく時をたてゝゐる。

部將の尾辻七郎右衛門も深見左京を相手に、永陣の無聊を双六に慰めてゐる。

「さうも退屈だ。」

「おのしの退屈しないのは戦の最中だけだ。」

「永陣ぐらゐる齒がゆいものはない。あゝしまった。」

左京は骰子を筒に入れ上向きにして振りながら

「今度はさ……」「さろ／＼火にちよろ／＼火、親が死ぬとも蓋をさるな。三六さがつて猿ねぶり」ミ、——さうれ、三

六が出た。」

負けん氣の七郎右衛門は

「なアに、それしき、おれは重五を出して見せるぞ——」

つミ散れ山櫻「え——出おらぬ。」

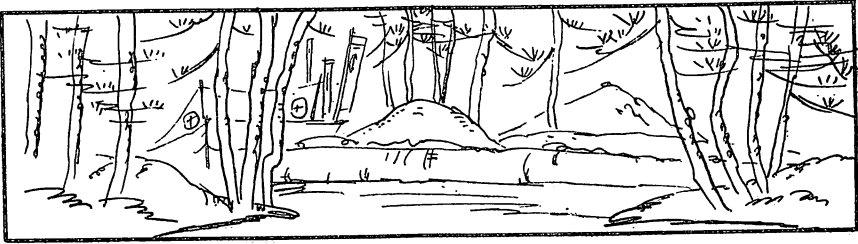
「五四／＼ミ啼くは深山のほこぎす——ミ、それ七郎

右衛門殿、さうだ。」

「え、よく出くさる。貴公は運が向いてゐるミ見える。」

「おのしは運が向いてゐないミ見へる。」

「莫迦にするな。」



「さア、上るぞ。」

「上らせてたまるものか。」

「さうれ、さうだ。」

「なにこそ。」

「今度はさうだ。」

「まだく。」

「今度こそ。」

「まだく。」

「今度こそ、さうれ、上つた。」

「え、またやられたのか。」

「無地勝だ、では約束通り二千文

貰はう。」

七郎右衛門はさき程からの無地負け

で、二千文はおろか一文の金も残つ

てゐない。ふみ、横手に置いてある

兜を見て、

「え、この兜をくれてやる。」

「なに、その兜を。」

「この兜なら二千文には過ぎてあ

る。異存はあるまい。」

戦がないために七郎右衛門は陣中

で兜まで取られて仕舞つた。それにしても三参謀辻嘉門の戦術を攻撃せずには居られなかつた。

「左京、もう一番行かう。」

「まだ、やる氣か。」

「いくらでもやる。」

「併し、おのし賭けるものがあるか。」

「ある。嘉門奴の太刀を賭けやう。」

「嘉門殿の太刀。」

「あいつは生得臆病だから、太刀などはいるものか。若し

太刀が入用の男なら、こんな小城をいつまで遠巻きにして

るものか。」

「嘉門殿の太刀はち迷惑だ。」

「彼奴は昨日おれが献策した戦法を用ひないからだ。あれ

なれば落城は疑ひなしだ。」

「おのしの戦法は突抜きだらう。」

「さうだ。」

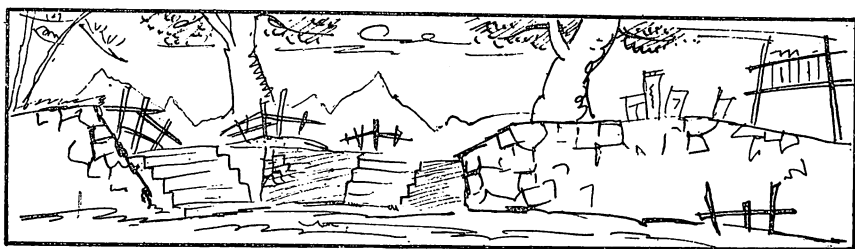
「それはこゝに攻め寄せた時すでにやつたではないか、し

から先手に三百人の死者を出したではないか。」

「三百や四百、それ位の死者がなんだ、さア左京、もう一

番やらう。おれは腰拔土、嘉門の太刀を賭ける。」

それを聞いた嘉門は七郎右衛門に決闘を申込んだ。



二

嘉門三七郎右衛門は敵の加世田城
ミ味方の陣營ミの間にある雜木林の
中に出て来た。お互は極度に昂奮し
てゐる。

「何故だまつてゐるのだ。もうこ
らでい、ではないか。」
嘉門はいつた。

「貴公はせつかちだな。」

「おれはぐづんぐしてゐるのは大
嫌ひだ。片を附けるものは早く片を
つけて仕舞ひたいのだ。」

「まア、待て。」

「おのしは今になつて臆したのか」

「戯けたこゝをいふな。」

「それなら直ぐに始めやう。」

「みづせくなさいふのに。」

嘉門はやういに戦はうミはしない。

「七郎右衛門殿。」

「何だ。」

「やる以上は生命のやり取りだぞ

傷ぐらゐで止めはせぬぞ。」

「きまつたことだ。」

「たしかだな。」

「くさい。」

「實は、七郎右衛門、おのしに一つ頼みがあるのだ。」

「頼み、今更になつて何のたのみだ。生命が惜しくなつた
のか。」

「馬鹿をいへ、二人のうちどちらか生き残つた者は、敵方
に降参することにしたのだ、それを誓つて貰ひたい。」

「おれは嫌だ。」

「待て、それはおれも好んでやるのではない。併し尋常の
手段ではこの城はさうしても落ちないのだ。それで考へ抜い
た擧句の苦肉の策だ。そりや突抜や繰抜の戦法がないではな
い。併しそんなこゝをすれば徒に兵を損するばかりだ。だか
ら、名のある味方の者を殺して降人に出れば敵はかならず容
れるに違ひない。降人になつて敵城に入りこめば、あゝは如
何様の策もある。」

「いや、そんな策は成就せぬ。」

「まア聞け、若しこの策が圖に當れば、私闘が私闘でなく
なる。死ぬ者は犬死にならない。おれはさう思つてこの策を
選んだのだ。そしておのしの陣營に出て行くミおのしは丁度

おれのことを罵つてゐる。これはうまい時に來合はせた、おれはさう思つて殊更仕合を挑んだのだ。」

「いやだ。おれはそんなことは引受けられない。おれは勝つのなら晴々ミ勝ちたいのだ。きたないこじをして城を乗つ取つたまじころが何の手柄だ。」

「きたないこは何だ。切迫つた今の場合かうするより外に切抜ける道はないのではないか。」

「繰抜きで進めばいいのだ。」

「そんな戦法はこれないから俺はこの通り頼んでゐるのだ」

「いやだ。」

「では、貴様はさうしても承知しないのだな。」

「きまつたことだ。」

「よし、それならもう頼まぬ。そんな奴はこつちも却つてた、つ斬り易いわ。」

「小癪なこじをいふな。」

二人は急に斬合を始めた。ミ々嘉門は七郎右衛門に斬りつけられて倒れて仕舞つた。七郎右衛門は嘉門の上に馬乗りになつて首を搔かうとした。

「七郎右衛門、頼むぞ、頼むぞ。」

「なにを云ふのだ。」

「た、たのむ、頼むぞ。」

「え、おれの知つたこじか。」

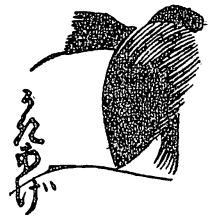
三

智謀に優れた嘉門はわざと憤り決闘を七郎右衛門に申込み、愈々勝負ミなつた時始めて畫策を語つた。「二人が戦へば一人は死ぬ。残つた者がその首を携へて敵に降人すれば城は一夜に陥ちる」ミ。然し猪武者の七郎右衛門は遂に聞き入れなかつたが、流石に嘉門が死骸ミなつては、彼の言葉を尊重せずには置けなかつた。

果せるかな、城は嘉門の云つた通り樂々ミ陥ちた。然し七郎右衛門は喜ばなかつた。それは自分の意志から出た成功でないからである。

役 配

尾 辻 七郎右衛門 延 若	深 見 左 京 橋 三 郎	辻 嘉 門 龜 藏
---------------	---------------	-----------



芝居見たまゝ (中座九月狂言)

其小唄夢廓

泉良太郎

鈴ヶ森夢の場

二つ析が入る、波の音で幕が開く。

正面は野の遠見、上手に七字の題目を彫んだ大きな石塔が立つ、その側から上手へかけて青竹の矢來は云ふまでもないこと、鈴ヶ森刑場と記した杭――。

つけが入つて霧幕を落すこ清元になる。

へ榮へ行く人一さかり花一時笠は白井が身の果ても、思案の外の罪科に……へひかれ廊へ通ひ路の派手な姿に行きかへてへ今日は哀れにへ散りかゝる淺黄櫻の夕嵐、ひま行く駒の道もはや……

この唄の中を花道から白井權八が月代、淺黄のお仕着せに繩かけられ、非人の警固する瘦馬に乗せられて出てくる。深い瘦れさ惱みの容姿も美しいだけになほ凄しい……、花道の七

三で急に馬が物怯じたやうに動かない、ミ、この時

へあいた見たさは飛びたつばかり、籠の鳥かや怒めしや八重梅の投節がこの淋しい情景をそよるやうに聞える。權八の顔には感慨と懐舊の情に堪へない影が漂ふ。そして白い頬に涙の露が宿る。馬はやつと動き出す。

へ色品川と變れども今は鮫津の無常音。ミ舞臺に着く。

非人の布く庭に權八は座して瞑目する。檢死竹中縫之助、石割勘太夫の兩人上手より登場。

――一ツ因州鳥取の城主荒尾但馬守家來白井權八當年二十五才、其方が父庄左衛門、同家中なる本莊助太夫のために耻辱を與へられしを無念に思ひてその夜密かに本莊の宅を襲ひ助太夫を切害なして本國を逐電なす、されば父の仇を討んこ本莊の悴助七助八江戸へ下りしを探り知りて卑怯にも誘ひ出



して返り討らになせしのみならず、多くの人を殺め金銀を掠め取り其の罪状軽からず、引廻しの上礫に行ふものなり——竹中は權八に斷斬状を讀み聽せる。惡びれもせず權八はそれをちつと聞き入る。

——いかにも重き罪科を犯せし權八、上の御所置に隨ひ決してお怨み申しませぬ、礫は兼ての覺悟有難く存じます。嚴肅なる死を前にしては、如何なる罪障も悉く消滅して、永劫の涅槃がひらけ、四圍を包む寂寞の中に、權八はたゞ悔恨の情を禁じ得ないものゝ如くである。

——して其方何か申しのこす事なきやぎやうぢや。

竹中の情けある言葉を遮切つて、石割は壓し止めた。

——竹中氏の仰せではござるが、かゝる大罪人にお慈悲のお詞は餘り過ぎませうぞ。

こゝにも又岩永重忠がある、竹中の情に對して石割の邪は世評を代表する對照である。權八は身の成り果てを懺悔して、その罪の怖しさをしみくかこち嘆く。

いよいよ礫刑の用意が出来て、權八の死は迫つてゐる。

こゝぞ名に負ふ鈴ヶ森、最後を急ぐ其の折しも、廓を抜けて小紫裾もほらほら駈け来る……と、

部屋着の上へ黒の羽織をはほり、素足で小紫が息も喘ぎ喘ぎ馳けて来る。

——オ、權八さん。

小紫か。

感情が迫つてたゞ涙と涙、小紫の切なるたのみと權八の最後の願ひを訊き入れて、竹中は二人に水盃をゆるしてやる

手桶の水を汲み交す、ひしやくの縁し長けれごあのよを
たのむ南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經

清元の玲瓏たる節調が、權八の死を弔ふ如く聽える。手桶
の水でこの世の名残りの水盃が交はされる。二人の名残は
つきやうごもしない。石割や下役等が二人の仲を堰かうごす
るが小紫は權八の袖に取縋つて、よ、ご許り泣き入る。突然
小紫は懐劍を取出して權八の繩目を切り放した。權八は愕く
役人等は狼狽して兩人を圍んでいきまく。

これ南柯の一夢にて……

これは權八が小紫の許へ通ふ駕の中で結んだ、いみじ
い夢であつた——權八は土俵の上に立ち、小紫は懐劍を擬し
其他役人達は刀の柄に手を掛けたま、……暗轉

新吉原の場

賑やかな三下りの廓唄で幕が開く。華美と艶冶を極めた小
紫の部屋、衣衾にかゝるしかけ。金屏風、黒紅塗の箏箏
鏡臺、基盤等絢爛な色彩に榮へてゐる。權八の奏でる尺八、
小紫の調べる琴、唄は戀慕流しの一曲。廓のさわぎを離れた
しんみりとした世界——新造のおさづれに二人は曲を止める

花魁お手紙が参りました。

粹な由縁と我ながら我爪琴を掻き鳴す、思ひのたけの尺

八も戀慕流しは權八が一夜切りごは氣に懸る
小紫がはらはらご繰り展ける文に、ふみ一瞥を注いだ。
淋しい顔で眼を外らす權八は屈托らしく、ほつご吐息を洩
らす。

これいな權八さん、最前までも今までも機嫌やうして
るなさんしたが、なぜにお前はそのやうに

不吉な夢占に、權八も己れの身に迫る危険を知つた。明
日にも死んで行く身にも愛しい小紫に難儀を及してはご、心
にもない厭がらせを云つて、切れやうごした。

腹が立たないで何ごしやう、其の手紙の様子では、白
柄組の合方にそちや出たごやう。

あれまあそんな廻り氣をいわしやんす。

小紫は意外な權八の言葉に驚き悲しさの餘り思はず權八
に寄り添つた。

人の心ごあすか川、けふの今迄そのやうなうつり心の紐
鏡

丸に井の字の五ツ紋前髪の水も滴る若衆鬘、鏡臺の前へ崩
れるやうに權八は座つた。紫縮子の襟に、もえるやうな鹿の
子の長襦袢、伊達巻も艶に、小紫の顔はさみしい。浮世繪に
見る美しい色模様につれて、清元が夢の様に流れる。

まだすねてるさんすか、これ程つくす私の眞實も、ま

だお前には分らぬかえ。

小紫の情けにほだされて、權八もつい打明けずには居られなかつた。

——その親切は忝けないが、つれないこころをいふたのは、其方に憂目を見せまいため。

——そんなら話しやんした今の夢が正夢ではないか云はしやんすかへ。

——コリヤ小紫、そちや愛想が盡きたであらうがのう。

——ソリヤ死ぬるも生きるも兼ねての約束、覺悟は極めて居ります。

二人は手に手を取つて廓を抜ける決心を固めた。人目に立つ權八の前髪も剃り落さねばならぬ日影もの、哀しさ、小紫は戦く手に剃刀を取つて背後へ廻る。

散ればこそ身に降りかゝる花吹雪、はかなき縁の合せ砥にかゝる思ひのあらうさは神ならぬ身の權八が祝ふて落す前髪を泪でもんで剃り落す向ふ鏡の小紫……

三浦屋の主人四郎兵衛は、はからずも仔細を立聞いて、立退ふさする二人を抑へた。永い間三浦屋のためにのれん名で稼いだ小紫ゆへ權八に添せてもやりたいが、四方に手が廻つてゐる所詮女連れでは遁れられぬ、一時身を落付けて知らせれば通し駕で小紫を送つてやるに約して、心ならずも權八だけ遁れるこころにする、小紫が着せる羽織にも永い別れの情けが

籠つてゐる。

——トハ云へこれが一生の……

——ア、もし……

二人の泪のうちに析は悲しくも刻ざまれる——ツナキの騒ぎ唄で……

六郷船中の場

士手を遙に見渡した六郷川の月夜、水の音で幕が開く。

頼冠りをした權八が急ぎ足で馳けてくる。船頭に姿を變へてゐた捕手が『御用』と打つてかゝる。權八は一刀にて斬殺して船へ飛び乗る。お誂への合方にて船をト手へ漕ぎ出す、捕手が上手より御用提灯を翳して出る。下手へ行かうとする

と又別に捕手が多勢現れる。權八も遂に覺悟を極めた。

——エ、川崎に居る水野十郎左衛門を討ち果し恩人長兵衛殿のうつぶんを散ぜんものと思ひしに斯く八方に取圍れし上

からは、ウム——（もろ肌を押ひろけて）やあく、白井權八

が最後の程を見物いたせ……

ミ一刀を突立てる。美しい顔に苦悶の色——御用の聲連呼

する。——幕——

役配

白井權八 壽美藏 小 紫 秀 調
四郎兵衛 橋三郎 禿 〓 又太郎



てじ丸

「出世の船唄」雜考所感

行友李風

お馴染の、紀伊國屋文左衛門を題材に擇びました。

餘談に亘りますが――。

近年、海外移住成功者の數の多い上では、全國を通じて和歌山縣が第一と稱せられて居るさうで、それも主として南紀沿岸地方であります。志を立てるに僅少な田畠、家屋敷を賣拂つて遠路の旅費や準備金に充て、眞實の裸一貫になつて故郷を飛出し、波濤萬里の外に新境地を開拓して、五年、十年、十五年、倦まず撓まず一生懸命に、骨身を碎き膏汗を搾つて、從順に、神妙に、稼げるだけ稼ぎ、働けるだけ働いて相當の資産を造り、それを土産に錦を飾つて花々しく郷里へ歸るに、幅を利かせて悠々安住の基礎を固める――といつたやうな實例は、少しも珍しくないであります。

然うした強い、根深い、何處までも自身本來の氣力に依て事業を成し遂げるといふ一本氣な魂は、この海國の郷土民族通有

の特質とも謂ひ得られませうし且つ、その子から父へ、父から祖父へミ廻り、遠い祖先からして享け繼いだ血脈の遺傳性にも觀る事が出来ませう。

ソコで文左衛門が蜜柑船の壯舉にもマタ、怒うした郷土特有の意氣ミ力ミ、血ミ熱ミの勃發、表現を見遇す譯に往かないので、直ちにそれを海國男子共通の氣持にスツカリ當嵌て筆を把りました。

例に依て内容、形式にもお粗末千萬、眞のお笑ひ草に過ぎない不手際です。只管に鷹揚の御觀覽をミ、前以て卑怯な弱音を吹いて置きます。

さて常人の文左衛門に就きましたは、古來、一代説、二代説三代説さへありますやうで、出生の地にしましても或ひは加太の浦だといひ或ひは熊野の人だとも傳へられ、飛放れた傳説には「文左十八歳の砌、紀州加太の浦に大きな鰐魚が棲んで居て

多くの人を悩ませる、併しこの怪物を退治する事容易でない、文左一計を案じ、及び上つた鰐の口を目蒐けて木偶を投げ込みその木偶に毒を仕込んで鰐を退治した、所が怪物の腹の中から何所で吞で居た物か、金千兩の財布が顯はれ、これを資本に蜜柑を仕入れて江戸へ上り、即座に五萬兩の利潤を得た云々

兎に角紀州人が國産物の蜜柑に依て身を起した、こいふ點は事實上に近いとして、普く世上に傳はります『紀文大盡』——之を蜜柑船の文左であるこいふ説、同人の俸乃ち二代目文左であるこいふ説、爰が何とも明瞭しないので、假に蜜柑船を慶安承應だまするこ（今度は特に慶安の末年としました、それは後年、明暦の大火に一躍百萬兩の富を造つたこいふ説に對するの用意からして）大盡紀文は二代目と觀るのが當然のやうです。

享保十九年に六十六歳で卒したこいふ事實は動かさないとして、更にその俸の三代目が安永の四年六十歳で死んだこいふ記録もあります、が、『大盡紀文』に對する幾多の文獻に比べて『蜜柑船紀文』の事蹟が明瞭でないのは洵に遺憾に思はれます。

次手ながら『沖の暗いの白帆が見える』の唄、當今では殆んど活惚の専用となつて居りますが、これでも果して『蜜柑』が本唄か否かは疑はしく、肥前平戸の盆踊りに交易船を諺つたのや、更に寶永期で『沖に見えるは丸屋が船か、丸にやの字の帆が見える』更に下つて天保度で『肥後さん節』など、同形同調の物多く『志州鳥羽節』であるこの説も如何かと思はれます

劇としての紀文は——只今相憎ミ参考資料を渉る餘裕がありませんので、古い事は解りませんが明治十一年に東京の市村座で上演されました、三世河竹新七作の『紀文大盡 廓入船』これに果して蜜柑の條が取入れられてあつたか何うかは疑問ですが、この狂言の淨瑠璃別名題『全盛遊黄金豆蔲』常盤津、竹本の掛合を、特に新七の師匠黙阿彌が書きまして紀文（權十郎）、几帳（女寅）、其角（三十郎）、文山（時藏）こいふ俳優の顔觸れ、この淨瑠璃を俗に『紀文の十二月』と稱して評判されましたか……。

この以外、黙阿彌作『黒手組の助六』に紀文大盡が顯はれ傘の異見をしますが、之は其實作者の出入先山城河岸の津藤（津の國屋藤兵衛）をモデルにしたのですから眞の看板を借りた云ふに過ぎません。大正になつては帝劇で、澤村宗十郎のために故右田寅彦氏が書かれた『紀文大盡舞』これは誰様も御存じですから、別段御紹介いたすにも及びますまい。

實説紀文三代ばなし

江戸時代の豪商で例の紀州の蜜柑船で巨萬の富を得たのは初代の紀文で、世に紀文大盡と唄はれてその巨萬の富を一列に散じたのは二代目紀文である。新吉原和泉屋で節分の豆蒔きに小判を撒いたこと、雪中に小判を撒いて雪見の奈良茂の鼻をあかしたことなど数々の逸話を傳へる。享保十六年六十六才で歿したが晩年は頗る窮迫して衰れた末路であつたといふ。彼の全盛時代の取巻きに畫師英一蝶 俳人費井其角、畫家佐々木文山等あり。三代目の紀文といふのは龜山と號し後剃髮して明西と稱し安永四年没したといふ説もある。



大百日

「極彩色娘扇」管見

伊原青々園

世話浄瑠璃さいへば短いものは多いが、めくら兵助の「極彩色娘扇」は十段つゞきの長篇である。「双蝶々」や「夏祭」同じ部類に属する世話浄瑠璃の通し物である。しかも男連同士の出入りを取扱つて居る點は「双蝶々」の方によく似て居る。

ここに九段目で、喧嘩屋五郎右衛門の女房が吾が子を身替りに立てるため、前髪を剃落して野郎頭にする處で「双蝶々」の引窓を餘處事につかつたり、河内の觀心寺村から喧嘩の取引を頼みに來たりするは、作者自身も「双蝶々」を粉本にした證據である。念のためにいふが、この觀心寺村は「双蝶々」で濡髪長五郎が逃亡した落ちつき先きである。

此の浄瑠璃全部を見て、眼に立つのは喧嘩屋五郎右衛門と朝比奈藤兵衛と、寺子屋兵助と、三組の夫婦をつかつた事と、其の夫婦にいづれも子があつて、それがドレも獨り子で、しかも男の兒であり、その三つの男の兒がそれ／＼に好い役廻りをつ

めて居る事である。藤兵衛の子が友達を傷つけて下手人に取られるのは、當時の實話によつたのであるが、そればかりでなく、此の通り三人の子供を残らず大いに働かしたのは、作者が其れをヤマにして趣向を立てたのかと思ふ。

さて、右の三組のうちで、喧嘩屋と朝比奈とは兩々相對立した本筋であるが、兵助のくだりは入れ事に挿んで脇筋になつて居る。その本筋の方はあまり舞臺にのらないで、脇筋の方が却て今でも度々實演されるのは、それだけ能く筋が纏まつて居るからであらう。尤も自分に届けてくれる金も知らず、相手を殺して其の金を奪ふさいふ筋は、元祿劇の「淺間獄」にもあつたさ覺えて居る。このほか「梅の由兵衛」でも、「阿波の十郎兵衛」でも、近くは「十六夜清心」でも、皆そうである。随分つかいふるした筋ではあるが、めくら兵助では、その上に盲瞽の出合さいふ面白いヤマがある。それが此の狂言の悦ばれる一

つの理由であらう。

兵助が碁石を金に見せかけて眼兵衛をだますといふ筋は、これが爲に兵助が不正直者に思はれて、今の見物には同情が薄らぐ、そればかりで無く、傍觀者から見れば、兵助には所詮出来る筈のない五十兩の調達を、やす／＼と母親に受合ふ、そのほか寺子屋の場でも、色々なチャラツボコや御座なりをいふ所がある。さうも兵助が輕薄な人間に見えて成らぬ。しかし昔の芝居で二枚目の役はキツト斯ういふ人物に書いてある。此の淨瑠璃の出來た時には、見物がそれを輕薄だと思ひないで、却つて一種の愛嬌として悦んだのであらう。今日だつて其の意味で通過して居るが、兵助をつみめる役者がまづいゝ、其處に破綻が露出する。

此の淨瑠璃を、當時の歌舞伎で演じた時、兵助の役は和事師の嵐三五郎がつみめた。それを見ても、何ういふ役柄だといふ事が分かる。今日の劇壇では、やはり延若を除いたほか、滅多な役者ではやりきれないだらう。

それから、此の幕明きの場面は「菅原」と同じく寺子屋の場面だが、「菅原」のやうに大勢の子供を出さないで、今日では休みだけれぎ、親たちの観みで特別の稽古をするに斷つて、寺子屋の人数がうまく制限してある。作者は利口で中々するい。

盲兵助の「型」

天王寺村寺子屋兵助家の場、平舞臺の世話屋體、正面三尺の納戸口には花田色の暖簾、その上三尺は佛壇、下は押入れ、續手上手鼠壁折曲り、一間の附屋體には障子を締切りある。納戸口の下手も鼠壁、折曲り、竹格子の内には竈手桶、盥、その前七輪ミ土瓶、黒塗の盆に湯呑を載せ、澁團扇、自然木を刳つて藤蓐の手の付いた蓑盆なごがあります。例の處格子戸、(脚本には門口に幼童筆學所の掛札、下手落間に仁義禮智信の掛額)、外に井戸側、その向ふ板羽目で見切り、佛壇の下には押入の間に(脚本では引白を載せてある)帷子の押をしたのミ、硯箱がある。——稽古唄の「繻子の袴」ミ角兵衛の鳴物で幕が明くミ、上手前寄に一子筆松、おけし鬘、紺飛白の單物に紫の附紐、茶ミ白横壇の帶、次に手習子おきち、おはや、蝶々鬘、白地中形の單物、赤の帶で前に机を構へ、手習をしてゐる。手習子が顔に墨を塗つて争ふ處へ、淨瑠璃へ師匠のお牧前垂かけ：で、前の合方になつて、納戸口から女房お牧、おばこ鬘紫襟の襦袢、結城木綿の一重もの、黒八丈の丸帶、二子三筋立紫紐の前垂がけで出て、それを止め、『こちらの人が去年の大煩ひから、目が見えぬので、私が名代、目の愉らぬはしよ事もないが、この間から又痰咳……目かいの見えぬ此方の人に不自由目をさせまい……』女房が夫への心意氣を示します。



上方狂言の「盲兵助」

石 割 松 太 郎

この七月の東京歌舞伎座で、久々の延若が、菊五郎との顔合せで出した狂言が、「極彩色娘扇」の八ッ目「盲兵助」のくだりであつた。その時に「歌舞伎」へ「上方狂言の盲兵助」の一篇を物した。私の知つた「盲兵助」について述べたのみであつたが、今度雑誌「道頓堀」で、「盲兵助」について、又一文を求められた。

實は、「歌舞伎」に書いた以外に、兵助についてさうたん書くことはないのであるが、人形芝居では、「盲兵助」は早く亡んだ狂言である、そして芝居でもこの「八ッ目」ばかりが残された、朝比奈藤兵衛、喧嘩屋五郎右衛門の達引が、一向に見物の感興を引かなかつたものらしい。

それは、上方の俠客さいふ、上方の柄にない俠ひの肌合が面白くないのが一つの理由、清十郎お夏の狂言としても、それがさう主な役でなく、清十郎に配する二人の女の肩を朝比奈奈喧嘩屋まで持つさいふだけのものだ。

ソコになるミ、さすがに八ッ目は山が上つてゐる、こゝがこの狂言の見せどころ、作者の近松半二も、得意の技巧をこの八ッ目に見せてゐる。

誰でも氣のつくのは、文面白く思ふのは、聾の藤兵衛ミ、盲の兵助が、五十兩の金をまんなかに、藤兵衛に渡さうとして兵助が、藤兵衛ミ知らず、「この金は藤兵衛殿より外の人に遣るこゝはなりません」ミ現在の藤兵衛を前におきながら、藤兵衛に殺されるさいふの山だ。皮肉な葛藤だ。ハラ／＼ミする殺しだ。これが舞臺にうけたのは尤もの事で、半二が正に得意の技巧である。

延享三年八月八日さいふに、聾の俠客が、新靱で死んださいふこゝミ、清水増井のほゞりて、何ものか知らずに盲人が殺されてゐたさいふ二つの事實を聞いた近松半二の頭に、「増井の殺し」が閃めいたのであらう。ほんのこれだけの事實にヒントを得た半二が、この八ッ目の趣向を作り上げ、それから前後が

作られて、ミウ／＼お夏清十郎に絡んで来たのが、この狂言であるから、八ッ目に山が上がり、こゝに力が籠つてゐるし、又この半二の冴えた技巧のために、この八ッ目だけが今に残つたのであらう。

が、然し、ほんまに兵助役としての面白味は、私は、碁石を五十兩だまいつて女房の眼兵衛を騙す、その碁石が、五十兩のほんまの小判になつて、再び兵助の手に返へつて来る。この作者の技巧を、うまく舞臺に演出するまきに兵助は成功するのだと思つてゐる。

尤も眞法正直な寺小屋のお師匠さんの兵助が、碁石を五十兩だまいつて渡すまいふ一點に、作の無理、筋の不自然があるがその碁石が小判になつて返つて来る、それが眼兵衛の改心からであるまいふのが、恐らく「盲兵助」劇中の眞の面白味であらうと思ふ。

私は延若の兵助を見たことがない、ずつと昔に離座の兵助を見て、この優が好きになつたのであるが、延若の今日の體格で喀血——即ち肺結核を病んでゐるを見えようか、延若の技巧はまづこの條件を第一に示さねばならぬ。

第二に延若の舞臺でさうするだらうかと思はれるのは、この眞法な兵助が、兄貴に碁石を五十兩だまいつて手渡すところでのこのくだりがよく出来たらば、もう兵助は全く、今日では延若以外、それ以上の演出を見せるものはあるまい。やゝこもする

ま、延若は、こゝで兄貴を一杯喰はしおほせたまいふやうな點が見えはすまいか、延若の兵助の成否は全くこの一點にかゝると思ふ。

東京土産で「盲兵助」を見ようまは期せなかつたが、何んでもいゝ、上方の俳優は、殊に延若の如く、上方の色の濃い俳優は何を苦しんで東京俳優の演じた跡にのみ追隨するのか、宜しく「盲兵助」のやうなものを上方脚本の中に掘出すがよろしい。魁車の梅幸病まきにも、延若の左團次病から脱して、上方の狂言に、上方の色を十分にお出しなさいと勧めたい。この意味において今度の「盲兵助」は實にいゝ出し物である。その成功を祈つておく、東京の折のその如くに。

極彩色娘扇（あふむ石）

「盲兵助」 延若

兵助「成程さう云はしやれば、非道いとは思はぬ。定めて、そつちにも切ない道理があつてのこゝであらうが、又こつちにもそれは／＼大ていの金ではないわいのう。わしのはら替りの兄弟朝比奈の藤兵衛まいふ義理の兄貴の命づく、身を粉にくだいて調へた此の金さうぞ了簡して下され、これ拜みまする／＼わいのう」

「手を合してぞかきくきく、我が身の上まは聞き取らぬつんほの悲しさくり返し……」



盲兵助 覺え書

高谷伸

極彩色娘扇といふ名題の華やかさにひきかへて、暗らい寂しい盲兵助、狂言は、寶曆十年七月廿一日初日、道頓堀竹本座で近松半二、二歩堂、北窓俊一、竹本三郎兵衛、三好松洛の五人の名で書き卸されたものである。

それが好評だつたので翌々年九月には江戸中村座で歌舞伎に移され、明和元年十二月には中の芝居で上演された。それからたびたび上演されたといふ程ではないが、書習へ狂言なごも出来、明治初年には先代延若、以後には故瑠璃や今の鴈治郎、故歌六なごも演じたやうである。

それが大正に入ると、纔かに大正二年七月帝劇で延若(當時延二郎)の兵助、梅幸のおまき、幸四郎の藤兵衛で演ぜられたきり、東西も大劇場でふつつり演ぜられなくなつた。しかしこの七月歌舞伎座で延若菊五郎のために舞臺に現れたのを機縁に、久しぶりで道頓堀の芝居で演ぜられることになつた。

この狂言は延享の頃、大阪新報にゐる朝日奈宗兵衛といふ聲

の俠客の話で、新清水増井の邊で殺された盲人の話で、うまく搦きませて、聲三盲の意志の疏通を缺くところから生れる悲劇とし、お夏清十郎を本筋とする十段の淨瑠璃に仕組み、最後には室の明神の社頭で道成寺の景事を見せたものであるが、今では、たまに演ぜられても八段目の兵助の件だけであるから全く寂しい芝居になつてしまつた。勿論七月の歌舞伎座のやうにお夏清十郎の道行を加へて彩りをするこゝもあるが、これなごは珍らしい例である。

聲三盲の組合せなごは、あまりに技巧のための技巧に墮してゐる。貧乏、肺病、盲目、最後に殺し、あまりに慘酷であるなご、いふ理由で、多く現れなかつたのではあらうが、他方にまた、上方淨瑠璃らしい棄て難い味もある。

盲が目あきを偽す小判の技巧、碁石をつめた胴巻が眞物の小判になつて戻る意表外の發展で眼兵衛の改心を見せるおもしろさなごがそれである。

演技に就て、覽え書を繰る。

延若の兵助は、あの體格で癆咳の盲人になつてゐたのになうまさが窺はれる。

兵助の内て眼兵衛が胴巻を打ちつけて歸る。

「揃ひも揃つた兄弟共、人でなしの大悪人め——」

ミ、ふるへる手でそれを把んでゐるミ、小判がこぼれる。筆松が「あれ小判が……」ミ叫ぶ。「なに小判？」ミ兵助がさぐり寄つて一枚を拾ひ取り、驚いて、

「筆よ。表しめ」

ミ例の調子で言ひ、あミ糸に乗つて小判をひらふ所が一番のうける所である。

二役喧嘩屋五郎右衛門は帝劇の時は井筒の庄五郎といふ役名でやつたが、元來原作には朝比奈藤兵衛喧嘩屋五郎右衛門の達引も重要な部分であり、角書に二人の名を並べたこももある程だから、五郎右衛門が至當である。

朝比奈藤兵衛は、菊五郎は何ミしても江戸の俠客である。髯といふ點から行つても、兵助の義兄といふ點から見ても、顔の扮りなごは、あまり若いより四十がらみの方がその人らしい。

しかし、着附は商賣柄派手であるべきであるが、これも菊五郎の、あらい縞に鶴の丸を飛ばした柄よりは、幸四郎の鶴の丸を陰日向に出した首ぬきの着附の方が舞臺にはよい筈である。

兵助を誤つて斬つて、花道へつか／＼行き、刀を背へ廻し

左足を踏みだしてそり身の見得は、よくある形だが、菊五郎はよい形を見せた。

傘を柵に、兵助ミ藤兵衛の上下の見得もお定まりである。

最後に藤兵衛、五郎右衛門の二俠に大松屋の番頭段八ミ喜藏

ミの絡む世話だんまり、

「露は尾花ミ寝たさいふ——」

華やかな下座で、歌舞伎らしい舞臺繪姿、畫面の見得や、又は幕外の引込の面白さに、今までの陰鬱な氣分を一轉さす所がこの一幕の掉尾の舞臺技巧である。

年極讀者

懸賞發表について

年極讀者の懸賞抽籤を七月廿五日施行してその結果を各讀者宛に往復はがきを以て御通知申上りました。詳細はそれによつて御承知願ひます。萬一未着の方もありましたら、懸賞係まで御一報下さいまし。

當選者以外の方は、折返し御希望御書込みの上御返信下さいまし。到着順によつて寫眞を御送り致します。

「道頓堀」懸賞係

當選者氏名

- | | | |
|----------|----------|----------|
| 大阪 弘松 正枝 | 大阪 小澤 あい | 大阪 河野 豊 |
| 高松 前田 敷江 | 神戸 柴田三四治 | 大阪 井上 健吉 |
| 高知 溝淵捨太郎 | 大阪 森 英之助 | 大阪 久米 喜六 |
| 名古屋 寺西由藏 | | |



盲兵助に就て

川尻清潭

九月の中座に延若の『盲兵助』が上演される事になつた、延若の『盲兵助』云へば、亡父以來の當り藝であつて、今の延若が初役で勤めたのが十七歳の時、神戸の大黒座の小供芝居で上演し、更に京都の芝居其他でも演じて居るし、延次郎時代に東京の帝國劇場でも出し物にして居乍ら、それで大阪の舞臺へ掛け

るのは、今度が全くの始めてゝあるこゝは一寸考へるに嘘のやうで然も本當の話である。

此『盲兵助』の書卸しは、寶曆十年の七月廿一日初日で、大阪の竹本座で操淨瑠璃に上演した狂言である、其當時の院本の奥書を見るに、作者として千前軒門人の肩書の下に、二步堂、近松半二、北窓俊一、竹本三郎兵衛、三好松洛の名前が列らね

てあるが、巻頭には座元としての竹田出雲の署名が載せてあり名題は『朝比奈藤兵衛、喧嘩屋五郎右衛門』と角書にして『極彩色娘扇』と据へてある、内容は全編を十段に分つて、第一、高砂館の段、第二、姫路の段、第三、加古川の段、第四、心齋

橋の段、道行戀の四つ街、第五、片町の段、第六、新うつほの段、第七、なにはの段、第八、天王寺村の段、第九、老松町の段、第十、室の津の段、娘ふし事で終りになつて居る。

大體の筋は、お夏清十郎の世界へ、朝比奈藤兵衛と喧嘩屋五郎右衛門の出入を加へて、それに盲兵助を搦めてあるので、此狂言が歌舞伎に上演されて始めは、寶曆十二年に江戸の中村座に、同十三年に大阪の三樹大五郎座である、就中二世嵐三五郎の盲兵助役が最上の當り藝として評判が高く、作の趣向にしては八つ目の天王寺村の段で、朝比奈の聲の兵助の旨と兄弟因果

の寄合が好評であつたに傳へられて居るが、『極彩色娘扇』の名題は、大詰に至つて室明神の祭禮に、お品とお夏の二人も白拍子になつて道成寺の振事をするのに由つて名付けられたものである、但し實の所全體にあまり名作ではないので、其後は『天王寺村』と『増井』だけが舞臺へ掛けられるやうになつたのは當然の事である。

尙近年此盲兵助の役を手に掛けた俳優は、先代の延若や名人嵐吉三郎及び市川小團次等を別として、故人嵐璃瑠、中村歌六當代の中村鴈治郎等であるが、現在での役者として先づ延若が適任者じあらう。併し敢て其外を探せば中村吉右衛門に勤めさせたら、定めしうまからうやうに思はれる役であり乍ら、扱實際吉右衛門の場合では、恐らく哀れ氣の方へ計り深く入つて此臺本に伴ふ面白味が出まいとも考へられる役である。

但し右に舉げた諸俳優の演じた物は、近松半二が書いた云ふ原作ではなく、明治元年に大阪の狂言作者勝諺藏が改めて『天王寺村』から『増井』までの件を脚色した物を用ひたのである、そうして當代の延若の家では、亡父が今の延若に芝居を見る事を禁じて居た爲、亡父没後芝居に關する物は、すべて散逸して仕舞つたのにも拘らず、不思議に此盲兵助の根本だけが只一部残つて居たのが役に立つて、今日に及んだものである云ふ。

所で東京の歌舞伎座七月興行に、久々で延若が上京するに就て、東京の松竹の大谷社長が、延若の出し者として『盲兵助』を一番目狂言に選定する事になつた時、舞臺面の都合上、序幕に十五分程の物を添へる必要が起つて、斯く申す小生が其役目を言付かり、原本の四つ目の奥の『道行戀の四つ街』のお夏清十郎の道行を書直し、配役の關係から説教節三占賣さかりんや等を出して所作事に仕組み、場面を四つ橋に取つて竹本の三挺三

枚で派手な舞臺を見せる趣向を附けた所、其筆序云ふやうな事から、『天王寺村』と『増井』の二場全體に涉つて、勝諺藏の書いた物では丁数が長過ぎるから、それを塩梅よく刈込めろとの命令が出て、在来では二時間以上も掛つた物が、今度改修に依つて一時間廿分以内で演了するやうに漕ぎ附けた爲、此寸法で出来れば重寶な物にもならうとあつて、つまり歌舞伎座上演用の脚本を一冊作つて置いたのが、今回の中座の上演に役立つた譯にある、しかし其改修の中で兵助の後だけは、延若が度々手掛け居て、所謂箱に入った型物に成つて居る事にて、特に兵助の臺詞だけには筆を加へないで置いた次第、要するに兵助を本位にして周圍の無駄を省いたのが私の改修の主義である、それだけに原作は、大分遠ざかつた所もあり、つまり勝諺藏の根本を更に改修した物が出来上つて居る譯なのである。

現在の延若の兵助は、大體に於て亡父の型を寫して居るものであるが、前にも述べた通り亡父は今の延若に芝居を見る事を禁じてあつた結果、當代の延若は殆んき亡父の舞臺に云ふ物を知らない、然も後年一人前の俳優に成つて、亡父の當り藝を上演するに就ては、多くの弟子達や見巧者のひいき客に就て、いろ／＼に聞かした上、斯うでもあつたらうか云ふことを覗つて工風を附けた物であるが、此兵助の仕科の如きも、女房に對して拵へ話の件で『先生お見舞、さーれ』云ふ所や、筆松に去り狀を書かせる所で『カーケー、カーケー』云ふ言廻しや、

財布から小判が出るので「筆よー、表しめーい」云々長く引く臺詞まわしなき、いづれも亡父延若の癖を襲用して居るものであり又初めに一度表へ出る時に「よう留守せよ」云々格子を締めて花道へ行き掛け、床の「直なる心一筋」で痰の擲んだ心で強く咳入つて、杖を突いた手を圍つて其中で痰を吐く事、財布から小判の出る所で其上へベツタリに座る事、右の金を懐中して花道へ掛る時、筆松が「父さん溝ちや」と云ふので、「おつしよ」云々溝をまたぐ仕科等が皆亡父の型を寫した物で、誰が兵助をして

も大概是等の仕科を取入れる事が定めに成つて居るのである。

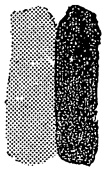
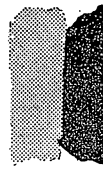
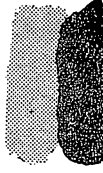
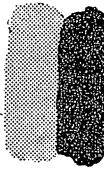
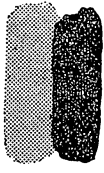
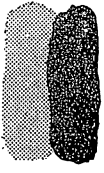
次に「増井」の場で聲の藤兵衛が盲の兵助に金を借して呉れ頼む所、藤兵衛は兵助を義理ある弟と知らず、手詰の切迫に刀へ手を掛けはするものゝ、殺す氣ではないのであるから、誤つて殺さなければならぬ、それで本文には「盲も目明きも暗まぎれ、藤兵衛が脇差の鑑を取つて引戻す、拍子にひらり三輪走る、あわやミ双物取上ぐる、其手にしつかりしがみ付、こりやおれを殺しやるか、殺さば殺せぬぢ合ふひりき、危ない退いたこのき離す、はずみに脇差一刀、南無三法手が廻つたか」云々云々あるので、誰が演じても爰の工風に困るのであるが、普通は「伊勢首領」の福岡貢が仲居の萬野を刀の鞘ごみ打叩く間にいつか鞘が割れて肩先を斬る云々式のやり方をするのであるが、歌六は根本に忠實にして、操合ふうちに藤兵衛の刀が鞘走る、それへ思はず首を出して左の咽喉へ斬込む云々工風を附

けたが、延若は先年帝劇で上演した時から、藤兵衛に咽喉を締められるのがき乍ら、我知らず藤兵衛の差して居る刀へ手が障つて是を引抜くので、藤兵衛が危ながつて其刀を引たくる拍子に肩先きを斬る工風を考へたもので、大體に於て無理のない行き方を見せて居る。

尚延若は兵助で殺されるに、直ぐに早替りて上手から喧嘩屋五郎右衛門の姿で、番傘をつほめざしにして出し、朝比奈藤兵衛が居るので一寸小隠れをする、此間に顔を直す工風であつたから、其早替りの早さに見物が驚いたものであつたが、近年は藤兵衛三段八喜藏の三人の立廻りの跡へ、喧嘩屋五郎右衛門で出るので、顔を拵へ直す間もあるのであるが、今回の中座では此二役替りを廢して、兵助の落入の「筆松やーい」云々所を一つの演所にし、充分に哀れを利かして見せる云々へば、更に完全な兵助が現はれるであらう事を期待するものである。

以上盲兵助に就ては、歌六の所演と延若の所演とのくわしい型の記録も取つてあるので、それを比較して研究をするに、兩優の工風の相違にいろいろ面白い點を発見するのであるが、徒らに長文になる事であるから、ほんの雑談で筆を擱く事にする

—— 八月廿七日 ——



小紫と権八

木村富子

人の身の捨てどころかや鈴ヶ森は果敢なき戀の捨てどころかや
いこせめて逢ひた見たさこ語りいづる唄のひまより吹く秋の風
小紫の重たき裾も味氣なく土にしだれて物をこそおもへ
権八がうつむく頬にうつろひてさらに淋しき水色の衣
南無妙の悲しき節が心地よう胸にしみ入る秋の宵かな
あらけなき仕置場なれど清元のゑんなる節に人うつ、なし
廓の灯はいまなまめく尺八も琴ひく人の影をうつして
権八が向ふ鏡に紫の長かうがいもうるみてありぬ
ほろ／＼ミ櫛笥の露が雫しぬなほ剃りがてのその前髪に
なけきつ、二人しあれば束の間も夢語りする戀語りする



其小唄夢廓

中内蝶 二

一般に之を『權八』と云つて清元でも代表曲の一三つになつてゐますが、芝居にもよく上場されます。文化十三年江戸中村座の正月狂言『比翼蝶春會我菊』の淨瑠璃の場面に書き下されたもので、作者は福森喜宇助、俳優は七代目市川團十郎の白井權八に三代目尾上菊五郎の傾城小紫、初代清元延壽太夫の出語りで評判でありました。但し作曲者は延壽太夫自身ではなくてその妻のお悦だつたご稱せられてゐます。

お悦は天狗と緋名に呼ばれたくらゐ鼻の高かつた女で、やはり此の芝居で幡隨長兵衛を勤めた五代目松本幸四郎、通稱鼻高幸四郎は鼻に於て好一對、而かも清元には此の『權八』の外になほ多くの作曲を残してゐるのだから、この點に於ても大に

鼻を高くしても好い譯です。

この淨瑠璃は上下二冊に分かれ、上の巻では權八が鈴ヶ森で礫にならうとするころへ、小紫が廓を脱けて駆け付けて来て、別れの水盃となり、その中、番人の隙を狙つて隠し持つた懐刀で權八の繩目を切る。權八がハッとき、それは夢であつた。——こゝまでが上の巻で、直ぐ次の場面に移る、下の巻は小紫の部屋であります。

恐ろしい刑場の夢が破れた權八は、小紫の琴に合はせて一節切を吹いてゐます。それから痴話やら口舌があつて、權八は今見た夢が正夢になつて、さうせ刑罪に遭はなければならぬ身だから覺悟をきめた云ふ。小紫はのがられるだけ遁れて下

さいご口説いて遂に得心させ、人目に立たぬやうに云ふので
權八の前髪を剃り落し、姿を變へて廊を落ちさせるので、この
場を俗に『髮梳きの權八』とも稱してゐます。

この淨瑠璃の名題に『其小唄』と題してある由來をたづねて
見ると、權八が鈴ヶ森の刑場で磔に行はれる時、當時流行の小
唄「八重梅」を美音で口ずさんださうで、其の小唄の文句は

梅が咲けかし、いよ八重梅が、枝を、枝を手折るふりして
必ずござせし様を招く。必ずござせし様を招く。夢になる

こも、浮世ぢやな、まれに逢ふ夜は、語る間もなき、さん
さ短夜や、よしなの思ひ、浮世ぢやな。

云ふのでした。それから權八や小紫の死んだ後で「八重梅」
の替唄が流行しました。その文句は

我は野に咲く躑躅の花よ、折つてお見やれ散らぬ間に。我
は野に住む螢の蟲よ、土手の松明火をこぼす。逢ひたさ見
たさは飛びたつばかり、籠の鳥かや恨めしや、さんさよし
なの思ひ……

云ふので、この淨瑠璃の上の巻には『逢ひた見たさは飛び
立つばかり、籠の鳥かや恨めしや』の文句を、そつくり其のま
ゝ引用してある。そこで『其小唄夢廊』と云ふ名題が出来た
譯であります。

權八は今日で云ふモボの標本、角前髪の水も滴たるやうな色
男になつてゐますが、『實事譚』によるに、「色が黒くて痘痕さ
へあり、世に傳ふるが如き美男ではなかつた」とあります。そ
れが何うしたへうしの瓢箪か、同じ藩士の娘お八重、その時、
十五歳で藩侯の奥方に仕へ、八重梅と呼ばる、お小姓であつた
美しい女と契り、江戸をさして飄落の途中、強盗に逢つて三人
を斬つたが、可哀想にお八重は賊の刃に命を墮したのです。

權八は獨りですごく江戸に出で、淺草邊の知己の許へ身を
寄せてゐる中、お八重の事のみ思ひ出して鬱々日々を送るのを
主人が氣の毒に思つて吉原へ連れ出し、玉屋に登樓つて主人は
花紫、權八には小紫と云ふ遊女を買はせました。

ところが小紫の眉目風姿、亡くなつたお八重に生き寫しであ
ります。權八は戀しい女、懐かしい女と思ひ込んだが病み付き
で、足しゆく通ふうちに懷中が乏しくなり、日本堤で急病に仆
れた人を介抱せうとして不圖胴巻に手が觸つたのが間違ひのも
で、それから不良の徒になつた云ふのであります。

この『實事譚』にされ位の信を置いて可いか保證は出来ない
のですが、實録の一説として茲に掲げて置きます。



「權八」問答

高原慶三

○……今月は壽美藏、秀調君のために「其小唄夢廊」について伺ひたいものだね。

△……清元の「權八」だね、くれぐれもいつておくが「そのこ
うたゆめのよしはら」を讀むでもらいたいね。……だが、一
寸今月は御免蒙りたいな、知つての通り僕は純粹の大坂者だ
大阪者がこの江戸狂言のバリく、しかも清元物についてウ
ン蓄を傾倒せよなんて、お門違ひと思ふが……。

○……そう殊勝らしく謙遜せんでもいゝ、君は若い時分は清元
の一つも稽古したつていふぢやないか？

△……舊悪を洗ひ立てるなよ、が、思ひ出せば今から十三年前
……その時分は僕だつて若かつたよ、若けの道樂半分に、芝
の好壽大夫に——この人は先代延壽の弟子で、横濱の都川つ
ていふ料理屋の旦那だつた、江戸前のいゝ老人だつたが、大
正六年に歿くなつた、大阪で死んだ清三なんか同輩位かも知

れない。——そもく清元の手ほききが「權八」で「そうい
はんすりやちちからち……」なんて黄色い聲を張上たものサ
○……親不孝の回顧録なんか止せよ。それより本筋の話をして
くれよ。

△……さて、こんきは壽美藏君の權八、秀調君の小紫だらうこ
思ふが、去年の正月淺草松竹座でも出したそうだが、その時
壽美藏君が道具裏で大怪我をしたさいふが、さうぞ今度はそ
んなこきをさせたくないものだ。

○……そりやお互ひに望むころだが、壽美藏君の權八はさん
なものだらう？

△……未だ見参せぬがまづ上等だらうな、「かさね」の奥右衛門
もやつた人だし、羽左衛門のアナをねらふ人にして申分なか
らうよ。思ひ出すに羽左衛門の權八は、あの二上りの「榮え
ゆく、人一盛り花一時……」の花道の出が、未だに眼にのこ

つてらね、髪かみの毛けが二筋程ふたすぢほどバラリミ頼たのにたれて、淺黄せんわうの囚衣くわいでらんば馬うまに乗のりつた姿すがた……ミにかく權八けんぱちは花道はなぢの出いの第一だいいち印いん象しやうが及第じつだいの分岐ぶんぎ點てんなんだらうな、投節なげふしの「あいたさ見たさは飛立とびたてつばかり籠かごの鳥とりかや恨うらみめしや」の間ま、手ては縛しばられてるし馬うまにのつかつてるし、身み動きうごきも出來でない六つかしいころだよ、投節なげふしだつて、さうもこの頃ころ梅太夫うめたうふあたりのを聞きいてるミ隨分ずいぶん重々じゆうじゆうしくやつてるが、昔むかしはモット哀調あゐてうをふくんで、投なげ出すやうに唄うたつたものものミ思おもふがね。

○……それから權八けんぱちが舞臺まいたいへかゝるのだね。

△……そうだ、そうしてゐるころへ小紫こむらさきが「廓くわくをぬけて小紫こむらさき裾すそもほら／＼かけ來り」……色いろつほい處ところだよ、梅幸うめさちを思おもひ出すね。それから「柄杓ひしやうのえにし長ながかれ」になつて「南無妙法蓮華經なんぶみょうほうれんげきやう」になるのだが、清元きよげんではトテもこゝが大おほつかしいね大抵たいてい素人すねりがベシヤンコになるころだよ、「清心きよしん」の「南無阿彌陀佛なんぶあまたぶつ」の比ひぢやないね……清元きよげんの下手うでの長談ながだん議ぎはそれ位くらいにして、例れいの「いましめ切きつて劍けんの山やま」ミなつて、暗轉あんてん、これまでは權八けんぱちの夢ゆめだが、舞臺まいたいは夢ゆめの場ばの陰慘いんさんさに引替ひきかへて灯入とういりりの仲なつの町まちの遠見とんけんになる。花道はなぢから權八けんぱちが嶋しま色の着物ぎやくものに白しろ献上けんじやうの帶おびさいふ姿すがたで、天紅てんかうの手紙てがみをひろげながら廓くわく通とほひの出いで立ち、禿かぶがからむさいふ華なな場面ばめん、それが替かるミ、小紫こむらさきの部屋へやになつて清元きよげん「權八けんぱち」の下したミなるのだ。ミにかく、陰慘いんさんさが一轉いつてんして華なかな廓くわくになる、このイキがさうしたつて化政けいせい度ど狂言きやうげんのデカダンス美みだね。小紫こむらさきミ權八けんぱちが「嘘うそつき初はつめの正ただ

月つきか……」の清元きよげんで萬歳まんざいづくしの色模様いろもようがある。これは文化十三年ぶんかじゅうさんの正月せうげつ狂言きやうげんの「春會我菊はるあゐがきく」さいふ會あ我わ狂言きやうげんの一種いっしゆだからで……七代目團十郎しちだいめだんじゅうらうが權八けんぱちミ三郎さぶらう五郎ごらうをやり、三代目菊五郎さんだいめきくごらうが工藤くどうミ小紫こむらさきをやつたその名残なごりなんだよ。

○……文化十三年ぶんかじゅうさんさいふミ、二代目富本齋宮太夫ふもとばいざみやたうふが家元いえもと豊前太夫ぶんぜんたうふミ喧嘩けんかして清元きよげん延壽えんじゆう太夫たうふミ名なのつて、清元きよげん節ふしを樹たてたのが文化十一年ぶんかじゅういちねんだから、その翌あつ々じゆうじゆう年ねんになる勘定かんじやうだが、……それぢや「其小唄夢廓そのこうたのゆめくわく」は清元きよげん創生そうせい期の產物うぶものミ見えるな。

△……まつたく君きみのいふ通り、目下めげ人口じんこうに膾炙えいじする清元きよげんミして一ばん古いものだらうな。

○……作者そふしやは誰たれだい。

△……福森喜字助ふくもりきすけ、この男おとこは文化十三年ぶんかじゅうさん中に引續ひきつづいて「小菊半兵衛こぎくはんべゐ」「おさん」「女大夫めいたうふ」ななぎを清元きよげんのために作詞さくしして翌々あつじゆう年の文政元年ぶんせいげんねんに死しんでゐる。

○……清元きよげんの講釋かうせきはそれ位くらいにして芝居しばの本筋ほんすぢはさうなつた?

△……小紫こむらさき、權八けんぱちの色模様いろもようがあつて、それから小紫こむらさきが權八けんぱちの前まへ髪かみを剃かつて人相にんさうを讀よへる。その場ばが替かるミ、六郷川むつごうがはの渡場わたりばの捕物とつものミなつて、權八けんぱちが舟中ふねなかつで立腹たてはらを切るさいふのでケリだが筋すぢミしては大おほしたものではないが、役者やくしやの柄がらで見せる、藝ぎの滋味しじで見せるさいふ芝居しばだ。大阪おさかの見物けんぶつに一寸不向いっすんふかうかも知れんが、江戸えど狂言きやうげんミしてスツキリしたものだ。

○……清元きよげん流行りやうの折柄せつがらだし、そう君きみ一人ひとりで心配しんぱいしなくさも久しぶりの壽美藏じゆうみざう、秀調しゆうてう君きみだからキツミ人氣じんぎを沸わきたせるよ。



秀調、壽美藏、龜藏三君へ

京 極 利 行

今月、東京から來阪した、三優、秀調、壽美藏、龜藏の諸君
いづれも好感の持てる人だ。なかで最も記憶に新しい人は三年
振りかの秀調君。又最も古いのは十一年振りかの壽美藏君で、
龜藏君は五年振りか羽左、梅幸、中車諸君一座でやはり中座に
渡海屋を出した時、以來だと思つて居る。もつとも、秀、龜兩
君は今春京都で仁左老が「櫻時雨」を演じた時に、その舞臺で接
つしては居る。だから、僕としてはなんにしても久しく見ない
人は壽美藏君だ。

×

さちらかミ云へば、左團次君の一座で、あの一座特有の新作
方面で賣り出した壽美藏君、僕の短かい東京での學生生活時代
に記憶を辿つても、この優のものにして思ひ浮べるのは、前記
の新作物での役々の方に多い、ミりわけて左團次君一座への綺
堂物を中心にしてだ。だが、さうしたものか、こう云ふ諸作で
この人の役々には、好感のある印象を持ちながらも、その印

象が同一座した他優の印象を凌いで、第一に出て來る云ふも
のがない。妙に同一座した他優の印象を先づ想起した時、第二
に、それも心持ちよく續いてよみがへる印象がこの人のその時
の役に就いてだ。今考へて、同君の舞臺は随分熱のあるもので
はあつたが、その熱の内にも、よく云へば前記のやうに他を凌
いでかゝらぬ慎しやかさ、強いて云へばファイテング、スピリ
ットの不足さが伴つて居たのかとも思つて居る。そして同時に
あれ程の慎しやかさが保てたればこそ、大したつまつきもなし
に同君を今日の地位までのほらせたのかとも考へて居る。今度
の來演で久し振に見る舞臺にも、きつき、あの當時の慎しやか
さが残つてるのか、それとも、同君も四十を越した身だ、自分
の藝境に自信が出来ると共に、あゝした慎しやかさが一種の藝
の芽へに形を變へて居るか、非常に興味を持つて期待して居る
尙ほ清元の「權上」の權八を演るのださうだが、柄から藝風から
云つて、當然この人の身にある役だ。だが、新作で賣り出した
だけに斯う云つた役には必須條件の歌舞伎役者味云つたもの

が不足する云はれがちだつたのは數年前の同君の藝境だが、今では、この藝境を必ずや征服して歌舞伎役者味も、相當にのつた優ミなつて居ると思ふ。この點にも期待を持つて居る。他の新作では、これは成功するのが（よくく）の役ちがひでない以上）當然だ。萬一失敗でもしたら、まさかそんな事はないだらふ……。

▽

秀調君は、もう藝の出來てしまつた人のやうだ。今春、京都で見てから、一層そうした感を強くして居る。だが、最も記憶に残つて居るのは、この京都の時の舞臺ではなくて、三年前か？辨天座で見た紙治のおさんだ、あのおさんはたしかによかつた。今でも頭にはつきり残つて居る。然し、今度の「權上」の小紫はさんなのなのか、あのおさんが世帯を一人で引つかまへた、それで亭主を敷いたでもない、好いたらしいしつかり者のおいへはんとしてよくあつただけに、小紫も幾分所帯味が顔を出さねばよいがミ、心配して居らぬでもない。ミは云へ、歌右衛門があゝの如く半病人、梅幸がヒ、の入つた身體ミなつた現在では、東京の所謂大舞臺の女形ミしては、當然この優あたりが後を引き受けて行く番、秀調君もそれを自覺してか、最近非常に舞臺も大きくなり、今春の京都の際にも、はつきりそれが見へて居たものだが、今度はまたこれだけに貫目がついて來て居るか、一種の期待を持つて居る。それに書き遅れたが、秀調君の連想ミして一番頭に残つて居るのは眼ミ聲の美しく涼しいこ

ミだ、これが常に舞臺上の役に役立つて居るミは云はぬが、舞臺の人ミしては稀に見る眼の涼しく、聲の美しい人であることだけは確かなやうだ。

◇

實際のミころ、龜藏君はこれまでにミ云つて五年前に見たきりだがそれだけパットしたものを見せて呉れて居ない。それが今春京都で見た時に「宅兵衛上使」の顔世、「櫻時雨」の鷹山公、「曲物語」の繪師、この三つを見て、かなり驚いたミがあるのだ、それは舞臺が餘りにも從來のこの人ミ比較して冴へて來て居るからだ。きつミこの近年に同君の藝境には一轉機があつたのであらう。そして同君も遂ひに自分に對して自信が持てる人ミなつたのだ。ミ云ふのは自信の持てる連中でなかつたら、なか／＼舞臺が、あの京都の時のやうには冴へて、はつきりミして來ぬものらしいからだ。今度は、そんな役を演るのか知らないが、きつミあの冴へだけは、さんな役にでもうかがわせて呉れるにちがひない。こミに、この優は大阪が産むだ人だ、辨天座の向ひ側かにあつた川喜ミ云ふ旅館が同君の生家だミ聞いたやうにも思ふ。故郷に歸つた人ミして、前記のやうな進歩を土産に見せて呉れる、人間ミしてこれ程に愉快なこミはあるもの。今度飾つたこうした錦を、この次ぎにはさらに光りあるものにすべく、それ努めよや龜藏君だ。これは大阪の君の故郷の好劇家がおそらくは等しく君に切望して居ることだ。



「盲兵助」のことで

實川延若

「演りたいな演つて見たいな——」

こ、何時も夏になるこ、屹度私成駒家さんの雑誌の末の話題に登る狂言があつたのですが、そして結局は種々の情弊の爲に今まで實現されずに了つたのです。所が今月その狂言が突然上場されるこになつたので、私は吃驚りもし慶びもしたのです。その狂言さいふのは實は「盲兵助」なのでした、御存知の通り此の芝居は私の家の藝に申すこ、甚だおこがましい譯ですが、先代が初めまして以來、家に傳へましたので他人様からも許されて居る次第で御座います、東地では餘程以前に帝劇で上場致しましたが、又此の七月歌舞伎座で菊五郎さんの朝比奈藤兵衛で上演致しました。

尤も此の盲助さいふ役は、盲目の上に肺病患者さいふ厄介なシロモノで、所詮私の役所のものではありません。何故さいへば、其第一の素質である肺患にこんな肥い軀のものなられる譯も御座いませぬ、東京で上場の際もさういつたやうな批評が

あつたのです。然し今更神や佛を頼んだ所で肥い身體が急にやせる譯のものでないで、私は扮装に作り心苦しみました。その結果は……自分の口からいふのも異なるもので御座います。悪い方ではなかつたのでホツシしました。が、東京は又格別な當地の趣向に添ふか何うか、此度の上演に一層の苦心を重ねて居る次第で御座います。

猶、當興行は秀調、壽美藏、龜藏の三氏が、久し振りにお目新しい狂言を持つて下阪致して居ます事故、定めし皆様のお氣に召す事存じますが、中にも中幕の『嘉門三七郎右衛門』は山本有三先生のお作で、東京でも問題視された劇で、刷新な氣分懸命の努力を要素とするもので御座います故、定めし從來に演出法を異にしたものが、皆様の御期待を裏切らないであらう存じます。

本誌から「藝談」を、さいふお話でしたが、珍談や失敗談は異りまして、これも役所が違ふせいで御座いませうか、少し脱

線のキミが御座いますが、お暑い折からの事、これで御免を蒙

らして頂きます。



子をつれて

坂 東 秀 調

憶ひ出の大阪で御見得いたしましたのは、確か三年前の三月だ。記憶いたして居ります。

御招に依りまして、中座に出演いたす様になりましたが此度は愚息又太郎を伴ひまして、御目見得いたします。昨年十月に東京歌舞伎に六歳を以て初舞臺の御披露をいたしました。何分七歳を迎えました今日でも舞臺に立ちましては足がよろしくいたしまして未だ、子役にも足らぬ弱年者で御座居ます故、ほんの舞臺ならしに出演いたさせます次第で御座居ます。今少し年を加へまして初舞臺いたさせ様存じて居りまじたが、本人中々聞入れません、さうしてもお芝居に出るので申し聞入れませんで、年弱乍ら御披露いたしましたので御座居ます。此度當地へ参るに付きまして、出演いたさす役もありませぬ事故、伴ひませぬ筈で御座居ましたが泣いて聞き入れませぬ殊に當地御最賃様方の御すゝめによりまして同伴いたしました

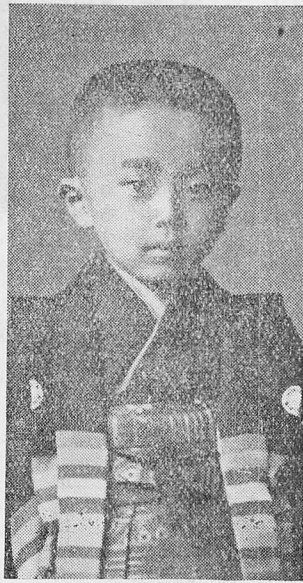
二番目狂言、其小唄、夢、廓の禿に出演いたす事になりました。何分卵を出ました斗りの雛鳥、御當地皆々様の御愛情をもちまして、行く／＼は成長いたし立派に巢立の出来ませ様御愛顧御引立に御すがり申す次第で御座居ます。

中座出演にあたりましては私として久々の御目見得でもありませし、女形として又、河内屋さんの女房役として十分に活躍して見たいと心勇んで居りました處御承知の如き狂言立に決定いたしました。『極彩色娘扇』で兵助女房お牧三、『其小唄、夢、廓』の小紫の二役相勤めですが、期待を裏切り如何にも物足りなく残念には思ひますが二役も難役の事でありませ故十分に研究いたして見る考へであります。

『極彩色娘扇』は三十年以前に故中村歌六故市川門之助に依りて上演された記憶して居ります。其後東京では餘り兵助を演

る人が無く従ひこの狂言も上演されず今日に及んだのであります。本年の七月河内屋さんが上京されて歌舞伎座で御やりになりました。今度私が女房お牧をやりますに付いて何分初役の事でもありまして、未だ手がけた事なく、殊にめくらの女房として、他の女房役と異つた點、壺坂のお里さんも違つた處に、仕草の上十分の研究をし、意を用ひなければならぬと思ひます。

『其小唄夢廊』では小紫を勤めますが、此狂言は震災前に新



富座で羽左衛門さんの權八歌右衛門さんの小紫で上演されました、私も先年淺草松竹座で壽美藏氏に演りましたが、之の狂言もあまり上演されないものであります、是は芝居を見せるより清元をきかず御芝居で、中には新内で演る優もあります、私はそれに付合つた事は御座のません、清元をうづみりませ乍ら俳優としては清元に動かされてやるのみで別に、ごご云ふ見せ場もありません、まあ俳優としてはそれだけが難物

こされてゐるものであります。

此狂言は清元の上下から成つて居りますので、歌、羽の時は小紫の部屋は出しませんでした、其後私が演ります時に小紫の部屋の上演致しまして、部屋の上だけで追出しが付きませんで權八の立廻を見せて打出にした様な譯であります、何を云つても難物二役十分まで行きますまいが皆様の御満足を得るまでに演りたいと思つて居りますが、何分皆様方の

六代目 坂東又太郎 (坂東秀調氏息當年七才)

九月中座に初舞臺

今度中座に出る秀調の子、六代目坂東又太郎は今年數へ歳七つ。同名は喜の字家系(守田)と桶家系(市村)の二つあつて、そのうちのいづれかと物議をかましたのだが、喜の字家系と決定、秀調の二子(本名金子勝)

の初陣に當たり八代目勘彌の呼び名だつたこの名を襲ふことにしたもので、家號は「東國家」、本人は女形でないといやだといつて秀調をてこずらしてゐる。

御聲援を御願申上ぐる次第で御座います。(完)

坂東秀調 (金子勝太郎)

明治十三年十一月、日本橋區蠣殼町二丁目に生る。明治二十九年、九世團十郎の門に入つて歌舞伎に初舞臺。三十二年二世秀調の養子となりて坂東勝太郎となり三十四年東京座にて三代目秀調襲名「不如歸」の加藤夫人に扮す、新派劇と提携したこともあり、暫く宮戸座に出勤せり。後左團次一座に加入、その當り役「先代萩」政岡。「野崎村」のお光。「阿波十」のお弓。「十種香」の八重垣姫。「兜軍記」の阿古屋等なり



躍るころ

市川 壽 美 藏

私が御錦地で芝居として皆様方に御目通を致しますのは、齋入さんの追善興行の時でもう十一年程にもなりません。其以前は引續いて二三度出勤致しましたが其れからは大正十二年の八月に小壽々女座を上演いたしましたして暑い折にもかまはらず非常な御好評を頂きました。そして東京へ歸りますと恐しい震災に會つたので御座います、御地の演藝の進歩が非常な勢いで進展せられますに付ても出演の機会を期待して居りましたが愈々九月興行として其運に到りましたのは實に悦しう存じます。

然しながら十年昔も今日も未熟な私は折角皆様の御期待下さるに叛きはしないか懸念にたへませんが私の主義で只だ懸念に舞臺を勤める覺悟で御座います。

東京で 高嶋家さんの一座に居ります關係で新作物をおもに上演いたして居りますが此度の二番目は珍らしく清元の權上を私の出し物いたしました。

此の權八は私が命びろいをした思出の深い狂言で御座います其れは昨年松竹座の初春興行の時御座いました、鈴ヶ森仕置

の場から夢が覺めて吉原揚屋になり幕が切れて秀調さん(小紫)二人で寫眞を撮つて居りますと突然私の頭の上へ大道具の張物がたをれました、私の氣の付た時は自分の部屋へかつぎ込まれて人々から看護を受けて居りましたが舞臺の責任上人々の止めるの間かずに六郷川の立腹まで演じ終りました其上に歌舞伎座へ掛持して居りましたので二里餘の道を自働車に揺られながら座へ着た時は全く重體に落入まして其の夜は醫師の注意で樂屋へ泊り加療一ヶ月程で 幸に全快いたしました。

其んな譯で私には一生忘れる事の出来ない役御座います。昔の權八は私のやうな不格好な人では無かつたでせうが、私には好ナ役の一ツとして精一杯勤めますれば何卒御指導をお願い申上げます。

よく皆様から新作もの三昔よりの舊劇ご何方が演りよいか等ごお尋ねを受ける事が有ります。いづれに致しましても役の性根を研究すれば中々むづかしいものです。昔の型を尊重し又は先輩の教を受ける事が出来ませんが新作物はそれく役柄

を原にすべてを工風して相手役の仕所に邪魔せぬよう自分の役を生かす様に心掛ますので、苦しむ内にも非常な樂みの有るもので御座います、そして皆様方から忌憚なき御注意や御奨励の御言葉を頂くのが何よりの樂しみ勵みに存じます。夏の夜等自分の持役を終つてお湯で汗を流し涼しい風に當りながら歸宅いたします時は皆様方のお氣付ならぬ俳優の最も慰安の一ツで御座いませう。

貴重な紙面を長く汚しまして恐入ります。終りにのぞんで皆様



浪花戀し

市村 龜藏

方の御健康をお祈りいたします。

市川壽美藏 (太田照造)

明治十九年七月十二日。東京市日本橋蠣鼓町に生る。明治二十六年先代小團次の門弟となり。市川高丸と稱し、翌明治座に於て先代左團次秀調一座にて「箱根鹿笛」にて娘お光が初舞臺後小滿之助と改名し、三十七年先代壽美藏の養子となり市川登什となる。明治四十年三月、明治座に於て六代目壽美藏を襲名なし墨塗女を名代披露狂言として上演その當り役は「三代記」の時姫。「鈴ヶ森」の權八。「修善寺物語」のかつら。「島邊山心中」弟源三郎。「御存知東男」の座光寺源三郎等なり。

錦地で生立つた私にして、懐かしい浪花の夢も戀心のやうなききめきであります。きのふのやうに想はれた片岡太郎時代のことも願へつて見ます三十一年餘りも経つて終ひました。臚氣な記憶を辿つて昔のペーヂを繰展けます、たゞ、涙ぐましいやうななつかしさのみです。

うつすり洗んだ空の下に、規矩の正しい小格子の家並、細

い通り庭、もう震災後の東京で見られないやうな、あの下町情緒は浪花特有のものになりました。

長い間東京へ修業に出た學生のやうな興奮で、私は錦地の皆さまにおめもじいたすこじになりました。

切角のお目見得に、これいふお土産もありませんが、舞臺の上で何か齎すこも出来ませれば、只今から努力いたして居

ります。

私の勤めます役は『出世の船唄』で妹いこ「嘉門」七郎右衛門の嘉門を振られてゐます。あの強い性格の延若さんの七郎右衛門に對して理智の人としての嘉門を何處まで演ぜられるか？七郎右衛門は全然反對の冷徹な智謀嘉門の役も武智智三の？一つの對照として随分困難な役であります。定評ある山本有三先生のお作ですから、研究して相當の成功を納めたいと思ひます。

本月廿六日に秀調さん壽美藏さんと共に下阪して、大阪で本稽古をいたします。

開場の節は何分の御援助を只管お願いいたします(東京にて)

市村龜藏 (市村寅太郎)

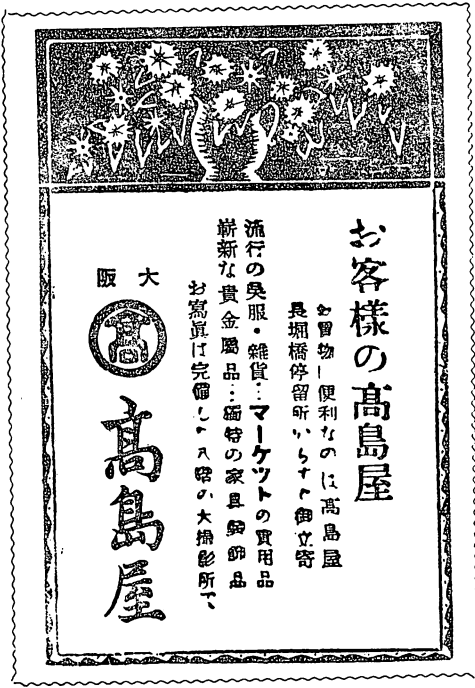
明治二十三年一月七日、大阪市南區東櫛町六十八に生る。七歳にて東京春木座にて今の片岡仁左衛門に連れられ初舞臺、二十一才にて市村家へ養子となり、市村龜藏と改名。その當り役は「銀猫」八郎兵衛。「三社祭」の善玉。「春雨傘」曉雨。「鞘當」名古屋山三等なり。

其小唄夢廊は

文化十三年正月江戸中村座「比翼蝶春我菊」に清元延壽太夫連中の淨瑠璃「其小唄夢廊」俗に「髪すき權八」——作者は福森喜宇助、役者は「傾城小紫」本庄介市、白柄十右衛門「菊五郎」本在助太夫、絹實彌市「友藏」、箱根の寺西閉心坊、幡隨院長兵衛「幸四郎」、白井權八「團十郎」等で書卸されました。

其の小唄の由來

小紫の死後八重梅の替唄が流行した。
「我は野に咲く躑躅の花よ、折つて見やれ散らぬ間に、我は野に住む螢の虫よ、土手の松明火をこほす、逢ひた見たさは飛びたつ許り、籠の鳥かや恨のしや、さんさよしなの思ひ……」
其小唄は之を指すのである。初代延壽太夫の妻女お悦の作曲で清元でも有數の名曲として今日も行はれる。



お客様の高島屋

お買物！便利なのは高島屋
長期橋停留所いらいすぐ御立寄

流行の呉服・雑貨・マーケットの買用品
最新な貴金屬品・獨特の家具・飾り品
お寫眞は完備し、大映の、大撮影所

大阪 高島屋

後面萩玉川 (全一場)

林長三郎主演

常へ名にしお、月の武藏さ歌人が、詠みやつらん、玉川の、調布の里々雪も見て、白砂ならぬ白布を、さらす手毎の出立ばへ

村で噂のよい仲さうし、今日は鎮守の夜まつりに、仕事もほんのうはのそら

唄へしづの手業もさよくに、浮世はなれて氣兼をすて、女房は洗濯亭主はほしぬの、他人はませすの長繩手堤づたひに來りける

さらす細布萩白露の、姿もついの色ざかり、しづの手業のそでたもこ、若い同士のなか、洗ふ浴衣ののりよりも、はなれまいぞミ水入らず、

流れにびたすせんたくも、やつみあけてはやつとんく、きぬたびよつへしや浮きびようし。

床へ時に不思議やくくらより、雲ふみはすし仙人が、下界へドツサリ落來り呼びいけられて仙人は、面目なけく

床へ高い山から谷底見れば、うりやなすびは花ざかりオヤまがきつこい

竹へさらばこれより天上の口舌をこ、に話さんこ

逢ひにゆこやれおきせん様にヨウ、忍ぶ便のはやし、うやつらや、表くとり戸でグワラくびつしやり、南

舞踊「後面萩玉川」へ

出演に就いて

林長三郎

残暑去りがたき折柄、みなみな様にはますます御機嫌うるはしく大慶に存じます。

さて私儀來る八月廿日より、道頓堀松竹座にて、舞踊「後面萩玉川」を若手俳優、中村扇、中村廓之助、中村市郎、中村魁童、中村かなめ等と、松竹ガクゲキ部女生の出演を俟つて上演することになりました、この踊は私の始めて演ずるもので、いつもは新時代に適はしい新舞踊を御覧に入れるのでございますが、この度は、特に傳統的な在來の舞踊に依つて懸命の舞臺を相勤める覺悟でございます。

松竹座の舞臺へは懐しい一年振のお目もじなれば、お紐りするは只管に、みなみな様の御ひるもと、何卒、開演の曉には舊に倍した御後援のほどを伏してお願ひ申し上げます。敬白

無三寶背戸はいばらの垣つゞき、顔も手足もちく／＼ミ、こいつはたまらぬよしよぞいなしきもなや

床 口から出まかせ氣まかせに、いふもあさき後ろ面

常 思ふお方の聲はせて、野暮な北風つむじ風、オヤ聞いたやうだね。

竹 ア、何ぬかしやがるで、福め。

常 おやまア可愛さうに、なんで私しうで、福だへ、エ、腹のたつ

竹 へ、空なみだでは、いからねエ。

常 アモシ、そもや戀路のわけ道を、お前にならひそれからは、外の殿御のはだしらす

竹 エ、又しても、あの顔のやうなまつか、なうそをぬかし居るわい

合 夕べも酔ふて寝てるたら、雲間へだたる小ざしきで、あまのじゃ／＼め

ミ、もらやつきあい、おれの耳へ聞き取つた。それでもい、わけあるかいや

常 テ、おかし、おほへもない事云ひ立

竹 て、私しにあいそがつきたのか

常 コリヤおもしろい、ぶたしやさんせ

竹 テ、いたさいでなんにせふ

常 オホホ……

竹 アハハ……

竹 下界知らずの痴話

常 わけんか

常 さへ行く月の光りまで、霜かままご

唄 ふ川波や、賤が手業に晒調布

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

条 仙人

食満 南北

林長三郎氏の松竹座の夏場は吉例のやうになつてゐます、いつも「新舞踊」なのですが、今度は一ツグツと古い處でといふので「条仙人」といふ事になりました、この前梅島がやはり同じ題目でやつてゐますが、それとは大違ひです、これは河竹新七の作で、越後獅子と後面を一つにしたやうな可なり賑やかな所作としては頗る面白いものです、ガクゲキ部の生徒も全部東京淺草の松竹座のコケラ落しに出演するので一同が上京する中から特に日本舞踊の旨い連中をのこして一座させますまた扇、扇之助、魁童、市郎、要といった例の次の時代の役者連も助演します。これはまた、いつもと變つた面白い事だらうと思ひます。



淡海作者部屋から

昔のナンセンス

楠本木念仁

ナンセンス云ふものはあながち舶來ものに限つた譯ではない、昔の人間は現代の人間の様に理屈にこだわらないだけ却つて良いナンセンスを持つて居た、昔の小噺の中にそれがらよいく窺はれる、以下私が喜劇の材料にも蒐録して居た中から二三拾い上げて見やう。

尻餅

或る大きな寺の壇越に金持の檢校が居た無論檢校だから盲目で富裕である、毎月の齋日には澤山の餅をへて寺の小僧に一個宛與へるのが例になつて居た、其與へ方が變つて居る、庫裏に小僧をずらり

と並べて頭を撫せては坊主頭の上に餅を一つ宛置いて行く、やがて又其日が来た、一人の狡い小坊主が何んでも今日は二個せしめてやらうと手ぐすね引いて待つて居る、檢校は順に小僧達の頭を撫でゝは餅を置いて行く、先刻の小坊主、此時ミばかり、逆立ちをして尻をくるりまくつた、目の無い檢校、小坊主の尻を撫せて「あゝ二人か」尻こぶたに餅を二つ乗せて行つた。

田舎者

都へ上つた田舎者、薄馬鹿の癖に吝嗇なのを面憎く思つた宿の若い者、町の錢湯

浪花座

九月興行案内

志賀迺迺淡海一派

(狂言)

- 第一 娘 一場
- 第二 畫僧月 二場
- 第三 心の綻び 二場
- 第四 宣傳 萬化 二場

廿一日初日 毎日晝正 晝夜二回開演

重なる役割

莊太の妻おとみ、老紳士伊山(龜鶴)高利貸山本、ガソリン屋(辨慶)乞食おため、伊山妻辰子(樂太)貧民の備、辨護士權藤(白石)仲居しづ、孫娘およし(かもめ)青年川崎博、若い紳士(伊吹)長女お春、娘雪子(一松)貧民の辰、いやしき男(老松)乞食松助、老紳士(樂遊)青年春木、バイカラ女(松葉)幫間梅作、いざり乞食、仲居おちか(銀波)番頭九兵衛、電池屋(柴雪)番僧法辨(紅葉)娘徳江、三女お雪、娘櫻子(春江)娘玉子、お花、洋装の女(武子)女給なみ(富士子)娘光子、ウエター春子(伊都子)娘里枝、ウエター富子(友子)娘松子(ウエター)娘みさを、ウエター花(静子)唐糸太夫、師匠芳野(多景島)魚屋久吉、納所辨長(源五郎)賢次妻靜子、權藤妻羽根子(辨天)寺男達平、老人敬助(十太郎)千本長者、梅津兄莊太郎、ドラネコ主人(太郎)月偲和尚、弟正木

に案内するまで、

「旦那、京ではお湯に入る時、思ふさま横面を打つのが禮儀になつて居ります、撰たれたからつて腹を立てたりなんぞするに田舎者だも笑はれます」

「やれ／＼都は怖ろしい」

湯に入るに若い者いきなり眼と鼻の間を撲る、若はれては話らぬぢつと堪へて居るに又撲る、こう俺ばかり禮儀を受けて居ては生命に拘へ、誰れかに禮を返してやろうと待かまへて居るに、よほ／＼の老人が入つて来る、待つてましたごぐわんを撲り倒す。

「やい、さこの馬鹿ぢや、だしぬけに老人を撲り倒す奴は」

三利腕を捕へて捻ぢ返す、田舎者持て餘して、

「おい若い衆、此の人は大分田舎者じやのう」

珠 數

「あの人は大きな笠をきて、首に珠數を

懸けて居る、さうしてあの珠數が笠きた儘に首に懸けられたのやらう」

「馬鹿だなお前は、あれは、珠數を首に懸けてから笠をかむつたのさ」

「成程、物は聞かぬに分らぬものだ」

錢

「お母／＼、おいら今錢を拾つたよ」

「おゝよく拾つた、そして錢は何處にあるの」

「拾つたは拾つたが又落した」

焼 味 噲

子僧には焼味噲を喰ふに見せて秘かに鶏卵を煮て酒をたしなむ和尚、明日は嵯峨に花見に行かん、道遠ければ蹕より起きて用意せよ子僧にいゝつける、翌朝和尚を起す、和尚、今刻ぢや、小僧、何刻か知らぬが焼味噲のお父さんが三番鳴いた

隠 居

賢次、豚勝亭主人(淡海)

第一、娘 (梗概)

或る裁縫教授所へ習ひに来て居る多くの娘達は、今日去る紳士が嫁の候補者を見定むべく来る筈のことを聞き一同急に色めき立ち扮装を凝して待つ事になつた。ところへ青年紳士は來たが、實は嫁の候補者ではなく猫を貰つて歸り行くので一同啞然失望する……

第二、畫僧月僊 (梗概)

都千本長者梅津傳兵衛は島原の太夫唐糸にうつゝを抜かし遂に落籍して手活の花とせんとするが、唐糸の所望で、月僊の來臨を乞ふ氣輕な月僊は破れ衣のまま遊興の席に來り唐糸の意を容れ百兩の執筆料にて唐糸の腰巻に觀世音菩薩の尊像を描いて與へる、併し無慾な月僊はその命を我物とはせず米に代へて唐糸を施主となして貧民に施行する、唐糸を落籍した傳兵衛は行列美々しく歸る途次此様子を見て、初めて無明の夢醒め月僊の高徳に感ずると云ふ。

第三、心の結び (梗概)

正木賢次は二十年前英國に渡り徒手空拳にて今は百萬の財産をつくり上げたが後嗣者がないので歸朝後、兄莊太郎の娘三人の内一人を養女に貰ふつもりだつた、尙莊太郎には三十萬圓を分與せんと思つたが、莊太郎は早くも慢心を起し藝妓を落籍した宅を新築するなど贅澤の限りをつくし、家庭の平和を紊さんとするのを見て賢次は財産の分與を思ひ止まり其娘迄が虚榮の念強く、到底末の見込なきを看破して他より養女を迎へる。

これお父さん隠居ご腎虚さはおなじ事が親「馬鹿、隠居は貴様に身代渡しておれが樂になる事、腎虚云へば過た事だ」子「何が過ぎた事なの」親父頭を搔きながら「腎虚が」

こ た つ

ある山奥の物持ち、炬燵を拵へる、村中炬燵を見たものなければ珍らしく思ひ、與次兵衛さん所では疊を四角に切り四本柱をくみ、天井を張つて火を焚いて居る、ミ見物が群衆する、後より行きたるもの歸りて、残念ながら遅かつた、もはや蒲團を懸けて見せなんだ。

十 二 支

十二のえこ集つて云ふやう、この十二支の内、ひつじのばかりで外に三字の名はなし、何ぞ二宇にして、ひつじか、つじかかなされたがよからう云ふ、ひつじ成程御尤、それなら一寸外科へ參ろう、何故に、はて痔を切つてもらふ。

浪 人 者

尾羽打からした浪人者雪隠へ行きたれさ着るものなし、是非なくたしなみの鏡を裸身に着込み雪隠へ入る、折ふし子供何心なく雪隠の戸をぐわらり開き、早々駈け戻り「皆来いやい、祭がうんこして居ろぞ」

誰れてもやる事

若夫婦、亭主が永の病氣、或る老醫を迎へた所が、藥が合つたかすんく癒くなる、玄關へ妻君が送つて出るこようそろくお粥を癩して軟かい御飯を上げてもよい、お肴も少しはよからう色々深切な注意、妻君、何氣なくきちん座つた膝の上に兩手を置いて双方の食指を拵同士を引附けて菱の形にして膝の附根の所に置き、いろく御丹精、ありがたうございます、ミ禮を云ふたが生憎此醫師耳が遠い、妻君の指の恰好を見て「あゝ、それはまだ早いぞや」

角 座

松竹家庭劇

九月一日初日夜六時 二回開演

茂林寺文福合作

詩賀 里人 心 壹幕

一、眞 桐野 立夫作

二、ヒステリー時代 壹幕

詩賀 里人 子 壹幕

三、玉 茂林寺文福合作

詩賀 里人 目 二幕

四、猫 重なる役割

第一、眞 心 一場

鮮人金次郎(一雄)その妻彩里(米津)鮮人梅吉(鐵彌)會社員田口啓三(三樂)その妻時枝(東)家主井川鶴松(富士島)お常亭主三造(三郎)

第二、ヒステリー時代 一場

ダンサー(石川)主人(藤村)その弟(高田)主人の妻(米津)

第三、玉 子 一場

阿部文助(小織)文助妻お静(十五)その悻福松(一雄)妹妙子(東)棒手振濱脇(藤村)家主楳原(七三)

第四、猫の眼 二場

野上徳次郎(十五)藝者照千代(石川)徳次郎叔父源一郎(小織)その妻政枝(米津)關東煮屋助造(天照)運轉手平田(一郎)帳場重吉(十五)



角座松竹家庭劇だより

只今工事中

澁谷 一雄

笑ひは平等である。笑ひの前には地位も名譽もすべて偶像である。資産家だから云つて黄金色の笑ひ方もすまい。プロだから云つて南京米目刺の笑ひ方もしない、やはり、ゲラ、ゲラ、ソハツハである。笑ひは不平のクリーニングであり唯一の人生苦の逃避法である。笑へ、笑へ、人生須からく笑ふ可し、笑ひの大旗を翻して新しい喜劇への第一歩を踏み出した私達は、云はば産聲を上げた赤ん坊です。よき指示を願はなけりやならない赤ん坊です。

十五兒貴も私もまだ若いんです。何物をもつても購へない若さを武器に持つ私達は笑ひへの道へ精進して、皆様の御聲援に報ひる決心で居ります。創始されて幾伺もない日本喜劇の歴史は先輩の努力に依つて可成な發達もし、開拓もされて居ます。もう嶮岨な山路は切り開かれあるのです。唯残されたものはその山路を泥濘のまゝに捨て、置か、アスファルトの立派な國道にするか、アスファルトにはつきもの、工事處がアスファルトの臭氣があります。風中のコールドの臭氣があります。風

第一、眞心

大阪郊外には朝鮮日嫁人や日本の會社員、職人等の階級の人達が住居してゐる、又至つて仲睦じく暮してゐた。其内に鮮人梅吉は妻彩里に日本服を進めたが彩里は聞かなかつた、會社員田口の妻時枝が自分の着物を家主井川の手を経て送つた、其着物が家主から梅吉の友人金次郎の手に渡したのが間違で、互に事情の知らぬ金次郎と田口が出會ひ問題の着物から田口は金次郎を盗人だと早合點して意見したのが元となり喧嘩する時、妻時枝が來りて進上せし物と判り互に喜ぶ其様子、見た彩里が時枝の情ある贈物を心から喜び、馴れぬ日本服を着るといふ筋。

第二、ヒステリー時代

或る文化的新家庭。圓滿なる家庭(若夫婦)が有つた、夫はフト魔がさし或る踊場で捨てた、新しい女の踊子有る夫は踊子を捨てた、新しい女の踊子は夫の勤め先、親里と駆廻りメチャクにした上其家庭に居座り尙も復讐せんとした時妻は貞淑にし温順な氣質の人にて反つて大切に取なす、行衛をくらましてゐた夫が突然歸る、踊子と夫は争ふ、夫は妻への面目悪く毒をのんで申譯せんとする、妻驚いて止める、踊子冷靜に嘲けり夫がかいた起誓文出し冷笑する、夫突然と毒を呑む(偽藥)、妻の弟は驚き介抱する、踊子此體見て呆然と其場を立去る。夫は悔悟、妻と弟は眞實と思ひ介抱する此模様よろしく……。

向きの都合で恐ろしく鼻もならない時があるかも知れません。だがその時は、誇る可き國道の建設だみ許して頂きたいのです。いや弱い音を吹いて、逃げを張るんぢやありません。先にお願ひをして置かないで沿道の住民から抗議を申込まれるおそれがありますから。

十五兄貴は茂林寺文福のペンネームで脚本を書いて居ます。さうした習慣か、今迄の日本の喜劇俳優の重要な人達はみんな自給自足の自作自演自監督です。尤もそうしなければ、やつて行けない程脚本難でした。最近の様に文壇の知名の人が喜劇に手をつけてくれませんでした。それがために喜劇の首脳者で筆を執らないものは殆んどありません。だが、劇界の一角に喜劇の存在が確保せられ、執筆家も多数現はれた現代ではその苦勞もや、薄らいだ云ふもの、まだ職業喜劇俳優？ミ研究的に喜劇を上演しつゝ、ある人

達との間に隔たがり取り除かれない内は自給自足の状態を續けて行かなければなりません。お互にそのへだてを除いて長所を擲り、そして誇るべき喜劇の建設こそ、今度の企ての使命だらうと思ひます。

脚本としては可成時期にさもなつた人生批判を加へた作品も發表されてあります。巧者を極めた作品もあります。

唯もう一つ日本喜劇に興へなければならぬのは、演出法でせう、尤も此れも國道工事中で竣工の曉きまで大きなこは言へませんが、そうだらうミ私は思ひます。

今後の脚本、今後の演出と言ふ大きな問題は宿題として残して頂いて、新らしく第一歩を踏み出した私達若いものが力強いステップで廣々とした工事中の國道を進んで行ける様に御指導ミ御聲援の行進曲を奏で下さる事をお願ひ致します。

辨天座

新潮座一派

八月三十一日初日 晝正午二回開演
夜六時

東京日日新聞連載
大阪毎日新聞連載
瀬川 春郎劇化

第一、東海道邦坊漫畫之旅 十六景
夕刊大阪新聞掲載
鳥江 鏡 也作

第二、實説返討崇禪寺馬場 五幕八場
その配役

金野成男、生田傳八郎(山口)和田邦坊、安藤喜八郎(野澤)生さん、生田惣兵衛(高橋)金野成造、遠城惣左衛門(吉田)白井權八、平野峰夫、炭屋五郎八(原)米屋佐平(眞木)番頭長吉本多信濃守、家主官兵衛(泉)百姓平作、後室おいく(桃木)雲助寅、木村紋彌(三樹)友さん猿市、醬油屋彌助(松村)喜多八、松平主殿中山(倉さん)、篠原源次郎(進藤)小山内友三、遠城治左衛門(波多)彌次郎兵衛、日念和尚筒井(高木)亡年、橋場の太平次(小川)花子、染の井(守住)お初(谷崎)おも八(富士川)お雪(葛城)女中、お花(大東)女房おまき、お龜(小松)おいろ、女將お清(三好)

梗概

新組織以來好評の辨天座の山口、野澤、波多、筒井等の新潮座はこの勢ひで九月へも打越し三十一日初日以來更に小川隆を加入させ



御挨拶に代へて

曾我廼家十五

露の世は、露の世ながら、さりながら

一茶

ほんまに此んなもんで、仲々悟り切れる
もんさ違ひます。

おんなじ悟り切れん浮世なら笑ふて暮ら
さな損だすがな。

詰らん事に疍立たり、泣いたり、怒つ
たり、ド、のつまりが頭腦を悪るするか
心臓病か、なんか間尺のあはんくるしみ
をくり返すより、

さも角も、あなた任せの、年の暮 一茶
さもたれか、つて笑ふて暮らすのが何よ
りだす。

いえ、商賣を勉強して言ふてるのさ違ひ
ます。

人さんの笑ふておいでになるのを見てさ
へ、胸の工合がスツミするわての性分だ
すよつて、なる丈け笑ふて暮らす同志を
求めたいさ、今度の家庭劇を企てまし
たのでおます。

笑まくなはれや、うんさ笑ふて貰うて、
不景氣風も吹き飛しておくなはれ、吹き
飛して貰ふ積りで一牛懸命やらしてもら
ひますけさ

十人の目利きはづれた花の雨、になるか
も知れまへんが、其處のミころは
わが門へ來そうにしたり、配り餅 一茶
のあて違ひさ、此れもお笑ひ草の一にさ
うぞ勘忍しまくなはれ。

て活躍。出し物は、第一は大坂毎日新聞所載
和田邦坊氏原作「東海道漫畫の旅」を瀬川春
郎氏が十二景に劇化し、劇中の邦坊には野澤
英一が原作者と友人である關係上、本人着用の
旅装及び持物等を借り受け一角の漫畫家と
なりすまし、本物の驢馬を舞臺へ曳き出して
東京出發より京都三條迄のモダン膝栗毛を見
せてゐる。原作の漫文に現はれた人物は悉く
現代及び過去を通じて登場させカットバック
式の舞臺で興味深く、邦坊描く所の白井權八
や初花、彌次喜多や吃又等が現はれる。

第二は夕刊大阪新聞所載、鳥江鎮也氏新作
「返り討崇禪寺馬場」五幕八場で、これは實説
に依り敵役の生田傳八郎の生涯を中心に遠城
兄弟の返り討一件及び正徳三年全銀御吹替以
後の世相を取り入れて脚色され、從來の傳八
郎は百日靈の大悪人だが此の度は若く美しい
男で非常に卑怯な近代人と共通した性格の所
有者とし、北の新天地の茶屋の女將との戀愛事
件や遠城兄弟を崇禪寺馬場で返り討に逢はせ
てから、火の病ひに掛り兄弟の亡靈に悩まされ
れた傳説を怪談として季節向きの狂言とされ
て居る。山口俊雄の傳八郎を始め治左衛門は
波多、喜八郎は野澤が扮し、崇禪寺松原では
兩花道を使つたり、怪談ではいろり抜け、行
燈抜け、佛壇抜け等のケレンに特に花火を使
用し、傳八郎が大の幻覺を描出し、凄慘な新
工夫を凝らしてゐる。新加入の小川隆は橋場
の太平次といふ偽金使ひで、すつかり菊五郎
張りで大熱演。

第三回公演 技藝座

合評會

主催 次の時代の會

土坪松山池肥小豊浦岡高高土木澤原松三隱並福	列	福	井	山	並	隱	三	松	原	澤	木	土	高	高	浦	豊	小	肥	池	山	松	土坪						
内本下田川岡野島原安屋村田田宮宅吉冷	廊	井	山	並	隱	三	松	原	澤	木	土	高	高	浦	豊	小	肥	池	山	松	土坪							
屋憲良昌陽一	順	保	拜	冷	之	文	宰	天	元	太	三	天	幸	文	之	慶	吸	慶	慎	富	佐	陽	昌	良	憲	屋		
充行逸一威三吉郎藏藏三江作郎來慶明助濤石郎		石	濤	明	慶	來	郎	作	三	藏	藏	郎	吉	三	威	一	逸	行	充									
中淺片實中實尾中中片片中中中中		京	山	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	
村尾岡川村川上村岡岡村村村岡村	併	藤	谷	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	中	
福大我八福延卯之魁	優	秀	清	松	清	松	清	松	清	松	清	松	清	松	清	松	清	松	清	松	清	松	清	松	清	松	清	松
助吉童藏壽郎助童扇郎	側	雄	治	治	治	治	治	治	治	治	治	治	治	治	治	治	治	治	治	治	治	治	治	治	治	治	治	治
自都合で短縮を委された																												
都合で短縮を委された																												
都合で短縮を委された																												

開會
市郎 本月の當番としまして、一同に代つて御挨拶申し上げます。御暑い中を賑々しく御來場下さいますて厚く御禮申し上げます。つきましては本席は過日の技藝座に對して忌憚ない御批評を述べて戴きたいと思ひます。

大西 甚だ潜越乍ら進行係を私がつとめます。早速合評會にうつります。——最初は技藝座全體の一般論から始めて戴きたいと思ひます『妮鏡双繪草紙』『晒女』『心中萬年草』『九變化の内傾城と石橋』『夕涼空住吉』といふ狂言の並べ方でありませう、これらについて忌憚なく言つて戴きたいと思ひます。

第一、『妮鏡双繪草紙』三幕山上 この度の中でも『妮鏡』は技藝座の狂言として決して上々のものではないと思ひます。若い將來ある人々にあつた散漫すぎて一貫した何ものもないものを選んだといふことは失敗です。

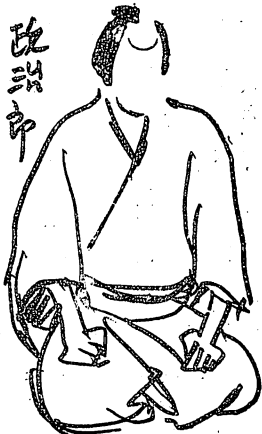
京極 三時から始つて四時間も、あんな長い内容のないものを演らせるといふことは、若い人等のエネルギーの勞費だと思ひます、あんなものを演るくらいなら『寺子屋』か『妹背山』の方が好いと思ひますもし演るとしてもあんなカットの

仕方では筋が分らないんですね
並山 大體私も、山上さんや京極さんの意見に賛成です。あの芝居は私は頭が悪い所故に分らなかつたのです。見る方でも結局時間の勞費といふことに歸します。

高安 皆さんの御意見は一應ご尤もですが、私は少し意見を異にします。カットされてゐるので大體荒唐無稽な芝居が一層分らなくなつてはゐりますが、然し今の内にあつた芝居を演つて置くといふことは必要だと思ひます、先輩の多く生きてゐるうちに演つて置かないと、これから十年なり二十年先になつてからはあつた古劇は復活できなくなると思ひます。そしてあの狂言には夫々に演る所があつて外の狂言にも應用が出来ます只カットせずにやれば未だ見られるんですが、現に浪七が腹を切つてから、腸を海へ投じてその靈魂で船が戻つてく。あの場面なぞも私が以前見た時はもつと悲壯な面白さがありました。

高原 僕も大體高安さんと同意見です。あの芝居はテクニク的一大集大成だと思ひます。殊に福萬壽君の奴三千助の立廻りを見た時『薄雪物語』や『伊勢物語』を聯想しました。カットの仕方は随分亂暴で

改訂版のほ七支



書かれた歌舞伎劇ですから與太もいゝと思ふ役者に演り所があればいゝのでしよう。

山上 高原さんの仰有ることは誤解かと思ひます。木谷さんは歌舞伎其のものが與太だと仰有つたのではなくて、藝そのものが與太になつては不可ぬと仰有つたやうです。

大西 それでは姫籠の役々について御批評下さい、最初に延太郎君の小栗判官を願ひます。

京極 見たまゝで惚れられなかつたのが遺憾でしたね。(哄笑)

大西 直ぐ惚れられないといふお説があります。扇の風間八郎について何か

高安 私は左團次のは見たことがありませんが……

大西 鷹之助の横山太郎と瀬田の橋藏については如何でしやう。

京極 非常によかつたですね。

高安 私は若い頃鷹治郎のを見ました。雁之助君の横山太郎も橋藏も巧いですよ、餘り巧ま過ぎて末が怖しいやうな氣がしました。餘り器用過ぎますね。

豊岡 今度の『小栗』を見て感じたの

ですが全體が心持が主になつて、芝居らしいものが少ないやうに思ひました。心持よりもあつた狂言には表現に力點を置いてつとくささが欲しいですね。

高安 大體どの人も言葉(セリフ廻し)が悪いやうです。發聲といふことについて大いに研究した方がいゝと思ひます。猿之助君なんか清元をやつてゐるので遂に聲變りをしなかつたそです。ですから諸君も義太夫でも長唄でも或は謠曲でも大いにやつて臺詞を明晰にして貰ひたい。

(片岡我童氏來場)

大西 それでは次は福萬壽の奴三千助と女房小ふじについてご意見を

坪内 私は『小栗』の狂言を一種の興味を以て見ました。殊に技藝座といふもの、目標をあれによつて見たのですが大體不満はありません

鷹之助君も福萬壽君の小ふじも大變いゝと思ひました。

高原 福萬壽君は義太夫をやつて居られるので、三千助も小ふじも大變に好いと思ひました、義太夫をやつてゐるだけの効力がありました。

木谷 高原さんは音曲の名手であり

ます。(哄笑)

京極 福萬壽君に希望したいのは、

最少し繪を兎て型を研究して貰ひたいと思ふ。

大西 次は魁童君の鬼丸胴八を隠岐 非常にいゝと思ひます。唯も少し突込んで臺詞のめりはりをやつて貰ひたいと思ふ。只若きが邪魔をしてゐたのです、年が足らないのが氣の毒である、その外は涙ぐましいまで熱心にやつてゐた。

大西 それでは中村市郎の駄々の勘兵衛について。

京極 あれは配役上の失敗だね、可愛さうだ。……

高安 役が悪いですね、年の若きが邪魔をしてゐました、努力するにも仕様のない役で……

大西 ではかなめの櫻井新吾を。高原 奇麗で邪魔でない……

大西 役柄によつて認められないものもありますから、何うか御同情を願つて置きます、それでは右若の妻淺香と四郎藏を願ひます。

高安 氣の毒な役です、演り榮へしない損んなワキ役です。

木谷 僕は去年『三代記』のおくるを見て敬服してゐるのです、今度

は慥に役が悪い、右若にはもつと好い役を附ければ今年はずつと進境を見せてゐた人だらうと思ふ。

大西 我久之助の照手姫について。

木谷 いゝ所がカットされてゐます

高原 歌舞伎は大體與太なものなんです、與太なくしては歌舞伎は考へられません、何うせ役者本位に

す。

木谷 私は大體感心しない方です。廢類期の歌舞伎劇といふものは、自分勝手に芝居をして、何んだか田舎芝居といつたやうな氣がするものです。都會には殆んど残つてゐない、得手勝手な役者本位の興味はあるが今の若い人達には考へものだと思ひます。勿論既成俳優にはいゝかも知れませんが、各人が仕勝手な惡達者に陥る點からして、非常に弊害があると思ひますその點で若い人等にはほんとの型ものを望みます。『姫籠』は樂ではあるが勉強にはならないと思ひます。

大西 我久之助の照手姫について。

からね。

高安 小萩の件が出てゐないので只のお姫様で終つてゐます。もつと艶が欲しいと思ひました。

高原 顔のつくりが、何うも光々し過ぎる。

大西 次に我久三郎君の照日の前を高安 づつと前に箱登羅のを見ました。が、もつと下素張つてゐた。我久三郎君のはあれでいゝ可変らしい。

山上 毒酒を嚙んでからまで三枚目で通してゐたが、死ぬまで三枚目でなくてもいゝと思ひました。

高安 よたな狂言ですから、三枚目で通してもいゝでしょう。

木谷 達者である、少し自覺して欲しい悪達者に陥入るのはよくないと思ふ。

(中村福助來場)

大西 八百藏の細川政元を……

京極 何んだか子供が駄々を云つてゐるやうで。

隠岐 非常に無器用に演つてゐました。が、然し八百藏君は將來に期待できる器であると思ふ。

大西 では政治郎の浪七について御批評下さい。

浦野 押出はよいが、最後の幕の科がもつと大舞臺に調子を張つてもらいたい、くさくない所が却

つてこの人のいゝ所だ、若いので勘所に倣つてゐませんが成功でせう。

京極 政治郎の浪七はあれでは浪七と叫ぶ感で、女房との釣合が

高原 浪七は受身な役です、あの歳で怠屈な場面をあれだけにこなせば好い方です、しかし臺詞廻しが素直過ぎます、もつとよたであつて欲しい。つまり吉右衛門のよ

うに稍誇張した(こゝで吉右衛門臺詞を真似る)といふやうな突込んだ所があつてゐる、勿論教へる譯ではありませんが。

山上 先刻から政治郎君の浪七に限らず役々に就て若いといふ人がおありですが、劇評は若いとか若くないとかいふことは技藝の根本問題とは別なことであらうと思ひます。政治郎君の浪七はいかに

も大風に座頭らしい貫録があつたことは嬉しうです。どうかあの大風な藝だけはあのまゝいつまでも保存してほしい。

高安 私は大體同意見です、今の若さで突込まない所が生命です、大芝居の貫録は充分です、堂々として迫らない大味な所もあり、いゝ

木谷 政治郎君の輪廓の大きいのは

技藝座に於ける唯一の特色をなし
てゐる、政治郎君計りではない銘々
が各個に特色を持つてゐて大變
に面白いと思ふ。政治郎君の浪七
は非常に難役で、内容も技巧もな
いもので政治郎君の演し物として
は餘り輕る過ぎる、もつと死に
のぐるいになつてやれる、充分に
全生命を現せるやうなものを望ん
でゐる。

第二晒 女 一幕

大西 それでは、中幕の『晒女』と九變化のうちの『傾城と石橋』を一括して御批評を願ひます。

松本 私は將來ある若い技藝座の人に二つの所作を選んだといふことは、スターシステムとしては好いかも知れませんが、技藝座の上演ものとしては、もつと考へて貰ひたいと思ふ。また劇場政策として

も何うかと思ふ、將來益々大衆と接觸して行く藝術として、この二つの所作は不適當なものと思ひ

隠岐 この度の舞踊は感心できません。然し舞踊が將來賞美すべきものでないといふことに就ては反對であります。私等は何か華やかな

舞踊を選んではいけない、もつと絢爛

女も結構ですがひとしきんには最少し色氣が欲しいと思ひました。涼しい『晒女』の後に『石橋や傾城』を持ちこんだ事はまづいと思ふ。松本 私は舞踊を排斥したものではありません。只技藝座としてあつた風なものはいけなないと申したのです。

坪内 私も二つまで演じた點には反對です、そしてひとし君の『晒女』は奇麗すぎたやうに思ひます『晒女』の歌詞の中に、園十郎娘云々の件から見ても、美人で華奢であるよりは、イカツイ方がいゝのではないでしやうか?、それから傾城は色氣が乏しかつたやうに思ひました。政治郎君が傾城と石橋を續けて踊られたあの精力に實に愕きました。晒女は關東の振付け

を山村さんが改修されたものなんでしょうね。取巻きがうさいといふやうな評を見ましたが、僕はあれでいゝと思ひます。

我童 山村の振は大坂個のものだと思ひます。『晒女』の役はお仰せの通り園十郎娘の件から見ても、もつといかづいものかも知れませ

りません、然し私は東京のは全然見て居りませんから……

大西 澤田さん、これについて何か



澤田 山村わかといふ人は私もよく知つてゐますが、甚だおつちよこちよいの人で、こういつた振なぞのことについては不案だと思ひます。この前の藝妓の會の久米舞の時などもあの人が振付をしてましたが甚だ杜撰なもので行届いてゐませんでした。

大西 大體濟んだやうですから、これから次の時代の會で問題になつた『心中萬年草』の批評にうつりませう。

第三 心中萬年草 二幕

山上 私は木谷先生に敬意を拂つて教へていたゞきます。原作の最初に女嫌やる高野の山に、何故

北氏がやられたので私としてはお答へできませんが。

山上 全體に近松の名文句が大部分沫殺されてゐました生かされてゐるのは、糸之助とお梅が二階へ昇るところで、父親が下女に魚をとられるのを猫に懸節して二階へ上るのを猫に懸節して云々とこういつた俗っぽい甚だ穿つて妙なといふ文句が殆んどありませんでした。官僚の壓迫でせうがこうしたものを生かして欲しいと思ひます。

隠岐 心中の幕切れで、お梅を殺してから久米之助の態度が餘り落付いてゐると思ひます。

木谷 私は久米之助の極めて綿々の

に女松が生えるぞや……とあるあの名文句がなかつたやうですが、これだけ使つていたゞきたいと思ひます。尚この狂言では衆道關係が甚だ判然してゐないやうです、それに序幕の幕切れになつて急に床を入れていました、あれなら始めから名文句を使つた方がいゝと思ひます。

木谷 私は演出はやりましたが、脚色は食滿南

情を表したいと思ひましてあゝしなのです、近松の情味はあすこにあるのです、お梅の顔に見惚れて綺麗な……といふあたりも、斷ち難い情愛の籠つた濃やかさを語つてゐます。近松の心中は何の心中でも、死に際がアツサリいかないのです、未練らしい執着があるのです。こんども幕切れをあゝしたのは、一つは舞臺効果の上から見ても死んだ女に對して情愛を見せたいと思ひまして、私が薦めたのです。

高安 死を決した後では、案外落付と度胸ができるものです、私はあれでいゝと思ひます。

大西 それくらいで、役々について市郎の雜賀の花之丞を御批評下さい。

山田 私は非常に氣持ちがいゝと思ふ、近來にない熱心さでありました。舞臺も高野山の印象が非常にいゝ、久米之助も可憐で大變よかつたと思ひました。たゞ法印がもつと慎敬と同情があれば、いじらしきが出ると思ひました。

隠岐 市郎君は、まじめさがあつて大變よかつたですね。

大西 岸和田九兵衛を福萬壽君がやつてゐます。

高安 傑作でした。中でも一番面白

かつたです。

木谷 福萬壽君の九兵衛は大變巧いと思ひました。無技巧の技巧とも云ひませうか、自然に朴訥な所が出て少しも故爲とらしきがなかつた。市郎君の花之丞の役も傑作です。

大西 姉のおきつについて……

山上 あの科は女人堂内の出來事と思ひましたが？

木谷 いゝや、そつちやありません

高安 暗いので一層言葉がはつきりしないやうですね。

木谷 總體に臺詞が透りませんでした。總稽古の日は廓治郎も讚めてゐました程調子がよかつたのですが、先刻高安さんの云はれた聲の練習をして欲しいと思ひます。

大西 次は卯之助の母親おこことを。

隠岐 久米之助が這つて來た時、ためつすがめつしてゐましたが、あれは何ういふ心持ちですか？

卯之助 髪が亂れてゐましたのと、相が變つてゐるので……

隠岐 二人が二階へ上つてからも、母親がくるやうに思ひましたが、もう少し絡らんで芝居をしてやらな

いと、淨瑠璃が餘つてゐました。

木谷 大體人形芝居に書御しをした脚本ですから、劇に脚色すると何

うしても科や間があひません。人形ならほんとは亭主も始めから出てゐるのです。心持ちを淨瑠璃に語るので説明が二重説明されます得なやうで損です。

高安 卯之助君は老人なので情愛が出ないのだと思つたら、案外若いので驚いた！

大西 伊吹十右衛門を、この役は八百藏君です。

京極 これは土屋先生のお話ですが高野山で刀を抜くといふことは何うかと思ひます。

木谷 原作では峰打ちすることになつてゐます。

高安 峰打ちには三度も四度も打たなくとも。

我童 一つ二つでも濟んだのですが……木谷さんから何つた所では原作でも大變酷い目に逢ふそうです。その感じが出てゐませんので……特に私が……責任は私にあるのです。

大西 雁之助の作右衛門を。

隠岐 幕切れの暗になつてからがまだるこい、淨瑠璃が餘つてゐた雁之助 顔が二枚目らしい、といふことも何ひましたが、木谷さんと食満さんにお伺ひして、京都邊の紙問屋の粹であるから相當の容貌と品位を見せるのも必要だと思ひ

ました。そしてあの役は決して敵役でないと思ひます。脚本で作右衛門の意見も尤もだと思ひ、あの酒を飲む件も敵役でないといふのをかかすためなのです。

坪内 傑作だと思ふ。只幕切れで少しも餘してゐたが……

高安 技巧すぎる。巧く解釋しすぎた。

大西 それでは延太郎のお梅を。高安 二階へ上つてから、男が死ぬとする所を止めて、二人が抱擁する件は、お梅の指先に力が籠つて、あのクライマックスに達した時の情愛が大變によく出てゐた。

處で男が山から連れられて來た時喜び方が足りなかつた、もつと悲しい迫つた情が欲しい。

坪内 傷を擦るのに二人共立つてゐたが、あれは座つてゐた方がよかつた。

我童 お梅は背が高いので座り勝になつてゐます。

高安 あの方が可憐でしょう。大西 片岡ひとしの久米之助を。

隠岐 も一人の小性に對して手紙を讀んだかと訊ねて、讀んだと聞いた時の愛情が足りなかつたやうです。私は切れてもお梅の氣持は大變よかつた、あとは難さのやうに美しい。

池田 お梅の飛脚を待つ心理が分らないのですか？

木谷 九兵衛に頼んで久米之助を呼ぶにやつたからです。久米之助が來たら一刻も早く逐電するつもりなのです。

池田 一刻も早くといふ氣持がないやうでした。それから最後の場で死ぬ時のあの聲ですが、深酷といふ氣持と何うかと思ふ。

木谷 聲が大き過ぎたのですか？、私は深酷にはしたくないのです繪のやうにしたかつたのです。

澤田 高野山の茶室の舞臺面に煎茶の道具がありました。煎茶よりも抹茶です。

隠岐 赤い布圍が使れないのが残念でした。

高安 先刻も云つたやうに二人が二階での抱擁なども、些しもないやらしい感じがなく、實に美しいと思つた。ひとし君の久米之助は、如何にも陰氣で女らしい華奢な容姿が、却つて適つてゐた。たゞも少しせつば詰つた中に一抹の潤ひが欲しいと思ひます。その外は聲を工夫することゝ、寫眞等に據つて形を研究して貰ひたいと思ひます。

大西 では大分時間も経ちました、このくらいで終りに致します、有難うございました。

かみしめて
芝居も見たり

昆布の味



松竹各座御用

安田常次郎

電話戎二〇八番



中座九月興行上演

出世の船唄

行友太千凡作



場割

- 序幕(一) 和歌の浦玉津島明神社頭
- 同 (二) 出島の濱、九郎藏の住居
- 二幕目(一) 遠州灘沖合福神丸の船矢倉
- 同 (二) 伊豆下田柿崎辨天の濱
- 同 (三) 同 千貫岩

人物

- 一、茶店の亭主與助
- 一、同娘 お三
- 一、漁師 甲
- 一、同 乙
- 一、同 丙
- 一、同 丁

一、神職瀧本左仲

- 一、橋本屋番頭惣兵衛
- 一、五十嵐文左衛門
- 一、早汐の仙八
- 一、海月の萬藏
- 一、岬の多四郎
- 一、鰯の市松
- 一、龍巻の九郎藏
- 一、神職藤波宮内
- 一、娘お田鶴
- 一、九郎藏妹お糸
- 一、間屋若い者伊八
- 一、百姓 鎌作

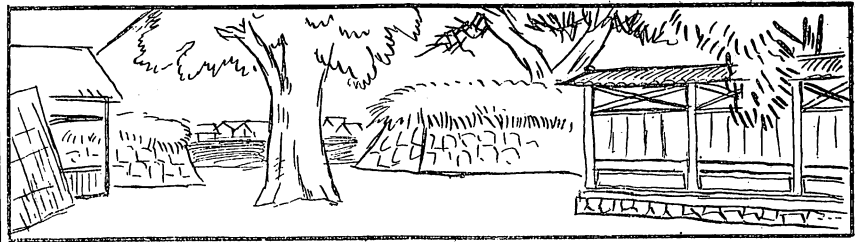
一、婢の老人

- 一、濱方の番頭新七
- 一、駕屋(二人)

序幕

和歌の浦玉津島明神社頭

(慶安の末年、十月下旬の某日、
 晝、八ツ刻より暮近き頃まで)
 平舞臺、正面中央に家根附丹塗の神社の中間、扉は開いた儘にて、二段の石段になりその左右、家根附、上に組窓のある丹塗柱の塀上下へ通じ、門内に社殿の書割、門の直ぐ下手塀の際に公孫樹の大木、葉は黄ばみ根方上り門の石段へかけ一面黄色の落葉



が散て居る。

門の上手に家根附の下乗札、前が駒寄の柵になつて居り、ズツと下手の端に葎簀張の茶店

雨の音一頻り烈しく聞え、それが次第に薄く降り歇むと神樂の音聞えて。

幕閉く。

ト、茶店の亭主與助が公孫樹の下蔭に床几を直し、同娘お三(十三歳)が毛氈と箕盆を持って

掛り居り、神樂の音。

お三 阿父さん、今度はホンマに舞るのであらうか。

與助 ホンマにも嘘にも此上降られて堪る物か、サア

其所が片附いたら後の道具を運ばにやならぬ、早く歸つて取て来い。

お三 アイ〜。

ト、お三毛氈を敷き、箕盆を置き、直ぐに下手へ入る。

與助 眞にこの十日餘りと云ふ物は、宛で狂人のやう

な日和癖、世並が悪いとお天氣までが呆けくさる。

ト、内から「御休み處あしべ屋」と記した行燈を持って出で来り空を仰いで獨言、公孫樹が

散る。

與助 兎も角、茶でも沸さうかい。

ト、手桶を提げ水を汲に下手へ入る。

神樂の音。

下手より村の漁師甲、乙、丙、丁思ひくの漁具を持って出で来り。

甲 どうぢや、雨は歇んでもこの飢乏な空の工合。

乙 相も變らず悪い雲が西へ〜と走る鹽梅では、今日も沖へは出られさうもないぞ。

丙 和歌山のお城下や濱方の船持の衆が、何でも波風穩かに靜まるやうと、あの通り明神様へ毎日々々御祈禱のお神樂を上げてござるが。

丁 十日此方へ東風とヨウヅが吹き續け、港は元より浦方の漁船一艘、沖へ乗出せぬと云ふ珍らしい大時化。

甲 怒うなると明神様の御利益も危い物ぢやが、怪我のないやうお神籤でも引いた上の事にしやう。

乙 何にしても漁師、密仲仕、船乗稼業は飯の喰上げ悪い寒コロを振當てたわい。

丙 ぢやアお詣りをして縁起直しに。

丁 この(自分を指し)船玉様へお神徳でも進せんやうかい。

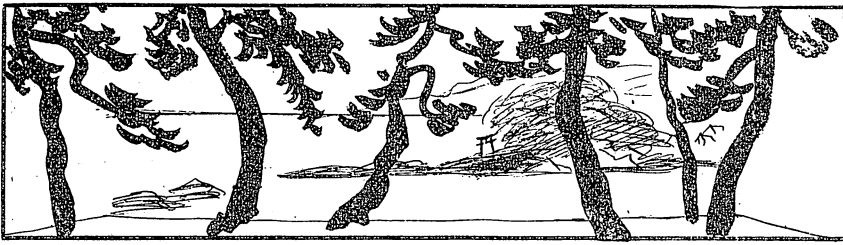
甲 文句をつけて又酒か。

乙 よう飲たがる奴ぢやなア。

丙 サ、早う往け早う往け。

ト、神樂、四人門内へ入る。

下手より以前の與助が水を汲で出で来る。



續いて神職瀧本左仲（二十六歳、白の着附に袴、足駄、雨傘を持ち少し酔て居る）が呼掛ながら出て來り。

左仲 コレ〜與助、コレサ與の字、鳥渡、鳥渡用がある。

與助（煩ささうに）どんな御用か知りませぬが、店の方が忙しいのでな。

左仲 コレサ〜、如何に商賣が茶店ぢやとて、それは餘り水臭い、鳥渡、此方に尋ねたい事が。

與助 水臭いのは當然、茶店商賣に肝腎の茶が沸いてなうては客人を呼ぶ事が出来ませんのぢや、お前さんの御用事よりも爺の下が大急ぎ、御免なされや。

ト、店の奥へ入る。

左仲 彼いふ奴……成たけ不愛想に出來て居るのぢやな、仕方がない暫く日和侍と出かけやうかい、ドレ〜。

ト、床几にかけ蓑を吞む上手より橋本屋の番頭惣兵衛（五十歳、羽織着流し、傘を持ち、足駄穿き）が出て來り。

惣兵衛 オ、瀧本様、此方にお在なりましたか。

左仲 ヨー之は〜橋本屋の御番頭か、マ、之へお掛け。

惣兵衛 丁度宜い所でお目に掛けました、御免下さりませ。

左仲 何と、よう降たなア。

惣兵衛 宛で梅雨が逆戻りでもしたやうでお話にも何にも成りませんわい、只今お屋敷で伺ひましたら、

何處かお出掛けになつたとの事でござりましたが。左仲 餘り小鬱陶しいのでな、内職の油賣り、へ〜ム、鳥居前の角の煮賣屋、洒落たものを喰し居るで？

惣兵衛 それは何よりのお楽しみでござりますなア。

左仲 ドヤ、赤なつてるか（顔を突出す）

惣兵衛 イエ左程でもござりませぬが、少々臭いが致します。

左仲 エ臭い、そゝれは不可ん、フー、フー、これ與助、水、お冷水〜。

與助（姿は見せず聲だけ聞える）欲しかつたら勝手に

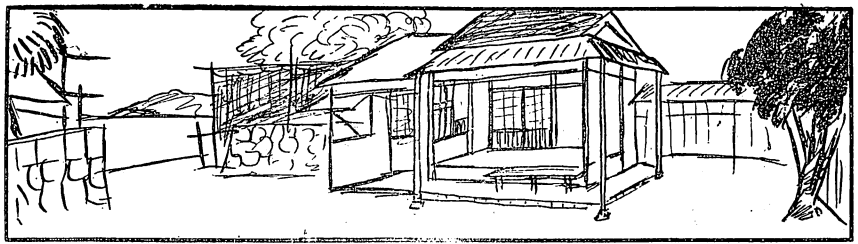
お喫り、茲は茶店や、水までは賣らんのぢや。

左仲 チツ、ナ何でそないに一つ〜目の敵にして棒を張るのぢやア、モウ宜い、何にも要らんぞ汝、フーフー。

惣兵衛 時に瀧本様、今日はソレ、例の一件でお邪魔に上りました所。

左仲 オ、お屋敷の御息女、お田鶴様の御縁談どうぢや、大分咄が進んだであらう。

惣兵衛 貴郎様にもいろ〜とお骨を折て戴きました



が外ならぬ當玉津島明神の御神職、藤波様のお嬢様と申せば城下へまで開えました御容貌美し。

左 伸 その通り、當明神の御神體は衣通姫、その御利益に肖かれた當時評判の和歌の浦小町、その上に御柳巧、縦横八方何處に一點の申分もないお方、町人でこそあれ當時和歌山第一の大分限、お城方お金御用を勤める此方の主人橋本屋の惣領息子平次郎殿とは、それこそ似合ふた舞一對の御夫婦といふ者。

惣兵衛 主人は素より御當人の若旦那も是非にと強ての所望で、いづれお媒介は別に立ます分として、御當家様の御都合をとソツと伺ひに出ましたやうな次第。

左 伸 御都合も何もありやせんて、首尾は大極上々吉と我の白眼んだ目に狂ひはない、二ツ返辭の御承諾になつたであらふ。

惣兵衛 エ、——所で一ツ。

左 伸 何が一ツぢや？

惣兵衛 薄々ながら専ら世間の噂では、あのお嬢様には許嫁のお姫様がお有なされるとやら聞きました。

左 伸 許婚？滅相な、氣もないこと。

惣兵衛 併しお屋敷には、昔の豪士で、船持ちとやらの、五十嵐の御子息がお在なされると申すこと。

左 伸 何ちや五十嵐、ア、彼の野良文か。

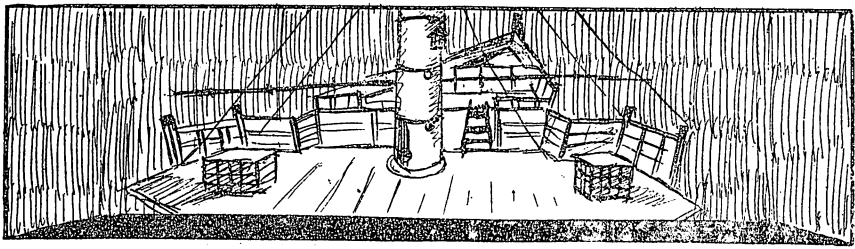
惣兵衛 ヘエ、野良文と云ひますると。

左 伸 宜い若い者が毎日々々野良々々と、定まつた稼業もなく、年中明けても暮れても懐中手をしてゴロつき廻る殺つぶし、殺盗人、双親が死んで親類前からの當お屋敷へ引取られてからモウ四年になるそれに何一ツ仕出來さうでなく、近頃では碌でもない手弄みを覺えくまつて、丁よ半よに先祖代々の家藏地面田地田畑皆な無くした素寒貧の空ツ穴、眞實の名前は文左衛門ぢやが誰も正當に呼んでくれる者が

がない、野良の文公、馬鹿力があつて喧嘩好きゆゑ喧嘩の文公、法螺を吹くに依て法螺吹き文左、小理屈を並べるに依て理屈の文左……彼奴が息女の許婚などとはハ、ハ、ハ、片趾どころか兩趾痛うてそれこそ臍が茶を沸さう、茶ツ茶滅茶苦茶言語同斷イヤ沙汰の限りアハ、ハ、ハ、嘘ぢや、出鱈目ぢや、安心をさ

つしやい彼奴は冷徹喉の居候それも當り前の居り候でなく情に置いて頂き候、その證據には肝腎の話満更惡の風模様、デハあるまいがな？

惣兵衛 エ、相憎と藤波様は御神前で御祈禱中との事と奥様にお目通りを致しましたが、どうやら御本人のお嬢様が第一に乘氣になつてお在遊ばすと承はり



マツ此上ない吉兆と悦んで居りまする。

左仲 ソコが御御巧、偉いな、目先がお見えなさる、ナニ肝腎の御息女に思召があればモウ九分九厘出来たも同様、おやが番頭どの、定めし結納金は、へ、ドツシリと張込むであらうな。

惣兵衛 へ、ムム、その邊は何ともはや。

左仲 隠すには及ばんて、な、その節は我々お互いも美味う一杯飲まんならんて。

惣兵衛 イヤその酒よりは咽喉が干いて、茶店の御亭主お茶を一つ下さらぬか。

與助の聲 ハイ、只今。

ト、與助盆に茶碗を一つ載せて出で来り。

與助 へい番頭さん。

惣兵衛 ハイ。

ト、飲む。

左仲 コレ與助、我には呉れんのか。

與助 あんた先刻に、何にも要らんと仰被つたでは。

左仲 エ、ッ欲かない！此奴何處までむかつく奴ぢやらう。

ト、惣兵衛小錢を盆に乗せ。

惣兵衛 エ、と、幸ひ雨も晴れましたし、私はマダ外に少々寄道がござりますゆゑ、之で御免を蒙りまする。

左仲 オ、急ぎと見えるな。

惣兵衛 御亭主や、お邪魔をしましたな。

與助 どうぞ御態乎なされませ。

惣兵衛 お茶代は之に置きますぞへ。

與助 有難うございます。

惣兵衛 左様なら。

ト、惣兵衛急ぎ足に下手へ入る。

與助盆を片附け。

與助 それにしても、お三は何うしたのか。

左仲 與助、なアこれ與助。

與助 彼程早うと云ふてあるのに何を愚圖々々さらしてゐるのか。

左仲 エ、コレ與助！

與助 何ぢやいな、煩いなア。

左仲 コレ、我が先刻にからお前に用があると云ふのは、な、外でもない。

與助 お嬢様の御縁談ぢやる！

左仲 何を吐すね、ソレ、此頃毎日當明神へ日參をしてお百度を踏む、あの出島の九郎藏が妹な。

與助 何ぢやいな、九郎藏と云へば、ア、命不知の龍巻の事かい。

左仲 エ、兄の事ぢやアない妹のお糸、エ、情のあ



る娘やないか、憎うない代物、今日もお詣りに来居つたかソレともマダか、茲を通るに極つた道順、鳥渡その用、用があるのだな。

與助 ドレ、お三を見に往て来う。

左仲 コレ、何とか返辭をせんかい返辭、お前店番をして居たのぢやろ。

與助 折角ぢやがな。

左仲 何？

與助 私は店番して居たけどな、娘の番はせなんだわい！。

ト、與助急ぎ足に下手へ入る。

左仲 よう吐したな汝、ソその云草を忘れるなよ、ア、疝の立つ、何處まで人を焦しくさるのぢや、ア、拂つく奴、それにしても彼のお糸、モウ彼は詣つて來さうな時分ぢやが。

ト、向ふ揚幕にて。

大勢 エ、待たんかい！

ト、詠えの鳴物、向ふより五十嵐文左衛門、(二十四歳)着流し一本刀腕組をして考へながら出で来る。

續いて出島の船乗、早汐の仙八、海月の萬藏岬の多四郎、鰐の市松(いづれも好みの姿)が呼掛けながら出で來り。

仙八 ヤイ、ヤイ文左、汝や何時の間に奴隷になりさした。

萬藏 俺等四人が口々に聲を啜して呼んで居るのが、汝の耳へは入らんのか。

多四郎 聞えたら返辭をさらさんかい返辭を。

市松 それとも、啞になりくさつたのか。

四人 待て！

ト、文左衛門花道に立停り。

文左衛門 ガヤ／＼と喧しい。

四人 何？

文左 波の迂鳴か風の音か、騒々しい天氣ぢやと思ふだに汝等の聲であつたのか、そうして余に用でもあるのか。

仙八 ナ何ぬかしやがね、用もないのに汝がやうな貧乏神に付き纏ふ程の物數奇ぢやアないわい。

萬藏 用があればアこそ四人連で、茲まで、茲まで足を踏出して來たのぢや。

多四郎 待てといふたらヤイ、待たんかい。

ト、一同本舞臺へ掛る。

左仲 ヨウ、野良文お歸りぢやな。

文左 何？

左仲 イ、イヤあの野良は随分お歸りなさに路が悪

いでお困りぢやらうとな。

文左 エ、餘計な世話ぢや放として呉れ、汝等の知つた事ぢやアないわい、頼まれもせぬ仙人の頭痛を筋氣に病むほどの暇があれやア、無駄口を利かずと茶でも汲んで來い和歌祭りの田樂見たいな面アさらしヤアがつて。

左仲 田樂とは恐れ入つたな、ヨ宜しいタ只今直ぐに差上げます。

ト、左仲愕き眩きながら茶見世の中へ入る。

市松 ヤイ文左、今更になつて長い短いの文句にヤア及ばん、サア金子を返せ、約束の百兩、右から左へ受取らうかい。

文左 阿呆奴が、用事々々と仰山さうに牛の子のやうにゾロ／＼と繋がりくさつて、大の男が鼻面並べ、タツタ百兩の金の催促か仙八 タツタ、／＼とは、何ぢやア宜う吐したな、コレ、盆の上の貸借は判證文を巻いたよりも、モツと手堅い首との釣替。

萬藏 彼の時汝やア一文なしの空手を振て飛込んで來て、乗るか反るかの一か商ひ、受

けたら濡手で百兩の金を粟掴みにさらさう魂膽。

多四郎 それが外れて足を出し、情深い兄哥から三日の日限で借りた金子さ、受取らう

市松 出せい。

萬藏 器用に出せい。

仙八 耳を浚へて出して見いやい！

ト、左仲が茶を汲で出で來り、文左衛門に渡し。

左仲 フーム、ぢやア何か文左殿は彼のお前方の兄貴分、九郎藏どんから百兩といふ大金を。

文左 借たが、どうかしたと云ふのか？

左仲 フツ、今日此頃のお天氣同様、どうやら大分怪しい物。

文左 エ、ツ汝等の知た事ぢやアない、引込んで居さらせ！

ト、茶碗の飲残りの茶をフツ掛ける左仲 わつ、酷い雨ぢや！

ト、茶店の中へ逃込む。

文左 あの九郎藏の手から正に百兩、借りぬとは云はん。

萬藏 ア當り前ぢやい。

文左 借りたは借りたが折角ながら、今に拂へぬ。

多四郎 何ぢや拂へん？

文左 都合の附くまであの儘にして置くと、歸つて九郎藏に返辭をせい、これで用済み

どれ？

ト、立掛る。

仙八、萬藏左右より。

仙八 ヤイ待てい！

萬藏 何處へ去せるのぢや？

文左 些と執拗いなア、幟や虱ぢやアあるまいし喰ひ附くのも宜い加減に、用が済んだら足許の明るい裡に歸らんかい。

多四郎 ヤイ／＼此奴汝や氣でも違ふたか何處を押しヤアそんな野放圖な、虫の良過ぎた文句が吐けるのぢや。

市松 都合に依てあの儘にして置くと、呆れの國から剩の來さうな野蠻語。

仙八 起きて居るのか寝て居るのか、否でも金子を受取らにヤア置かんのぢや。

萬藏 出せい、どうしても汝、拂はん氣ぢやな。

文左 之だけハツキリと碎いて云ひ聞かせても合點の往かぬ猿唐人奴、拂はぬと云ふのは無いと云ふ事、解つたか、譬へにもいふない袖は振れぬぢや、百兩はさて置き、一支持合せて居ぬ、今の文左衛門、待つも待たぬもあつた物ぢやアない、モウ／＼何にも聞きたうない、成らん咄は止めたが剛巧ぢや歸れ／＼。

多四郎 ドツコイ所が歸らんのぢや。

仙八 そんな甘手の甘酒を、ウマ／＼一杯噴はされて引退るやうな腰拔ぢやアないわい市松 恚う云ひ出したら男の意地づく十日が二十日掛つても、金の顔見にヤア去なんのぢや。

文左 十日が二十日で出来なんだから、イヤ俺も意地から拂はんと云ひ突張つた曉には。仙八 御定法の通り、汝の生首を貰ふ分ぢや文左 偉さうな言を吐すない、イヤその生首も渡さぬと頭を振つたら何とする。萬藏 身ぐるみ脱がして素ツ裸で、田野の濱から沈みかけ、鯨や鯨の餌食にするのぢや。

文左 面白い、汝等の腕でこの文左が、美ン事沈みに掛けられるか、イヤ、この身ぐるみを脱がせて見るか！

多四郎 オツその時や恚うして。

仙八 覺悟さらせ！

ト、武者振つく。

文左 身知らず世知らず命知らず、コレ、文左は人間、生きて居るのぢや、舵や櫓柄を操るやうに、徐として汝等の思ふ儘には成りにくいぞ。

市松 酒羅臭い事を吐すない。

萬藏 汝、恚うして。

ト、四人掛る。

文左 それで四人の力一杯か、エ、ツ、濠の祭り船ぢやアあるまいし、鰭立四挺の早廻り、加太の鼻まで飛で来せい。

ト、一度に振解く。

四人 ソレ。

文左 何さらすのぢや。

ト、文左衛門無手にて四人をあしらふ。

茶店の内より左仲が窺ひ出で。

左仲 ウワーツ、文左が喧嘩初めをつた、文左が喧嘩を、喧嘩が文左を、偉い事ぢや、どえらい事ぢや！

ト、一散に門内へ入る。文左四人を取つて投げ。

文左 サアどうぢや、腕があるなら裸にせんかい、鯨や鯨に喰はれて見たい。

四人 ウム。

ト、この内上手より船乗の頭、龍巻の九郎藏(二十八歳)一本刀厚司姿にて出で来り。

九郎藏 オ、裸どころぢやない約束の通百兩の金と釣替の汝の素ツ首を受取らにヤア置かんのぢや。

仙八 オ、ツ、お前、兄貴か？

文左 ウーム、汝やア九郎藏、痺を切らして出かけて来たか？

九郎藏 此奴等の歸りが餘り遅いので、大概恚うと見込んだゆへ、神輿をあげて振込んだが、文左、主や飽くまで俺達に、横車を押し突掛らうといふ了見ぢやな。

文左 横であらうが縦であらうが、車を押すだけの路があるから押切るのぢや。

九郎藏 ウム？。

文左 あの前兩の貸借も、男同士が膝詰で、日限りを極めた眞の親切、と云ふではなし謂はゞ御政道の筋に外れた内證の悪戯事、貸た、借たも時の機會の口約束、宜いか、厭しい御法度御判行の裏を潜れば人中で表沙汰にはならぬ義理合、それを大ビラに塗中門端で、道理らしい没義道な催促の云ひ懸り。

萬藏 ナニ、云ひ懸り？。

文左 然うぢやないかい、ワツバ、サツバの腕づくで、身の皮剥ぐの沈みに掛けるのと頬げた叩いて云ひたい三昧の賣り言葉、此方も意味の買言葉に、珍らしうもない喧嘩の花を咲かさうとしたが、根づから吐からの悪氣ぢやない、借りぬとは云はんが、此先とも、ある時拂ひの催促なしと話をきめて今日の處は、器用にアツサリ引上げて貰ひたい。

九郎藏 エ、ツ、置きさらせい、外の奴等は兎も角も、この九郎藏は然う易々と汝等のやうな素人の口車には乗らんぢや、筋に

外れた貸借なら、一番此方も筋に外れた催促をして見せう、昔は卿士の若旦那、大船持の坊であらうとも、今は互ひの遊び仲間吹けば飛ぶやうな寒鴉の分際で、この龍巻が一本氣の催促の味を覺えて見るかよ？。

文左 ハーテ、鯛のブツ切り經の銀造り、お國名物は喰ひ飽きたが汐と風とに吹き晒され船頭の腕は今が初賞瓶しやう。

九郎藏 その初物は七十五日、壽命が延びるか縮まるか、薬か、毒か、汝！

文左 イデ来い！。

ト、九郎藏組みつく、文左も無手にて柔術の争ひ、四人は身構へ、スハと云はゞ飛掛らん氣配、双方必死に争ひ、文左九郎藏を突放す。

九郎藏 跟めき立直りさま。

ト、一刀を抜く。

文左 エ、ツ猪小才な。

ト、文左も抜いて構へる。門内より宮内 双方待て！。

宮内 ウム？。

宮内 控へいと申すに。

ト、門内より神職藤波宮内（五十五歳）娘お田鶴（十八歳）屋敷娘の扮装同じく上手より九郎藏の妹お糸（十九歳）好みの扮装にて出で来る。

文左 オツ、これは伯父様！。

九郎藏 ヤ、藤波の旦那！。

宮内 さて、法外、イヤ沙汰の限り、場所柄の辨へもなく大神の廣前に、刃物を弄び血を以て汚さんなぞと、不埒不届、マツ双方とも獲物を納めい、コレ文左、九郎藏、汝等兩人捕ふて性根が紛失たか魂を置き忘れたか、あの大白痴、仕義に依つては藤波宮内、神に仕へる役目の表、只この儘では濟まきぬぞよ。

兩人 ハツ！。

ト、双方刀を引く。

お田鶴 文左様。

お糸 兄さんお前は。

ト、お田鶴は文左を、お糸は九郎藏を前から支へる。

文左 オ、お田鶴殿か。

九郎藏 汝や妹。

お田鶴 眞にお情けない貴郎はまア。

お糸 又しても手暴い喧嘩騒ぎ。

お田鶴 父上のお言葉。

お糸 旦那様のお叱り。

お田鶴 さお腰のものを。

お糸 怪我のない内サア早う。

九郎藏 テモ汝、このまゝ？。

宮内 なせ納めぬのぢや？。

お田鶴 モシお願ひでござります。

お糸 エ、モ、強情なお前から先へ。

九郎藏 エ、解つて居るわい、ヤイ文左、思はぬ邪魔が入つた故、今日出入りは勝負なしぢやが、この返禮は屹つとするぞよ、覺へて居れ。

文左 忘れて成らうか念には及ばぬ、明日とも云はず今夜の裡にも俺が方から、挨拶旁々勝負かたゝ。

九郎藏 ヨオ吐した、此刀を叩いて待つて居る。

ト、双方鞘に納める。

宮内 文左には改めて云ひ聞かせたい事もあり、ヤイ九郎藏、九郎藏。

お糸 それく兄さん、旦那様が。

九郎藏 ワ、解つて居るわい、へ、へ——。

宮内 前へ出い。

九郎藏 へい。

宮内 親代々の船乗渡世を餘所にして、宜からぬ遊びに身を持ち崩す大馬鹿者、死んだ親父の九郎兵衛に成り代り、屹つと云分ある奴なれど、今日は云ふまい、許し遣はすサツサと歸れ。

九郎藏 へい。

お糸 コレ兄さん、今の旦那様の有難いお言葉をお前、仇疎そかに聞き流してはそれこそ罰が中らうぞへ、タツタ一言の御意見にも深いお慈悲とお情けの籠つて居る事を考へたら今日後身持を改めて。

九郎藏 エ、汝までが同じじやうに。

宮内 何、何と云ふのぢや。

九郎藏 へい、妹奴の申します通り、涙の滴れる御親切有難う存じます、ぢやアお暇にするとして、お糸、汝やマタ茲へは何しに來せた？。

お糸 (ハツとして) エ、妾。

九郎藏 別に用事はない筈ぢやが。

お糸 イエ、あの明神様へ願掛けして、ツイお百度を踏み來たのぢや(文左へ思入れ)

九郎藏 兄に隠して碌でもない、そのお百度の願掛けの、望みは大概そこら邊り、ヤ、何でも宜い一緒に歸れ。

お糸 でもあの妾は、オ、次手といふては勿體ないが、權現様へツイ一走り、お前は勝手に歸なしやんせ、旦那様、お嬢様、誰方様も、御免なさりませ。

ト、お糸、文左に心を残し、急ぎ足に下手へ入る。

九郎藏 エ、ツ、肚の立つ、現在の妹までが俺といふ者を馬鹿にさらして、文左、約束は間違へまいな、サア、皆も來い。

仙八 仕方ないわい、暗剣殺へ向ふたと諦めて。

萬藏 一番舵を向け直さうかい。

九郎藏 旦那、お嬢様御免を蒙ります。

多四郎 ぢやが兄貴、痛いわい。

市松 腰の番が喰違やがつて、イタ／＼く九郎藏 確かりせんかい、阿呆ンだら奴!

ト、九郎藏先に四人向ふへ入る。

文左 ア、——伯父様のお蔭で疫病神も追拂ふたしと、どれ、この間に鳥渡!

ト、立掛る(下手へお糸の跡を追ふ心にて)

宮内 イヤ文左衛門、マツ下に居い。

文左 マダ何ぞ、御用、でござりますか。

宮内 幸ひ四邊に人もなし、内談するにはマダない折柄、些つと立入つて此方の身上に就き、咄したい事聞きたい事、娘、其方は暫らく門内で、見張りの役を勤めておくりやれ。

お田鶴 アイ、畏りました。

ト、お田鶴門の内へ入る。

宮内 文左、これへ。

文左 伯父様もお掛けなされませ。

ト、改めて兩人床几へ腰かける。

宮内 サテ餘の儀でもない、宜からぬ遊びに精根つめ、道楽に身を持ち崩した故か、此方近頃マダ一段と衰れさつしやつたのう。

文左 何と仰しやります。

宮内 事新らしいふ迄もなく、此方の家は其昔、平家方の侍大將小文治殿より血統

の續いた五十嵐の系圖を傳へて二十何代、この和歌山の城下外れに舊家で知られた郷士格、別けて先代、此方の父御、余が爲めには姉婿に當る文之丞殿は、武藝の外に算勘の心得あり、船持となつて身代を築き上げた器量人、その御夫婦が有且の病ひに世を去られてから丁度四年になる。

文左 被仰る通り双親に死別れ、外に兄弟親戚もない一本立のこの文左衛門、幼少より病身ゆゑ、伯父様のお手に引取られ、厚いお世話に與りましたが、光陰は宛るで夢のやうに經ちました。

宮内 身體の病氣は快つたが、心に病の根が張つては、行爲ばかりか性根まで生れ變つた身持放埒、惡所へ足を踏み入れては下司の輩に交つて、争ひ口論手なぐさみ、喧嘩文左の理屈文左のと、甲斐ない紳名を謳はれて、親譲りの家庫田畑まで大概人手に渡つたと。

文左 エツ?

宮内 薄々知ても知らぬ顔して、意見がまし此言の一ツも云はなんだは、餘人は兎も

あれこの宮内、は其方の本心、男の魂に狂ひがないと見込んだ故、彼した眞似も當座の醜興、今に目が醒め五十嵐の家の税を上げるであらうと待てど、暮らせど空頼みに、ヤレ手後れた怒んな事なら、ナゼ強意見して曲つた性根を挽めなんだかと、今での後悔、イ、ヤ愚痴ではない、文左、どうぞ此方の眞の意を、包み隠さず打開けて余に聞かせては下さるまいか。

文左 伯父様、どんなお話かと存じましたらこの文左の身持に就ての御心配、何とも以つて相濟みません、御心切の段は身に泌々有難い事に存じます、眞の嘘のと魂に掛替のあらう筈はなし、お言葉の通り悪い友達から悪い遊びの味、酒と女と博奕と喧嘩と道楽の總凌らへに、何の今更堅苦しい思案や分別がござりませう、此の上男を賣り出す近道は金の威光より外はないと、家重代の財産を費ひ果したそのお蔭でどうやら兄哥イヤ親分、旦那、先生と二ツ名三ツ名この界隈で誰知らぬ者もないやうに成て見れやア何の今更、徹座も惜しいとは思ひ

ませぬ、伯父様、お蔭で文左は立派に男を
産きましたのぢや。

宮内 コレ、コレ、此方それは本心か、イヤ
正氣の沙汰でお云ひやるのか。

文左 人間は裸で生れて裸で死ぬる、男の價
値は裸一貫、鑓錢の片端も有たぬ身になつ
ては、財産に惹かれる未練もなし、サツパ
リとした宜い心持ちで、これからが文左衛
門眞實の力の働き、所が實は餘まりサツパ
リし過ぎてしまつて、裸で背負た借金の山
今の九郎藏の百兩の外に、イザコザ併せて
五百兩。

宮内 ナニ、五百兩の借金とな。

文左 それさへ首尾よう片附けたら、文左の
心は日本晴れ、何と伯父様、お情次手に私
奴を、影日向のない親男にお仕立てなされ
ては下さりませぬか。

ト、宮内デツと考へる。

宮内 親子を窺ふ。
この内お田鶴門内より顔を出して様
親譲りの身代を一文残らず費ひ果して
未練も残さず後悔もせず、生れた儘の裸に

なり、己れの力で働いて見る……ウム、そ
れで此方は神職風情の余に五百兩といふ金
子の工面を、してくれいと頼ましやるのぢ
やな。

文左 それも強つてとは云ひませぬ、只伯父
様のお心次第。

宮内 解つた、此上諒う聞いて見た所で此方
の返辭も大抵は解つてあるが、何を云ふに
も余は長袖、社領も乏しい、今の手許で五
百と纏る大金の事。

文左 それぢや都合がつかぬに依り、出来ぬ
とお断りなされませぬか。

宮内 モシ断つたら此方、何んとさつしやる
文左 親身の間に水臭い、金銭づくの相談に
他人らしい垣をさつしやるの見なら、頼母
しうない、スツバリと垢の他人に成りませ
う。

宮内 エツ、他人になるとは。

文左 モウ今日限り、伯父でなし甥でなし。

宮内 スリや娘との縁談も。

お田鶴 申し父上、それは直々、妾の口から
ト、お田鶴出て来る。

宮内 さては聴いたか、今の文左の心體を。
お田鶴、委細残らず聞きました、モシ文左様
五十嵐殿。

文左 エ、？。

お田鶴 御無心なされた五百兩のお金は、妾
が吃つと引受けて、必らずお間に合はせま
せう。

文左 何、若い女の和女の手で、俺の無心の
大金五百兩を。

宮内 コレ娘、大それた和女、如何に良人の
爲めとは云へ引受、けるにも事を缺き、所
詮及ばぬ大金を。

お田鶴 イ、エ父上、御心配なされますな、
今夜か遅くも明日までには、どの手にして
も文左様のお手に入るやう、堅う約束致し
まする、代りには、妾からも改めて。

文左 ウム。

お田鶴 貴郎様との許嫁の縁談を、常から願
ふて居た望み、改めてキツバリとお断り申
したいのでござります。

宮内 田鶴、さては和女、破談が日頃の願ひ
ぢやとな？。

お田鶴 身に引受けた五百兩は、謂はど退き料、縁切金。

文左 (カツとなり) 望まれるまでもない、此方から切らうといふ縁を、五、五百兩の金に代へやうとは。

お田鶴 ハーテ何であらうと然うせいで、妾の心が濟みませぬ、悪い遊びに性根が腐り、家の身代を獲ひ果して自慢氣に、男を鷹くの賣出すのと、聞くも情けない賤しい根性そんな、良人に添へばとて、末の見込みがあるではなし、ツクン、愛想が盡きました故。

文左 ウム、屋敷育ちの世間見ずな、若い娘の考へとしてはツレも重々無理からぬ云分よう解つた、手切れの金は貰ふに及ばず、離縁結構、破談確かに承知した。

宮内 とは云へ見す、金の出所が。

お田鶴 それも妾に思案のある事、文左様、ようお開届け下さりました、譬へ御辭退なされやうとて、一旦の約束は約束、必らずお間に合はせします。

文左 伯父御でさへも才覺の至難しい大金、

濱の眞砂や石瓦とは、少々譯が違ひますぞよ。

お田鶴 金は世間の廻り物、女の手には入らぬと極まつた例めしもござんすまい。

文左 執方にしても今といふ今、俺の身體は世の中に何一ツ、關はりのない男一疋一本立、生きるも勝手死のうと儘、誰に涙の掛るでもなければ、大手を振つて思ふ存分、暴れもしよう働いても見やう。

お田鶴 妾も今こそ胸の痞へが一度に下がつて夜の明けた心持、父上、お悦び下さりませ。

宮内 悦びの蔭の悲みか、嘆きの底の満足か文左には文左の心持、其方には其方の心持歳老つた余の心は唯寂しい。

ト、薄く風の音。

お田鶴 父上、お歸りなされませ。

宮内 文左、さらば。

お田鶴 お別れでござります。

文左 永い間の御恩は海山、死んでも忘れは致しませぬぞや。

宮内 必ず達者で、無事に望みを達しるやう

文左 エ？
宮内 イヤそれも他人の餘計な世話か、娘來やれ。

ト、宮内、お田鶴の手を引き門内へ入る。

文左 衛門腕組みしてイみ、徐つと空を見上げる。
風の音。
銀杏の葉が雨のやうに散る。

文左 フーム、今日は十月末の五日、汐の満が七ツ二分、俄かに空のたゞずまへ、雲が千斷れて北へ飛び、ヨウツがヤマゼに變つた工合、今夜か遅くも明日邊りからは、待ちに待つたる西アナゼが吹いて、吹き續け、東へ乗り出す汐先の、風は正しく追手に極つた、望みの緒口、占めた。

ト、身仕度、上手より問屋の若い者伊八が出で來り。

伊八 オ、文左殿、よい所で逢ひました、此間から山方へ掛け此方が一手に買占めた密柑。

文左 シツ。
伊八 昨日殘らず出揃ふて、雜賀七軒の蜜柑

問屋の園ひ藏へ、ギツシリ詰つて捌きが取れぬ、何時引取つて下さるのぢや。

文左 エ、ツ、船の荷役は、明日ぢや、明日ぢや。

伊八 イ、エ明日までは待ちませぬ、サア一刻も早う藏を空けて下されいのう、コレ文左殿。

文左 エ、ツ煩さい！

伊八 ナ、何？

文左 力風は追手ぢや。其所どころか。

伊八 併しどうでも埒口を。

文左 邪魔さらすな。

ト、突つばなすを。

木の頭。

伊八、尻もちをつく。

風の音烈しく。

文左

ウム！

ト、文左衛門一散に向ふへ駆け込むこの模様よろしく、伊八頻りに腰を擦る見得この道具

廻る——

序幕の(二)

出島の濱九郎藏の住居

前場と同日の夜、マダ宵の裡、雲

急にして風強き情景

本舞臺正面、上手寄りに藁葺家根並二重の屋體、前座から下手横へ折曲り縁側つき、二重正面、棧戸の押入、張り交ぜ襖の出入上手の横は壁になり、下手横に障子を建て

る。その二重の下手、稍奥へ引込んで瓦屋根の別棟の外部、真中に大きく出入口(腰高の油障子船九と記す)その上手が荒い格子、下手は壁になり、その下手に太き二股の松の樹があり、根方に低き垣根。

垣の向ふ下手一杯に浪早崎を右に見た海原の書割、垣に沿ふて石の常夜燈(灯入)ズツト下手、前側に少し干綱の端が見える。

二重に角火鉢、二枚折の屏風、角行燈を點し壁に厚司など掛つてゐる。上手の座敷に神職瀧本左伸が膳を控へ、一升徳利を傍に、罌の市松と差向へにて、土瓶に徳利を入れ、咄をして居り、百姓鎌作が蜜柑を入れた

叭を傍に置き、縁側へ腰をかけ、叩

の多四郎は垣根の前に膳を敷き、打盤、横槌を控へ、棕櫚繩を綱ふて居り、傍に薪を燻べて篝火が燃え、村の老人(尊)常夜燈の傍に立ち、後向きに沖を眺めて居る。

風の音、浪の音。

遠く小屋芝居の大鼓の音が聞えて、道具納まる。

左伸(耳訖て)何ぢや〜彼や、急に太鼓が

鳴り出したで、ソレ。

市松 何でもない、雨が上つたので淡路の人

形芝居が、小屋で人寄せに叩いて居るのぢや。

多四郎 ヘツ、この大時化の濱方で、人形芝居でもあるまいに、餘ッ程目先の見えん奴

等ぢや。

鎌作(老人を呼かけ)若し、お老人、明日の

天氣はどんな工合ぢやな、モシ、お老人。

多四郎 不可ん〜、彼の老爺は金テコぢや

鎌作 何ぢやい、噂かい。

多四郎 その代りに日和を覗きたら此の濱

の神様も同様、昔は鳴らした大船頭の果て

ぢやげな。

録作 昔鳴つても今聲とは、えらい不自由な
神さんやア。

多四郎 待て、その神様に喋舌らして見
せる。

ト、多四郎立上る。

左仲 どうちやモウ畑いた筈ぢやで。

市松 眞に、丁度頃合ぢや、さ、初めやうか
い。

ト、市松左仲に盃を献じ酌をする。

多四郎 老人の傍へ行き手眞似にて沖
をさし空模様を尋ねる事あり。

老人 ア、危い、風は直つても波が高いでの
ウーム、津船から観音崎は無理に抜けても
宮崎の鼻が乗り切れやせん。

多四郎 風が直つても駄目ぢやと云ふのかい
(耳に口寄せる)

老人 マタ汝、眞東風に變るでな、危い、熊
野の沖は乗れそもないで、ア、マタ悪い
雲が出おつた、恐い天氣ぢや、恐いぞ、

ト、老人獨言を云ひながら常夜燈の
前を家の背後へ入る。

市松 多四郎、尊奴、嫌な事を吐したなア。

多四郎 彼奴の云ふ事に嘘はないけど、悪い

ケントクぢや。

ト、多四郎マタ締ひ初める。

市松 時に、山方の景氣はどうぢや。

録作 何處も悪いのは同じこと、茲歳はお前
蜜柑が豊作で、息が次げるなと悦んで居る
矢先へ、此の天氣、船が出廻らんで買人が
がない、知つての通り山の百姓は果物を賣
つてお年貢を収めるのぢや。

左仲 違ひない、豊作でも買人がなければ、
宛で賣の持ち腐れ同様。

録作 相場はドン、下り坂で、二束三文、
誰でもどうにかしたいといふ、愈よのドン
底にまで下つて見ると如才のない世の中、
今度は思惑の買占めぢや。

市松 蜜柑の買占。

録作 雜賀の間屋七軒が惣掛りになつて手を
伸し、山から山へと片ツ端から買込んで往
つて、籠の數でザツト十三萬。

多四郎 エツ、十三萬籠の蜜柑?

録作 金目に積つて四千兩。

市松 ホーッ?

録作 港の圍ひ藏は蜜柑で一杯、えらい物ぢ

ヤアないか、値は安うても捌けてしまへば
百姓は大助かり、これで何うやらお年貢納
め、寒肥料の仕入も出来るといふ物ぢや。

左仲 フーム、何處の長者の物數奇か知らん
けども、何ほ相場が安いとて、日和癖を見
込んで買占めるとは餘ッ程間抜けた道樂と
いふ物。

録作 物數奇でも道樂でも、紀州半國山方の
村々、大勢の百姓の難儀を助けて下された
謂は、福の神、その御利益の餘り物を少し
ばかり持つて來たのぢや、どうぞ皆の衆喰
べて下され。

ト、吠を格子の下へ置く。

多四郎 マタ貰ふのかい、それやア忝けない
録作 お船頭が歸らしやつたら宜しう云ふて
下されや、モウ、お暇にしますわいの。

市松 宜いぢやないか、悠乎と話して往かつ
しゃれ。

録作 マダ二三軒寄り道をせんならんでな、
明神様の旦那、御免なされませ。

左仲 然うかいの、氣をつけて歸らつしやれ
録作 オ、風もナカ、歌みさうになし

暗い晩ぢや。

ト、太鼓浪の音、風の音。

鎌作拾臺詞にて下手へ入る。

市松 多四郎、モウよい加減に片附けたらど
うぢやい。

多四郎 其所に如才のある俺ぢやない、ドレ

……

ト、片附け始める。

左伸 それにしても、甚い遅いな。

市松 兄貴は濱の旦那衆の宅へ出船の相談に
往つたんぢやで。

左伸 イヤ、そ、九郎藏ではない、あのおお；

多四郎 仙八ならツイ近所へ風呂を貰ひに往

つたのであらう。

左伸 逆う、ア、廻りくどいなア、仙八

や萬藏に用のある余ぢやない、ナ、お娘、

レシ、(小指)ぢやがな。

市松 ア、お糸坊かい、今の先刻友達の宅へ

遊びに出掛けたが、モウ程なく歸つて来る

であらう。

左伸 矢ッ張りその、酒といふ奴は水々とし

た、美しいお酌でないとなす。

市松 これやア近頃御挨拶ぢやない、色の黒い
ので氣に入らな、遠慮なし手酌で飲つとく
れ。

左伸 怒つたら何もならんがな、今のは串戯

そないムキになつて呉れては。

市松 成らいでかい、餘まり氣持の宜え云草

ぢやないわい。

多四郎 市よ、汝の方こそ宜え加減にしとい

て、さ、與で一服やるうかい。

市松 それに兄貴の夜食の用意、汝も一緒に

手傳ふてくれ、旦那。

左伸 ウム？

市松 シツボリ遣らんせ。

左伸 何吐すのぢやい。

ト、市松座へ降りる。

市松 篝火はどうぢや、消やせんか、

多四郎 二三本薪を燻べといてくれ。

ト、市松薪を燃す。

近所で三味線の音。

多四郎 よし、よし。
ト、兩人腰高障子を開けて内へ入る
左伸 何ぞといふと直にあれや、濱方の奴等

は氣が逸ふてどもならん、仕様がな、飲
み出した酒ぢや。

ト、三味線、唄、(詠らへ何にてもよ
し)が聞へる。左伸手酌で飲む。

向ふより五十嵐文左衛門(頰冠り、
一本差し尻端折、跣足にて)、一散に
馳け出で、ソツと様子を窺ひ、花道

を振り返り、背いて其儘常夜燈の前
を家の背後へ隠れる。

唄、三味線が續き、向ふより九郎藏
の妹お糸、ブラ提灯を提げて出で來

り、直ぐに本舞臺へ掛り、提灯を消
し、

お糸 ハイ、今歸りました兄さん、オ、ま
ア宵からみんな何うしたのか、宅を空ける
とは物騒な。

ト、左伸俄かに居住居を直す、可笑
味。

左伸 オホン。(咳拂ひ)

ト、お糸ハツとして立ち降り。
お糸 誰ぢや、誰でござんすえ、其所に居や

しやんすは？
左伸 お娘、辰りやつたか、余ぢや、瀧本左

仲、先刻からモウ鶴首を伸して其方の歸りを待や焦れて居た所、丁度宜い、遠慮は要らぬ、サ、愛へへ。

お糸 まア誰様かと思ひましたら貴郎、瀧本様、今頃にタツタお一人、どうした譯で恁様な所へ。

ト、お糸縁側から座敷へ上る。

左仲 サア、兄御の九郎藏に用があり、一升提げて遣つて來たのも、有様は其方の顔が見たい半分。

お糸 又しても程のよいテンゴウばつかり。

左仲 イヤ、テンゴウぢやない、眞實誓文打解けて、咄のしたい事もあり、マ、何よりも酒ぢや、誰憚らぬ差向ひでお、酌が一ツ願ひたいなア。

お糸 眞に妾とした事が、ツイ辻つかりと氣が注がいで、そんなら不重寶ながら。

ト、お糸酌をする。

三味線、唄聲。

左仲 所で先刻からこの邊りには珍らしい誰やら三味を弾いて居るやないか。

お糸 あれば此頃隣の宅へ大阪の廓の、判人

衆が泊つて居て、抱への妓共に唄三味線の手見せをさせて居るのでござんす。

左仲 成程、それで合點が往た、エ、ツ、小判の鎖に繋がれて苦界へ沈む女もあれば、性根一ツで一足飛びに玉の輿へ乗る女子もあり、世間はさまざま、和女もな顔を見知つて居やう、ソレ藤波の御息女お田鶴様の御縁談が今日の夕方、宛るで足許から鳥の立つやうに俄かに極つて早手廻しに、今夜目出度う結納の祝い。

お糸 エツ、ナ、何と云はしやんす、彼の藤波様のお姫様の御縁談とは、耳寄りな、そして對手の婿様は、何處の、何といふお方でござんすえ？

左仲 サ、その日本一の果報者は、當時お城のお金御用、和歌山の城下で一と呼ばれた萬兩分限、橋本屋の總領息子ぢや。

お糸 何と云はしやんす、橋本屋の若旦那へ藤波のお田鶴様が。

左仲 何とけななるいか、世にも似合ひの雛の女夫ぢや。

お糸 モシ瀧本様、イ、エ、なお前、それは

眞の咄でござんすかえ。

左仲 何を云ふのぢや、誰が其方に嘘を吐かう、ソコで觀面馬鹿な目に遇ひくさつたのが彼の野良文。

お糸 エ、？

左仲 冷飯文左、喧嘩の文左、理屈文左。

お糸 エ、モ置かしやんせ、罪も怨みもない人の憎くて口は開きたらうない。

左仲 その文左奴とは伯父明の縁切りで、今日限りお屋敷をお拂箱、野良奴到頭宿なしに成りくさつた、何と胸の透く程宜い氣味な話ぢやアないか、アハハ、。

お糸 それでもお前、五十嵐の若旦那とお嬢様とは、親御同士がお極めなされた、幼い頃からのお許嫁ぢやと聞きまして。

左仲 阿呆らしい、それも昔の五十嵐文左であつてこそ、飼扶持に離れた野犬も同然、喰ふや喰はずの乞食に劣つた意久地なし、お嬢様から愛想をつかされ追出されたも自業自得、嗚今頃は宮、寺のお堂の隅か縁の下か、根上り松の下蔭にでも野臥つてける事であらう。

ト、この内、家の背後より以前の文左が忍び出で、人聲がするのでソツと窺ひ寄る。

お糸 フーム、満更の嘘や出鱈目の悪口、とばかりも受取れぬ、今のお前の話の様子では、お嬢様から愛想を盡かして、御離縁なされたとな。

左伸 ソコが御捌巧、目先がお見えなされるからちや、文左のやうな底抜馬鹿は、今の内こそ乞食ぢやが、聽て人の物が欲しうなる、盗みに騙り、謀書謀判、贖金使ひも遣り兼ねへんて、オ、怖わ。

お糸 (ムツとして) 申し瀧本様、何ぞの意恨か意地悪か、讒訴するにも餘りな、些つとお口が過ぎませう？

左伸 ナ、何が過ぎる、當り前の事を當り前にいふのが眞實の當り前。

お糸 イ、エ聞き悪くい、如何にお酒の上とは云へ、蔭口を吐くにも程がある、ヤレ盗人の騙りのと、妾の耳まで汚れます。

左伸 コラ可怪い、妙やなア、其方が何も腹を立てる事はない筈ぢや、モシヤそれともあの文左と深い譯でもあると云ふのかい？

お糸 エツ、イ、エ？

左伸 なけれや尙更放つときんかい、騙りどころかト、詰まりは、強盗、放火、人殺しに、不淨の釘の錆になる奴ぢや。

お糸 エ、モウ寧ろ、口惜い。

左伸 蔭口ぢやない、文左の前で云ふて退ける、盗人文左、騙り文左。

ト、文左衛門屹つとなり。

文左 ヤイ左伸、田樂の左伸！

左伸 エ誰ぢや。

文左 悪口タラ、最前から、余の名前を呼び續けるのは、文左に何ぞ用でもあるのか

ト、縁側へ出る。

左伸 ア、汝や文左、眞者ぢや！

お糸 オ、マ宜い所へ若旦那。

文左 お糸、和女は暫く何にも云ふまい、左伸、これへ出い改めて用がある。

左伸 ワ、ワ、汝に今頃、ナ、ナ、何の用ぢや。

文左 何であらうと素直に茲まで来させさらさんかい！

左伸 ト、縁へ片足かける。

文左 出いと云やア出るがな、何もそないに

恐い顔せんかて、出たら宜えのや、今出るぞ。

ト、縁へ這ひ出し、

左伸 用とは一體どんな事ぢや。

文左 どんな事とは凄まじい、ヤイ。

ト、襟髪を掴む。

左伸 イ、痛い！

文左 先刻からの一部始終を、小蔭で聞いて居るとも知らず、汝やこの文左を盗人と

吐したな。

と縁側へ顔を擦りつける。

左伸 ウ、ウ、あれや間違ひぢや。

文左 譬へ嘘にもテングウにも強盗、放火と

まで云はれては、先祖代々武士の血を享け

繼いで五十嵐文左衛門、刀の手前此のまゝ

に生かして置く奴ではなけれども、今は

文左の身體が大事、自分といふ者が可愛さ

に、胸を擦つて辛抱するのぢや、宜いか、

せめて命のある内、トツトと愛を出て来せい！

ト、庭へ引擦り卸す。

左伸 うわツ、これや堪らぬは、ヤイ、文左、汝？

文左 どうした？
左伸 覺へて居おれよ！

ト、下駄を提げて一散に下手へかけ込む。

お糸 モシ若旦那、妾や遇たうござんしたわいなア。

文左 遇ひたいと云へば和女より、九郎藏は何處へ往た？

お糸 エ、兄さんは日の暮前に、濱の旦那衆から迎ひが来て。

文左 ウム、この濱の旦那衆といへば船持仲間？

お糸 いづれ出船の相談事でござんせう。

文左 (焦々した氣持の獨り言) チ、この風模様を見込んでの、出船と云へば兵庫廻しか中国筋、モシヤそれとも江戸積では。

お糸 それよりも若旦那、今の左伸の語では藤波様とお縁組が、どうやら反古になつたとやら。

文左 何の反古であらう、元の白紙、お田鶴殿との約束ばかりぢやない、伯父舅一家の縁まで切つた垢の他人。

お糸 そしてお嬢様は橋本屋へ、急に話が極

まつたとやらで、今夜結納の取交はしぢやと。

文左 それも今では此身に取つて、掛け構ひない餘所の噂、雲掴むやうな大きな望みを夢に見て、故郷を離れ旅の愁へ、踏出す首途にせめての饞別。

お糸 何と云はしやんす。

文左 お糸、その夢よりも果敢なかつた、我身との縁も今夜を限り。

お糸 えゝツツ？

文左 嫌になつたの飽いたのといふ、そんな水臭い氣で別れるのぢやない、云はど一生一度の目論見、男になるかならぬかの境、心曳かれる後ろ髪を一筋残さず器用にサツ

パリ切り拂ひ、生れた儘の文左衛門になり思ふ存分の働がして見たいばかり、今別れたら、其方にも、マタ逢へるやら逢へないやら眞實余を思ふて呉れる心なら、コレ願みぢや、何にも云はず快よう、笑顔を見

せて別れては呉れまいか。

お糸 イ、エそれは嘘、嘘でござんす。

文左 ナニ嘘、余のいふ事を嘘ぢやといふの

か？

お糸 それ程の事に氣のつかぬ妾ではござんせぬ、男手管の口上手に、欺して見棄てるお前の了見。

文左 ナ、何の誓言、ソ、そんな事が。

お糸 イ、ヤ然うぢや、それに違ひはござんせぬ、大きな望みぢやの、旅へ出るのと今夜に限つて、それこそ宛るで夢のやうな話誰が眞實にしませうぞ、その望みとはどんなこと。

文左 エ、それ？

お糸 旅とは何處へ往くのでござんす、サ、それを妾に打明けて、ナゼ得心させては下さりませぬ、云へぬは矢ツ張りこのお糸が嫁になり、愛想が盡たといふ證據、モシ若旦那、文左様、それは餘りお情ない、お情ないと申すもの。(泣く)

文左 サ、その望みといふも今の所、極つたでなし、極まらぬでもなし。

お糸 ソーレ見やしやんせ、ハツキリとは云はれますまい、妾とても千石船の船頭を兄に持つ、氣性の荒い濱育ち、眞實貴郎のお

爲めになら、三年五年は思かなこと、譬へ十年二十年でも、此の儘ヂツと待つて居ます。お許嫁のお嬢様との御縁の切れたお前様、妾や女房になつた氣で、どんな苦勞も厭ひはせぬ物を、別れてしまふの縁を切るのと、イ、嫌ぢや、嫌ぢや、死んでも嫌ぢや不承知でござんす。

文左 ウム、男の口からこれ程に咬み碎いて譯を話しても、聞いてくれねば是非がない

お糸 ないとはお前、どうしやしやんす？

文左 其方は其方、此方は此方、思ひ／＼に違ふた道へ。

お糸 それは御車怯。

文左 車怯ぢやと？

お糸 無得心の妾を無理に振棄て、逃げ出さうとは薄情過ぎます。

文左 車怯者か薄情者か、凡べての謎は遅かれ解ける時節が来るであらう、余は望みへ急ぎの旅、身體を大切に煩はぬやう、随分遠者でくらししてくれ、そうぢや。

身仕度。

お糸 (躍起となり) 待つて下され、エ、待

たしやんせ文左様。

文左 止めるな、今夜の余は忙しい身體ぢや、何であらうと話も極めず、都合點で逃げ出さうとて然うはならぬ。モ一度腰を落着けて。

文左 エ、モ放せ、何時まで愚圖々々。

お糸 イ、ヤ放さぬ、待つて、待つて。

文左 頼む、どうぞこのまゝ別れてくれ。

お糸 嫌ぢや、嫌ぢや、待つて下され。

文左 コレ、どうするのぢや、放せといふに

お糸 イ、ヤ、イ、ヤ、殺されたとて、死んだとて。

ト、お糸縋りつき揉合ふ。正面の腰高障子の内より

九郎藏 妹待てい、喧しいわい。

ト、龍巻の九郎藏が出て来る。

文左 オツ、汝や九郎藏。

お糸 兄さんか。

九郎藏 ヤイお糸、その容ア何んぢやい、男の口から愛想盡かされ、見棄てられたを、憎くいとも口惜しいとも思はいで、唯面かいて附きまふたア、エ、ツ、意久地なし

の甲斐性なし奴が、見つともない眞似をさすな。

お糸 それでも兄さん、この戀ばかりは。

九郎藏 戀も情も相手次第、どうせ恚うなる腐れ縁、未練残さず思ひ切りスツパリと諦めてしまへ。

お糸 嫌ぢや、／＼／＼。(泣く)

九郎藏 デレ／＼さらすな、嫌も應もない此奴の命はタツタ今、兄が刀の錆になるのぢや。

お糸 ゲツツ。

九郎藏 文左、約束通りよう來せたなア。

文左 オツ、今日の出入りの總勘定、百兩の借りの帳面を棒にする氣で背の内から、汝の居所を探して居たのぢや。

九郎藏 大概こんな事もあらうかと、裏からソツと歸つて來て、様子を残らず聞いて居たのぢや、妹の縁も切れてしまへば、尙更喧嘩が仕易うなつた。ぢやア汝、キリの百兩は。

文左 何遍口を叩かせるのぢや、金が返へせる位なら、今頃こんな服裝をして、磯の匂

ひを喫きにやア來んわい。

九郎藏 よし、そう來れやア此方も追風の帆
ぢや、七面倒な文句は抜きにして、勝負す
るか。

文左 念にや及ばぬこの通り、家重代の兼光
が、(刀の柄を叩き)大欠伸して待つて居る
わい。

九郎藏 幸い外に邪魔のない裡。

お糸 兄さんお前、眞實に茲で若旦那と。

九郎藏 男と男が命の取り遣り、汝やどけ。

お糸 滅相な妾、大事な男の身の難義をどう

まア傍に見て居られやう、待つておくれ。

九郎藏 まだ吐かしやがるな、退け。

お糸 阿呆らしい、若旦那のお身に怪我でも

あつては。

文左 心配ない、其方は退いた。

お糸 何であらうと止めて下され。

九郎藏 エ、ツ、此奴ア煩さいなア、退けと

いふたら。

お糸 嫁ぢや、くモシ、若旦那、この事は

かりは。

文左 何の其方が案じいでもぢや、退いた。

九郎藏 退きさらきにやア汝。

ト、九郎藏、お糸を無理に障子の中
へ押込む。

お糸 兄さん止めて、ア、どうしやう妾。

九郎藏 何かしやがねん、此方へ入れ。

お糸 誰ぞ、誰ぞ來て、ア、――

ト、この臺詞奥にて聞え直ぐに九郎
藏拔見を携けて飛出し。

九郎藏 文左、覺悟せい。

ト、サツト斯り込む。

利腕を把つて、

文左 ドツコイ然うは間屋が卸さぬ。百兩の
代りに大段平の燒刃の金を受けて見い。

九郎藏 イヨ、猪口才な。

ト、立廻り二三合、文左苦もなく九
郎藏の刀を叩き落し、引倒して九郎

藏を俯向けに取つて押へる。

九郎藏 し、しもたア。

ト、勿返さんと藻掻く。

文左 ザア、九郎藏、マダ此上到手向うて見
るか。

九郎藏 ナ、何糞、ウー残念な。

ト、文左一刀附け。

文左 斬ろうか。

九郎藏 ウム。

文左 突かうか。

九郎藏 ウム。

文左 命を取ろうか。

九郎藏 殺せ、サア殺せ!

文左 但し命が助かりたいか。

九郎藏 何を。

文左 生かさうと殺さうと、命を取らうと取
るまいと文左衛門の了見次第好き自由、何
と云分はあるまいがの。

九郎藏 エ、云分はない、殺せ。

文左 オツ、望み通り。

ト、刀を外らして突立て、片手に九
郎藏をグイと引起す。

九郎藏 (呆氣に取られ)之や、何さらすね。

文左 文左が殺しき。

九郎藏 エツ。

文左 九郎藏は死んだ、爰に居るのは身體も
心も余の物、文左衛門と一心同體。

九郎藏 ど、どうしたと。

九郎藏 ど、どうしたと。

九郎藏 ど、どうしたと。

九郎藏 ど、どうしたと。

文左 静かにせんかい、殺す命を助けたは當國田邊、串本、新宮、熊野の灘の津々浦々かけ、磯石を取つては日本一と音に聞えた千石積の一番船頭龍巻の九郎藏が身も魂もしつかりと五十嵐文左が預かつた。

九郎藏 えつ？

文左 この上はもう俺の自由、九郎藏、何にも云はずに腕を貸すか、イヤ心持よう働いてくれるか、返事を聞かう、サア何うぢや

九郎藏 ウーム、之やな濱の旦那が被在つた大船五艘の借主と云ふのは、あの百兩の金に難癖つけ、態と喧嘩に事よせて、命の瀬戸まで追詰めた掲句が、掌返に身體を預かる、死んだ積りで腕を貸せとは文左の畜生、汝や企んだな、俺に一杯喰しやがつたな。

文左 如何にも企んだ、一杯喰はした……それを今更口惜しいと云ふのかい。

九郎藏 當り前ぢやい、常平素から、虫の好かぬ、汝に命の恩を着たのが残念で、残念で……ももたツ、といふて今更自分で死ぬは狗死ぢやし、ナ、何故あの時に一思ひ：

この息の根を止めさせなんだか。文左 フーム、九郎藏汝や、それ程に余が氣に喰はぬのか。

九郎藏 嘘も隠しもない、虫が好かぬか氣に喰はぬのか、譯も理屈もなしに汝と云ふ人間が小面憎うて成らんぢや。

文左 ウム、ぢやアその憎い文左衛門ぢやに依つて飽くまで恩を仇で返し、この上楯を突かうといふのか。

九郎藏 何吐かすね、瘦せても枯れても九郎藏は男ぢやい、憎みは憎み恩は恩、それを忘れて仇するやうな犬畜生の性根は有たんのぢや。

文左 そんなら嫁でも腕を貸す氣か。

九郎藏 ア、情ない、身を切るやうに辛いけれど仕様はないわい。然うして俺に働けと吐すのは濱の旦那に約束した千石五艘の上乗りであらう。

文左 推量の通り、濱、新濱の持船から千石以上を撰抜いた梵天丸、帝釋丸、多聞丸、毘沙門丸、福神丸の五艘の船でこの難風を乗切つて一氣に江戸へ着きたいが望みぢや

九郎藏 ゲツ、この大時化を見込んで江戸へ積み出さうと云ふ、荷物は何ぢや、どんな品ぢや。

文左 (吃となり)九郎藏、汝やその荷物が聞きたいか、よう聞ふて呉れた。コレ仇ある仲は義理深しと、文左が心體打割つて底の底まで咄しをしやう、マア聞いてくれ……

汝も常から知る通り船持痴士の家に生れて一旦は身を持崩した放埒の夢が覺めるとき考へたは眞實の自分の力といふものそれを試しに一働きと思ふ矢先へ蜜柑の豊作、

この大時化、山方の相場は下る買手はなし百姓は困るし一方江戸では來月の八日が輔祭り、それにや是非とも蜜柑がいるのぢや

所が今年はこの紀州から一艘の船も通はぬに依つて彼方の相場は天井登り、爰を見掛けて一ト儲け、危い橋を渡つて見やうと誰にも知らさず親識りの家藏地面、田畑残らず賣り飛ばした金がザツと四千兩

九郎藏 ウム。

文左 直ぐに雑賀の蜜柑問屋七軒へ金を渡しに買占めた高が籠詰めにして十三萬と若干

一つは百姓の難義も幾らか助かるうとかとの二途がけ、積むには五艘の千石船、是であらかたの手管は調ふたが、困り者は上乗りの船頭、之が常の天氣であつたら誰にでも乗りこなせる海路ぢやが、何十年にも珍らしい悪風、熊野は素より七十五里の遠州灘を乗り切るには並大低の腕前ではと、案じ煩い惱み盡した下、の詰りが此方案と、よいか無理は承知で目星をつけた今度の一件、大勢の船方の中から選り出して此方ならと見込んだわ余の鑑定ぢや、見込まれたが因果と諦めて、力を添へてはくれまいか九郎藏どん改めて文左がお頼みぢやがどんなものであるうの？

九郎藏 マア待て文左、待つてくれい話の筋は一通りよう解つた、男らしい汝の氣持も呑込めた上は此方も稼業、金子にさへなる事なら相手の好き嫌いは云ふて居られん、如何にも一番、碇を擧げて眞當に往けば百里の海上、命にかけても乗切つて見せう。文左 乗つて來れるか、引受けてくれるか、有難い、禮を云ふぞよ、恩にも着るぞよ。

九郎藏 ぢやがまア待てい、所で今の一件の咄が出来たといふ五艘の船はもう汝の手元へ廻つてゐるのか。

文左 エツそれは……。
九郎藏 コレ體裁を云ひなてこと、隠したかて不可やせん俺の耳へは筒抜けやで、旦那衆へ約束の船賃五百兩は、マダ一文も納まつてない筈ぢや。

文左 ウ、ウム。
九郎藏 置きさらさんかい、世迷い言は、何の船乗りが器用でも十三萬と云ふ蜜柑の籠を背たろうて海の上は歩けんのぢや、四千兩の資本を卸す前方に肝腎の船を手廻して置かんといふ底の抜けた思惑に大事な身體が投り出せるかい、俺の命を取るの取らんのと餘計なあんだら盡す暇にサ、右から左五百兩の船賃出せる甲斐姓があれやア出して見い、出せまい、この九郎藏の百兩を踏倒したやうには行くまいがな。

文左 イヤその五百兩も初めから、チャンと目的はあつたぢやが、僅かな物の間違いがツイ手違ひの種になつて。
九郎藏 嘘を吐せ、間違ひが手違ひでも、五百枚と云ふ小判の耳が揃はなんたら、傳馬一艘動きはせんぢや、へ容見い、容見いア、氣味ぢや、これで少うし虫が納まつたわい。
文左 吐したな汝、高が五百兩の端の金。
九郎藏 エツ、汝氣は確かなのか。
文左 夜明けまでには揃へて見せる、その時ホ、ホ、吼面かくなよ。
九郎藏 ハ、十日戎の籠の先に光つて居るのぢや間に合はん、玉津島の屋敷も投出された宿なしに二歩金一つピクつかうかい話はこれ限り、用はない、歸れ。

文左 ア、ツ、その五百兩〜(煩悶)。
九郎藏 ヤイ、仙八、仙公居るかト。
ト、障子を開けて早沙の仙八が出で来る。
仙八 何ぢやい〜、兄貴。
九郎藏 貧乏神が舞込〜きつて縁起でもない鹽花蒔いてくれ。
仙八 鹽花よりヤア鹽水で汚れを淨めてこま

文左 乗つて來れるか、引受けてくれるか、有難い、禮を云ふぞよ、恩にも着るぞよ。

さうかい、待つて居させよ。

ト、障子の中から手桶と杓子を持つて出る。

仙八 サア、ザンブリ浴せるぞ。

ト、文左杓の手を掴み

文左 駄つて居りやア宜い事に、悪洒落さらずない。

ト、腕を捻ぢ上げる。

仙八 痛い、タ、タ……

文左 改めてもう一度しつかり念を押して置くが命の揃ふた晩には刀にかけても汝等一統、屹度文左が連れて行くぞよ。

九郎藏 夢にでも澤と見ときさせ。

ト、下手より濱方の番頭新七（五十

歳、羽織着流し、岩井屋と書いた弓張提燈を持ち）急ぎ足に出で来り。

新七 エ、卒爾ながらそれにお在でなされまするは五十嵐の若旦那様ではござりませぬか。

文左 オ、此方は濱の岩井屋の御番頭。

新七 丁度いゝ所でお目にかゝりました、只今藤波様のお屋敷からお約束の船賃五百兩お届け下さりまして確かに受取り申しまし

た。

九郎藏 ゲツ、船賃の五、五百兩を……

文左 伯父の屋敷から届けたとは。

新七 就きましては福神丸外四艘、直ぐにお廻し申します、そのお手筈を願います

これは受取り、此方はお屋敷からのお使いが若旦那様にお渡し申してくれいと。

ト、受取と手紙を渡し、

新七 それでは成だけ早ふお手筈を願いまする。

ト、下手へ入る。

文左 使ひの者の置手紙、ハテ、

ト、座敷に近づき封を切る。

仙八 兄貴。

九郎藏 ウーム、五百兩、今度は俺の方が夢ではないかしら。

ト、障子の中より海目の萬藏が顔を

出し、

萬藏 兄貴々々お糸さんが急に裏口から何處

へ行くともなく飛び出したで……

九郎藏 エーツ、それ所から、どうでもさら

せ。

萬藏 何のこつちやい。

ト、萬藏、首を引込める。この内文左衛門行燈の傍にて愕いて又手紙を讀み返し。

文左 ヨモヤ、と思ふて居たお田鶴殿の言葉の端々、さては我等の望みを成就させやうため意にもない縁を切つて橋本屋から受取つた結納の支度金を其まゝに萬事は知つて知らぬ振りのあの伯父様のお計らい……

ナニ、眞に本意なきお別れ心にもなく他家へ縁組相定め候胸の内、千萬不慥と御憐み下され度、親の許した夫婦の道は二世かけ堅く相守り申すべく鏡か判らん二世かけ堅く相守り申すべくせめては金子御用に御立て下され度……サアした、甚い事をした、かうとも知らず我身勝手から縁切したのは一生の過失、知らなんだ気がつかなんだ、女房を賣つたも同じ金で、急物の夜ぎをつけたといふては心で誓ふた意味が立た

ん、男が潰れる、ア、何としやう、取戻さうにも、濱方の手へ納まつては、もう後の祭り伯父様、お田鶴殿、何とお詫びのしやうもなし、勿體ないとも濟まぬとも、……

が、待てよ、結納は取交しても婚禮までに

はマダ可成りに用意の日数がある筈、その時までは文左衛門が男になるか命を棄てるかヨシ生きて歸ればまた何とか、サ九郎藏、船賃悉らお納まつたらもう云ひ分はあるまいがの。

九郎藏 マタしても大きな口を利くない、やい今度は五艘の船に乗込み命的に生死の海を乗り切らうといふ船方、船子一同の給金。

文左 ゲツ。

九郎藏 五杯の船で七十人の頭数ぢや、死んだら催促のしやうもない、桁に外れた六仕事、前金打つて貰ふかい。

文左 その前金のタ、高といふのは。

九郎藏 喧嘩相手の馴染甲斐、大負けに負け二二百兩、モ一度屋敷のお嬢様が縁組をさつしやらぬ限り、天からも降らな地からも湧いても來んのぢやぞ。

文左 チェ、待つて呉れい待つてくれい、一つ預れて又一つと次から次へと金の入用、抵當で済むなら文左衛門の両手兩足切つてなりとも役立てやうに、今度と今度は、ど

うでも切迫の詰り。

九郎藏 何うぢやお荷主、船頭はじめ水主舵取り、炊しきの數まで揃はいでは船は寛りも同じ事、一寸先きへも出やせんぞよ。

ト、家の背後にて駕の掛聲、息杖の音がきこえ、常夜燈の前を家の背後より、駕昇二人一挺の垂駕と擔いで出で來り、

後の駕昇 オツト、合棒茲ぢや。
前の駕昇 合點ぢや。

ト、駕とまる、垂の中より、

お糸の聲 その船の衆の給金二百兩、若旦那に代つて妾から。

仙八 ヤ、おの聲は……

ト、垂をあげる、お糸紫の金包みを投出し、

お糸 兄さん、受取つて下さんせいなア。

九郎藏 何ぢや〜、汝はまた。

文左 今頃、變つた其姿は？

お糸 何のいのう、かうとは豫て覺悟の上、主の雅儀を見るに見兼ね、隣りのせげんの伯父さんに頼んで大阪の島の内とやらへ勸

め奉公に行きますする。

九郎藏 チツ、汝までが文左の爲めに勸め奉公……

文左 お田鶴殿と云ひ、和女と云ひ、身を棄て、うまで余の望みを、ア、有難いやら情ないやち。

お糸 ア、もし何にも云ふて下されますな、随分おめで、兄さん達者で、駕の衆、やつて……

仙八 そんならこれから大阪へ。

駕昇 今夜は城下で一泊り、オ上るぞ。

同 オイ。

ト、駕は一散に向ふへ入る。

九郎藏 ちつと考へる。

文左 廣言吐くないヤイ九郎藏、金は優しい女の情けで降つて來た、それ受取つたら、モウ外には苦情も云分もない筈ぢや、思へば文左は望みの前に家庫、身代、親類縁者縁組を棄て戀を棄て、生れた故郷は思かな

事、一つの命も棄てる覺悟の大事の首途に汝やまだケチを付けさらす氣か。

九郎藏 ウム。

文左 九郎藏、イ嫉か、オ、應か、執方へなりとも返事をしてくれ。

ト、刀へ手をかける。

九郎藏 俺は初めて負ふた子に教へられ、初めて人間の眞の姿を見せられた、妹が涙の二百兩はしつかりと預つて出島の船乗七十人、一粒よりの腕を揃へて此方が冥途の供をしやう。

文左 乗つてくれるか。

九郎藏 船玉明神、二言はない。

文左 辱けない。

九郎藏 話が極りやア今夜のうちに荷役を済ませ、朝の出汐に船を巻かう、仙八、雑賀の間屋へ使を立て濱の奴等を呼び寄せい。仙八 合點ぢや。

ト、仙八障子の中へ入ると下手より

藤波宮内、好みの扮装にて出で來り

宮内 文左殿。

文左 伯父様。

宮内 お糸の親切、九郎藏の俠氣、委細は小蔭で承はつた、いよく目出度い首途の祝ひに、娘お田鶴が餞別の品。

ト、紙に包んだ黒髪を出す。
文左 さては娘御、二世の夫婦の誓ひを守つて。

宮内 橋本屋への義理、此方への貞女、どうぞ肌身に添へてやつて下され。

文左 添へまするとも文左が爲の守り神。

九郎藏 その一筋を九郎藏が一の帆綱へ巻きつけて沖の魔除けにしませうぞや。

ト、仙八が家の背後より海邊へ出で

高く竹法螺を吹き鳴す。

宮内 ア、目出度うござる。

文左 これで漸う文左の胸の夜が明けました。

ト、九郎藏は髪の一筋を頂き、文左衛門は包みを握つて無量の思入れ、宮内ははるかに、沖をながめる。

波の音、風の音、

早船の艫の音きこえて拍子木。

——幕——

二幕目(1)

遠州灘沖合福神丸の船矢倉

(前幕より三日の後、夜半に近き頃、空は闇)

平舞臺、殆んど一杯が船中、上矢倉の心にて上手寄りに太く抱釘の拵りし帆柱を立てその奥一杯に二十反の帆を張る、柱の前に

一山蜜柑籠を積み、下手は艫の心にて上部

の一部、その蔭に船中へ降りる切穴、艫の

車立の頭を見せ、前側には低く上下を通じ

て二重垣の上部を見せる、帆張の下手奥は

海上を距て、遙かに三河、遠江の山せを見

たる畫割、

矢倉の上には纒、棕桐網の巻たる物、苔を

積重ね、蓆、圓座、四角樹真盆、鉈、その他。

鰯の市松が車立に寄りかゝり唧え煙管にて空を眺め、帆柱の根方に船子の

藤吉、太平、榮助が車座になり暢氣に話をしてゐる。

舷を叩く浪の音、微かに遠く刻の鐘

が聞えて

幕あく。

鐘が鳴やむと、帆の後ろにて

九郎藏の聲 面舵……

ト、下手にて、

仙八の聲 ヨーンロ……

ト、舵の軋る音。

藤吉 オツ、鐘が鳴るな……
太平 どうした拍子にか地方の刻の鐘が聞えるのぢや。

榮助 然う云やア星様の見當がどうやら夜半らしいなア。

市松 ウーム、成程夜半か、それにしては妙な合やなア、可怪しい、どうも可怪しい
藤吉 オイ、船先の頭、お前今ごろそんな所で何をブツ／＼呟いてんね。

太平 此方へ来て悠手とマア一服遣らんせんかい。

市松 何にも知らずに氣樂な事は吐しくさる
汝等には解らないでも、俺やア海の上の荒神様とさへ云はれた男、どうも可怪しい
普通では濟まんぞ。

榮助 ウダ／＼と仕様もない事を云はんすない、こんなお前、樂な渡海はあつた物ぢやない。

藤吉 榮助の云ふ通り、今度の登りはまるで拾ひ物をした様な幸福、それに何が可怪しいね？

市松 汝等にやア氣が注かん解れへんで。

太平 解らな教へてくれんかい、お前の方が餘程可怪しいが？

ト、市松三人の傍に近づき、
市松 情ない奴等やなア、餓鬼の時から盃船で稽古をして白雲頭を汐風に吹晒された船乗に、今夜の天氣が解らんなんて、よう恥かし氣もなう三度／＼米の飯を食らひさらすなア。

榮助 大分えらい頬ぢやなア、何ぼ船乗が商賣でも海の上は化物や、それが一々解る位なら難船する船や一艘もないわい。

市松 生意氣な事を吐すない。難船といふ物は波風の仕業やない、皆んな人間の油斷からぢや、俺が今夜可怪しいと首を捻るのはこの帆を見い、帆を！

藤吉 帆がどうしたへ？
市松 弛るんでしまつて、ベタ／＼に帆柱へ引着いた限りぢや。

太平 當り前ぢやい、今は夜半で風がバツタリ落ちて居るね、沖のアナゼの九ツ風とさへ云ふやないか。

市松 阿呆奴、それは春から夏分へかけてこそぢや、今は十月、かう一時に風ぐといふのが怖しい。

ト、上屋形の蔭(切穴)より岬の多四郎が出て來り、

多四郎 市松、どうしたんぢやい、急に船の足が重なつて、まるで死んだも同様に。

榮助 オイ親父さん、碌でもない嫌な事は云はんで置いてくれ何にしても汝、紀州の雜賀の沖を千石積が五艘ならんで錨を巻き。

藤吉 この福神丸を一番船に、初島へ掛ると彼ちかねた様に日和北が吹つける、半月振りでの登り追風。

太平 出船の幸先ゲンが宜いと、船玉様のお神酒を頂き、帆網を巻いて八合五勺。

市松 違いないわ、日の御崎を越す頃からまた眺へたやうにアナゼへ變り潮を越すと西に變る。

多四郎 巡風に船は滑つて矢を射るやう、大王も伊良湖もあつた物ぢやない、遠州灘の難所も壘の上と同じ事。

榮助 サアそれぢやい、齒を出るまでは珍らしいあの大時化が拭き取つたやうな空に變

つて風待ち一つするぢやなし。
藤吉 考へて見れやアお荷主の旦那は、餘つた程運の宜え方ぢやで……

市松 時に文左の旦那はもう疲てござるのか？

多四郎 寝るところかよ三社の間で一生懸命金比羅様を祈つてござる。

市松 今までは謎へたやうな追風の海、旦那の運も強かつた、九郎藏船頭の運もよかつたが明日、明後日とこの調子で首尾よう運が續くか、どうか？

多四郎 この鹽梅では、些つと何ともものう。

ト、奥にて、
聲 炊きよ、炊きよ……
太平 今頃に炊しきを呼んでるな。

ト、舵の音、
上手の蔭にて、
儀六の聲 ア暗い、暗い、暗なつたぞ——
徳右衛門の聲 霧ぢや、霧が掛つたぞ。
一同 ゲツ。

ト、何れも中腰になる。
市松 オ、ツ、然う云へば海が灰色に……

榮助 ア、ア一ツ星の影もかくれてしもた。

ト、一同不安の色、帆の蔭にて、
九郎藏の聲 取舵ぢや、取舵、トリー舵……
ト、下手にて仙八の聲

仙八の聲 ヨーソロー
ト、大きく舵の音、
上手より船子の儀六、徳右衛門が捻鉢巻にて出で来り、

儀六 沖は暗い、霧がかまつたぞ。
徳右衛門 お船頭の吩咐ぢや皆な、持場を固める用意せい。

一同 オ、
ト、多四郎は切穴へ入り、市松は下手へ入り、三人は苦を展げ、綱を解きなどする、俄かに大勢が入亂れた足音が聞えて、海の汐鳴りの音ゴ——と遠くより次第に近くなる。

儀六 オ、ツ、鳴て来た、沖の汐鳴りぢや。
徳右衛門 いや、油断はならんぞ皆な。
ト、兩人は帆綱へ手をかける、帆の蔭にて、
九郎藏の聲 多治兵衛、俺に代つて磁石を立て、よいか、必ず茲を動かすなよ。

多治兵衛(老人)の聲 合、合點ぢやお船頭。

ト、九郎藏、帆の蔭より荒繩にて厚司の上から肚を締めながら出て来る

藤吉 お船頭、この鹽梅では？
九郎藏 オ、ツ、どうせ普通では済むまいと思ふて居たが案の定、沖も地方も空も海もベタ一面に塗りつぶされた霧の中、今まで後ろに見へて居た御前崎の燈の影も、後から續く友船四艘の帆の色も暗に粉れて消えてしまつた、塲所が名題の遠州灘、然も駿州の横渡り、刻限と云ひ沙先きと云ひ旋風か颪風か、だんだら波か、仙八は舵の座、萬藏は船の守り、市松は船先を構ひ、多四郎は親父の役、皆んなも働け、抜かるなよ

ト、薄く雨の音、風、汐鳴り、船の動搖。
九郎藏 來せやがつたな、ヤイ、胴の間にござる五十嵐の旦那へお知らせ申し、帆を下げい。

儀六 徳右衛門、よしや。
ト、兩人綱を繰り、仕掛にて帆が下ると、藤吉、太平、榮助が手傳ひ片付ける、雨次第に烈しく、帆が下が

ると、奥には船の舳先が見へ、二本の鎧網が張られ、海月の萬藏が素裸にて網を扣え、よき所に五十嵐文左衛門、襦袍を着、刀を杖に突立ち、船の向ふは霧と暗とに冥殿たる書割嵐の音。

九郎藏 オ、旦那か？。

文左 エ、ツ、九郎藏を首め船中一統、必ず共に心配するな、案じるなよ、よいか、文左衛門の目の黒い内は船も碎かぬ、人も殺さぬ、矢倉の用意は整ふたか。

九郎藏 如才ござんせんわ、龍巻の九郎藏がこの大波や大嵐と一番戦ふて見せるのぢや文左 下の手空の船子共には船立八挺櫓八挺で押切らせ、傳馬込から海の口まで建切れば、百萬騎の敵にもビク／＼せぬ五十嵐が堅めた城も同様ぢや、まやかし、あやかし悪龍、魔神どんな物でも災厄をしやうとも男の力で突切つて……突切つて見せる。

ト、次第に大雨、大風吹き起り、仕掛にて背景の暗き中に激しき波を見せ、それを動かして船の揺れるやうに見せる。

文左衛門舷に立ち、

文左 オ、ツ荒れるわ、狂ふわ、虚空に渦巻く嵐の勢ひ、天に逆巻く波の猛り、宇宙、乾坤、陸地、海原、ありとあらゆる此の世の姿が今東かの間に滅び盡して了ふのか、呪はしくば呪へ、祟りたくば祟れ、茲には強い逞しい、深い大きい人間の力がある。

ト、奥の舷より、浪高く船中へ打込む仕掛け。

九郎藏 ソーラ、艦ぢや。

三人 オ、。

ト、藤吉、太平、榮助が下手へかけ込む。

又一ト浪どつと打込む。

九郎藏 今度は二の間ぢや、垣立を防げ。

二人 オ、。

ト、儀六、徳右衛門上手へ入る。

多治兵衛 (雨に濡雲)ウワツ、お船頭、かう眞暗で船がカブつては肝腎の磁石の針が西とも北とも東とも立てやうがなくなつた。

ト、下手より、メリ／＼と物の壊れる音、直に仙八が轉り出で、

仙八 旦那、ア兄哥、もう不可ん、舵が碎けた。

た。

九郎藏 何、カチをヤられたか。

ト、又巨波が冠り、舷の壊れる音、船中にて、「ウワツ」と人聲、上手徳右衛門が板子を小脇に、垣立が崩れた、胴中をブチ破られた。

ト、叫んで下手へ入る。

九郎藏 旦那、此奴は大分手剛いぜ。

ト、下手より多四郎が駈出で、多四郎 危い、危い、脚を輕うせなんだら船と一緒に眞逆様ぢや。

萬藏 命にや代へられん、蜜柑の籠を投込めへ。

三人 ソレ。

ト、萬藏、多治兵衛、仙八、多四郎が跟めき／＼籠へ手をかける。

文左 何さらすのぢや、待てい。

ト、大喝。

仙八 でもお荷主。

多治兵衛 このまゝでは。

文左 余の言葉を何と聞きさらした、……文左の息のある内は、文左の船、文左の荷物コレそれを蜜柑ぢやと思へばこそ粗相な眞

似もさらしくさる、蜜柑の色は黄金の色、その籠の中の一粒、一粒はやがて文左の寶となる、金ぢや、小判ぢや、二歩金ぢや、指一本でも觸へて見い、汝等何奴も此奴も龍神への血祭り、人身御供に斬込んで了ふぞ。

ト、一刀を抜く。

四人
ワツ!

ト、四人下手に飛退る。

文左 よし、左程船の脚が重けれやア、蜜柑の代りにこの品を!

九郎藏 ゲツ!

文左 かうして目に物!

ト、上手の二本の鎗綱を切拂ふ。

九郎藏 ぢやア此方、大事な鎗を二挺まで。

文左 海へ沈めて船を助ける、今ぞいよく絶対絶命、文左衛門が必死の覚悟(襦袍を脱ぐと、下に白無垢、南無阿彌陀佛と書いた着附)死出の旅路か、出世の首途か、今

一刻の命の瀬戸、磁石は利かず、舵は碎け執方か執方と解らんでも、余の向くのが江戸の方角、サ、この帆柱へ荒縄で余の身體

を括つてくれ、福神丸の胴體が柱一本になるまでも、生きて望みを全うするのぢや、サ、巻いてくれ、巻きつけんかい、エ、ツ此上は。

ト、自身に荒縄で柱へ括る。

九郎藏 執念深いと云ふのか、根強いといふのか、旦那はどうでも江戸表へ。

文左 當り前ぢや、着いて見せる、往つて見いで、今日までつくした、さまんくの苦勞

の數を考へて見い、余の今度の望みには五千兩に近い金の力、これ丈の蜜柑を造り出した紀州山方何千人といふお百姓の力、海へ乗り出す船の力、七十人の船子の力、あらゆる力が集まつて五十嵐文左只一人の大きな力になつて居るのぢや、波や嵐や天や地や森羅萬象ことんく、征服しやう、人間の力試し身體と命のつゞく限り、傍目をふらずに突き進むのぢや。

ト、九郎藏進みより。

九郎藏 偉いな旦那、此方はまるで神様ぢや

ト、縋りつく。

文左 エ、ツ、その神佛よりモツと強い物を

持つて居る、九郎藏、皆な安心して働け
ツ……
ト、刀を振り上げる。
木の頭。

一同

よしや。

ト、銘々身仕度する。

暴風、土砂降る雨、波高く、船動揺する。
柱がゆれる。
この模様よろしく。

—— 暗轉 ——

二幕目(二)

伊豆下田柿崎辨天の濱

|| 前場の翌朝、仄暗き頃 ||

平舞臺、正面、下手に辨天鳥の社、赤き鳥居を見たる浪打際、入海を距て、向ふ山裾に連る下田遊女屋の家並(燈入)、の背景、よき所に捨石。

浪打際には浪に打上げられたる小船の舷、木片、板片、棒枕などが散ばつて居る。

漁師の甲、竹釣を持つて流木を引寄せ、同じく乙、木片を集めて繩で束にしてゐる。

浪の音。

遠く遊女屋の三味線太鼓の騒ぎが聞
へて、

幕あく。

甲 何うでえマア、大分損られたらしい鹽梅
えだぞ。

乙 その管だア、夜半アかけて近頃になえあ
ア大荒れだでちぼけな船やア大抵壊れてし
まつたろう。

甲 南の濱ぢやア鳥賊船え二三艘沈られたつ
て騒いで居たどが、全く普通の風ぢやアね
え、天狗時化つてえ奴だ。

乙 暗くつてよくは解んねえが、オヤ矢つ張
り此奴も漁船らしいだぞ。

甲 浪を叩へた内海でさへ此の始末、沖の荒
灘アどんなだが…?

乙 怖つかつた事だろうとも、定めし何十艘
といふ、巨けえ船がみんな沈んで了つたに
違へねえだ。

甲 ダガ町やア珍らしく賑やかでねえか。
乙 大概鮪船の奴等がよ、騒いで居やがるに
違えねえ。

ト、下手より背中包を背負ふた物
賣の女、丙、丁が出て來り、

丙 ハイお早うごせえますだ。

丁 御精が出ますだに!

甲 オ、お前達今頃から何處へ行くだア!
丙 赤間の温泉場へ出掛けるだが、昨夜はマ
ア何んて怖ねえ暴風雨だかのふ。

乙 どうだよ、外浦は?
丁 沖の方さ墨い流したやうで、波の高さ何
十丈あるか解らねえだて、目え開けて見ち
やア居られねえだよ。

丙 ダケンどお前、あのお荒波の中ア湊口か
ら千石船一艘入つて來て、千貫岩の沖へ掛
つてゐるだアよ。

甲 エツ、千石船が入えつた。

乙 幽靈だきつと、幽靈船だよ。

丁 だつて消へもしねえで掛つてゐるだから
不思議でねえか、俺達確かに見て來たよか
ら!

甲 眞の事か。

丙 嘘だと思ふなら見て來るがいよ、に!
丁 稼いで來ますだアよ。

乙 氣い注けて行くだぞ。

ト、女二人上手へ入る。

甲 フム、當てにならねえ、咄だぞ。

乙 どうだかのら。

甲 あの荒波突切つて遠州灘を乗るつてえ事
ア人間業ぢや及ばねえ咄だぞ。

乙 ぢやアま幽靈船にして置いて一休みや
るべえか。

甲 ウム焚火でもやらかすだ。
ト、束を片隅に積んで置いて兩人下
手へ入る。

同じ鳴物。

上手より仲居一が「島屋」と書いたブ
ラ提燈を掲げ、萬藏、市松、(少し酔
つてゐる)が咄しながら出て來り。

一 眞實に後の人達は何を愚圖々々して居な
さるのかねえ。

萬藏 愚圖々々と云やア、先刻元船まで使ひ
を出した、仲居まで歸つて來よらん。

市松 一體全體、彼奴等ナ、何をさらしてけ
つかんのか。

萬藏 オツ提燈が見える。
一 お幸さんが歸つて來ました。

ト、下手から仲居二同じくブラ提燈
續いて仙八、多四郎が苦り切つて出

一 ぢやに依つて妾の宅まで。

二 お供をしやうぢやござんせんか。

萬藏 仙八頼む、一緒に來てくれ。

仙八 往くには行くが後船の様子がハツキリ

解るまで、俺ア酒斷ち、女斷ちぢや。

市松 えゝわい、ソコは呑込んだ。

多四郎 ぢやアまあ一緒に……

一 些つとも早う。

二 外のお方がお待ちかね。

仲居二人 サア往きませう。

ト、一同仙八を和めすかして上手へ入る。

騒ぎ唄にてこの道具。

——暗轉——

二幕目の(三)

同じく港内の千貫岩

■前場と殆んど同じ時刻■

平舞臺、正面奥深く一杯の海遠見、海の下ふ下手に飛鳥の影、上手より細長く伊豆の岬の尖端が下手へ突出て山が遠く黒く見え暗鬱たる空の色、鳥影の背後から岬の前へ仕掛けにて帆掛船が出るやうに眺える、前

側下手は浪打際の際、海中へ上手奥より舞臺中央まで突出たる岩組その出端が巨きな千貫岩にて岩の裾には烈しく浪が打上げて居る、そして岩組の背後上手奥の海上に碇泊して居る福神丸の船の姿が大きくハツキリと見へる、まだ夜明け前。

暗轉の内、浪の音、千鳥の啼き騒ぐ聲。

舞臺が明るくなると千貫岩の頂上に五十嵐文左衛門が腕を拵き一心に沖を視つめて突立つて居る。

騒ぎの三味線太鼓の音が風に運れて近く遠くに聞える。

文左 志州の鳥羽から、この下田まで七十五里の遠州灘、夜半の颪風に吹き惱まされ、黒白も辨かぬ闇の中に激浪、怒濤と戦つて命の瀬戸を死物狂ひに福神丸だけは乗切つたが一陣々々吹き狂ふ風と波とに押しへだてられ、影も姿もチリ／＼ペラ／＼、安否生死の心許ない後船四艘 無事であつたら今頃は沖へ帆影を見せさうなもの、若しや船中力つきて五十餘人の命を載せて底の藻屑と沈んだ果てが紀州蜜柑の幽霊丸

と悲しい浮名を残すのか……見えん、何んにも見えん、風は追手に變つたやうぢやが空は夜明けの汐曇りまばらに残る星影も沖へは何と光つて居やう、嵐は云はず、海は語らず。

ト、岩をかすめて鷗二羽飛び去る。

文左 翼なければ飛んでも行かれず、ア、氣にかゝる、様子が知りたい、確めたい。

ト、飛鳥の背後より仕付けてに第一に白帆の船が現はれる。

文左 オツ、帆ぢや(凝視)白帆の船、帆影と見えるが、實正か、迷ひか、幻か現か、まやかしの影か、眞實の姿か? 帆ぢや、確かに白帆、(ト第一の船に次で第二の白帆の船が見える)アツ、續いて後からマタ一つの白帆、二艘になつた、(第三が出る)オツ三艘、四艘と數まで揃ふて、入つた、く紛ふ方ない紀州船、余の持船、次第に近づく矢倉の造りは、梵天、帝釋、多聞、毘沙門これで、五艘が目出度う揃ふた。

ト、下手より九郎藏、松火を振り翳して出で來り。

九郎藏 旦那、沖を見さつしやつたかい。

文左 祝た、余の望みはモウ成就したも同じ事、悦んでくれい。

九郎藏 チツ、此方といふ男は肚の立つ程運の強い生れ性、日本一の幸福者ぢや。

文左 イ、ヤ九郎藏、遣ふ〜。

九郎藏 え、ツ、遣ふとは何が？

文左 これは運でも幸福でもない、凝り固まつた眞實の人間の力の尊さ、文左の力が天と海とを征服したのぢや。

九郎藏 ぢやア此方何處までも然う思ひ詰めるのぢやな。

文左 我と自分の強さを知つて居ればこそ、

……これから相州三崎を越し、品川まではタツタ半日、江戸へ着いたら文左衛門、蜜柑の儲けは愚かな事、智恵の限り、力の限り富を築いて一代に百萬兩の寶を積むぢや。

九郎藏 百萬兩……

ト、下手にて。

沖の暗いに白帆が見へる。

ト、鐘の音。(刻の鐘)

あれは紀の國蜜柑船。

九郎藏 オ、あの唄は。

文左 余の出世を祝ふてくれる、天の聲、神々の聲、世間の聲。(又鐘なる)フ、フ、フ、ト、更に手を翳すを。

木の頭。

文左は沖の船を視入る。

九郎藏は松火を合圖に振照す、沖の下手の方ホノ〜と夜明けの色鐘の音。

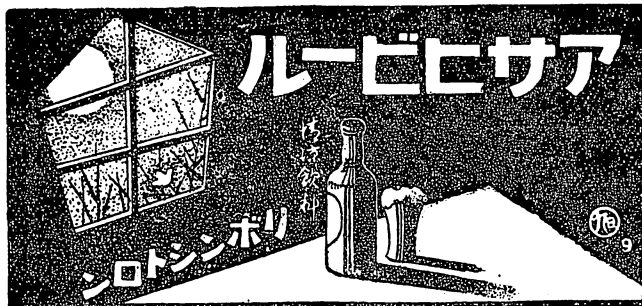
兩人屹と顔見合す。

この見得よろしく。

浪の音、遠くに鶏の聲、騒ぎをかすめて……

拍子木。

幕





石原生

本 號の編輯は夏期休暇中のこと
ゝて、一層の努力を要しました。

その甲斐あつて御覽の通り堂々たる
充實振であります。これも一編に
御快諾下された諸家の御厚意に
據るものであります。

◇創作欄には行友李風氏の『出世
の船唄』をいたゞきました。百三
十枚に亘る近來の力作であります
中座九月狂言として延若一派によ
つて上演されます。

◇本誌最初の試みとして技藝座第
三回公演、次の時代の會主催の合
評會記事掲載いたしました。速
記術に心得のない私の要領筆記で
あります、勿論文責は私にござい
ますが、各諸家の御高説を冒瀆い

たしました段は幾重にもお詫び申
上げます。

◇高安博士の『現代歌舞伎青年俳
優に與ふ』の一文は、技藝座劇
後寄せられたもので、若き俳優諸
彦へ特に熟讀を希望する。

◇『盲兵助』の考證は、東京より伊
原青々園氏、川尻清潭氏、大阪よ
り石割松太郎氏、高谷伸氏にお願
ひした。又『權上』は中内蝶二氏
高原慶三氏が御執筆下された。好
劇家の期待に酬ゆることが出來て
編輯子も嬉しい。

◇秀調、壽美藏、龜藏の三優から
大阪出演に臨んで、本誌へ特に寄
稿下された。幸に御一讀を乞ふ。
この際東京大歌舞伎三花形のため
に何分の御援助を切望いたします

◇實川延若氏より東京明治座の樂
屋から締切間際の本誌へ『盲兵助』
について一文を寄せられた。名人
の藝談また近頃愛好すべき一文で
す。

本號の表紙は山口草平畫伯に畫

差支へがあつたので已むを得ず編
輯部の大塚克三君に腕を振つて貰
ひました。江戸浮世繪を見るやう
な素張らしいエロチックなものに
なりました。何分の御批判をお願
ひいたします。

◇三宅周太郎氏の玉稿は本月號に
戴けませんでした、來月は文學
座について御寄稿下さる由、お手
紙いたゞきました。

◇編輯後記の筆を走らせてゐる所
へ、長谷川時雨氏から御玉稿が届
きました。大變に残念ですが今月
號には何うしても間に合はぬので
來月號へ掲載いたします。

◇十月號は秋期特輯號である。プ
ランも樹てゝある。本號を送りだ
すと同時に早速取りかゝる、御期
待を乞ふ。

新刊紹介

劇文壇の巨匠眞山青果氏の長篇戯
曲『坂本龍馬』はこのたび新國劇事
務所出版部より單行本として(定
價壹圓)發賣中の處各方面より熱
狂的歡迎をよけつゝあり。

昭和三年九月一日發行
月刊『道頓堀』 第三年
第廿四輯

誌代は前金でお拂ひを願
います。

郵券代用は一割増にて御
註文を願ひます。

御相談の上廣告掲載の需
めに應じます。

定價 金參拾錢 (郵五厘)

昭和三年八月廿八日印刷
昭和三年九月一日發行

大坂市南區久左衛門町八番地

編輯者 松竹合名社
發行者 鳥江 鏡也

大坂市東區船場町二丁目三〇
印刷者 山上 貞一

大坂市東區船場町二丁目三〇
印刷所 中央堂印刷所

大坂市南區久左衛門町八番地

松竹合名社内

發行所 道頓堀編輯部

電話 (二四〇番)
(六八五番)



【意注御物セニ】

▲大掃除には、衛生上是非
本品をマカれよ！

▲牛馬の蠅、蚊除に本劑を用ゆ
れば、牛馬は夏ヤセぬ

▲犬のダニ、猫の蚤
驅除に

▲鳥の羽虫、豚の虱
効力絶大

▲衣類書齋の虫

定 小 罐金拾圓 内地送料貳圓
半磅罐金貳圓 内地送料十貳圓
價 一磅罐金貳圓 内地送料十八圓

【りあに店商の處到】

今津佛國
理學博士發明

便所臭氣止

▲防臭、殺虫の効力

カンブラ油、片臘油の二倍

▲芳香を發し

▲臭氣を止め

▲ウジを殺す

便所其他不潔な場所へマカれよ！
(四百五十瓦罐入送料共金六十五圓)



防臭
驅虫

イマツ
芳香油

家庭用
園藝

イマツ
殺虫劑

▲植木、花卉、盆栽等

家庭園藝害虫驅除劑

石鹼を加用せず、その儘水に溶かして使
用する様便利に調製、一般家庭の園藝用
に至極便利

▼効力普通イマツ殺虫劑と同様▲

定價
一磅罐 金壹圓五十錢
半磅罐 金壹圓十貳錢
小 罐 金拾圓 四錢



專賣特許

今津佛國理學博士發明

衛生試驗所證明

▲蠅、蚊、蚤

其他

虫類退治には

世界的に賣行旺盛なる

イマツ蠅取粉に限る

▲南京虫用には別に

特製イマツ蠅取粉(赤罐)あり



若く明るく顔になる

トクト白粉

阪大 京東
店商平賛尾平

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和三年八月廿八日印刷
昭和三年九月一日發行

金參拾錢
(郵一錢五厘稅)